出版とも云ふべきものは、「愛の島への旅行記」であらう。だが、その出版當時よりも、後年の作、「綴語法に於ての問答」、悲劇「デイダミヤ」及びテレーマークの詩の飜譯と「古代移動的及現代の詩形學」などか、彼のオリヂナルのものであり、且つこの作者の重きをなしてゐる。このトレヂアコーロモノーソフ フスキーと時と場所を同じくて改造期の文壇にミハイル、ワシリエヴイッチ、ロモノソーフ があることを知る。

天才ロモノーソフ——農夫——詩人——星學者——鑛物學者——地質學者——化學者——物理學者——政治經濟學者——であるその天才ロモノソーフは實にかうした改造期の中に生存してゐた數多の文人、學者の群から一頭拔んでてゐた巨匠であつた。ロシヤ文化の來るべき成熟と發達の期待を一人で脊負ふてゐたのは彼であつた。ロモノソーフの作物は彼の先驅をなしたさま〳〵の原始的古典文學期の扉を開すための鍵であつた。そして又彼の後から來る新らしき十八世紀、十九世紀文學の新紀元の門戸を開くための鍵でもあつたと云つて差し支へないと思ふ。彼は文字通りに「露西亞近代文學の父」であつた。外來文學の重錘からと外來科學の重石から、自由なるロシア文學とロシヤの科學とを救ひ出して導き、ロシヤ人をして獨立の立ち場に進めた第一人者であつた。彼は彼自身が大學校の教場あり、專門學校の實驗室であり、應用の工場であつた。彼は一種の百科的天才であつたと云ひ得るほどの多藝多才博學の詩人であつたのだ。そして詩の上に於てトレヂヤコーフスキーやスマローコフ

が貢献したより以上のものを彼は詩以外の科學に於ても成し遂げてた。同時彼はロシヤの社會を他國人の利益と經濟的專擅から救ひ出さうと努めた大膽な戰士であつた。彼はピヨトル大帝の遺業と精神とを彼の力の及ぶ範圍の中に晩年まで實現することに努めた精力家であつた。十八世紀、十九世紀に於けるロシヤの新らしく文學上の言語を創造した功績も亦彼に歸すべきものであつた。かくロシヤ文學の新紀元の先頭に立つたロモノーソフ（ミハイル）は一七一二年、デニソーヴカに生れた。それはホルモゴリンに近いアルハンギエル縣にある小さい村でつあた。彼の父ワシリー・ドロフイエヴイッチは貧しい農夫で、傍ら漁業に從つてゐた。ロモノソーフは幼年時代から漁業に馴らされてゐた。寒い北國の荒つぽい粗野な、不毛な、しかし、神秘な、そして壯嚴な風物はロモノソーフの性情を養ふことが多かつた。彼の母親エレーナ・イワノーヴナの感化も少ないとは云へなかつた。彼女は同じ地方のある小さい村の牧師の娘であつたが、彼女は少年のロモノソーフを殘して早世して了つたのである。彼は母の死後、彼の家にいつまで留ることが堪えられぬ苦痛となつて來た。と云ふのは、彼がその癖であつた讀書に耽るのを嫌つた繼母は、ある時は彼を戸外に突出して、寒氣と餓に任せてゐたことさいある位だつたから、彼は間もなくその地方の役人に一年間モスクワへ行つて居ることの許可を乞ふたのであつた。それは直ちに許されたがしかし一年のうちに再びその村へ戻らなければ、逃走した農奴と云ふ名義で捕縛されることになつたのである。それを彼は覺悟の上でモスクワへ出て了つた。モスクワへ着いた彼は、スハレヴ塔の附近にあつたある學校に籍を置いた。しかし、やがてザイコノ・スバスキー學校へ轉じた。そしてその學校を卒ゆる前に既にそこの課程を完了した十二人の生徒の一人に選ばれて、ペテルスグルグへ送られることになつたのであつた。ペテルスブルグから獨逸へ派遣された彼はマルブルヒで有名なウオルフに敎はり次にフライブルヒでヘンケルなどについて學んだ。學んだ學課と云ふのは一切の部分的科學から言語學に及んでゐた。かくて一七四一年に再びペテルスブルグに戻つた彼はそこで、ピヨトル第一世の精神の實現を計つたのである。彼は一七六四年に死んだ。彼の著作の中に、彼が死ぬ少し前にはカザリン二世が、禮を厚くして親しく彼の寓居を訪れたと云ふことが書いてある。科學の方面に於ける彼の活動は暫く措くとして、その文學上の事業に就て極く簡單に述ぶれば、當時のやうに、あらゆる意味に於て手近に手本とするやうな作物のなかつたロシヤに、文學者としての彼の出發は、止むなく外國文學から門を潛つだ。從つて、彼は在來の西歐文學の形式に導かれやうとした。しかしそれは西歐の擬古文學の純然たる外形の摸倣に過ぎなかつた。ロモノソーフの或詩はかうした關係から全然擬古體になつてゐる。それでも、長い間、カンテミールやトレヂアコーフスキーやスマローコフに苦しめられた世間は、未だ嘗てこの作者が見たこともないコンバットの恐怖を表現すべく工夫された質問と感嘆に充ち充ちた技巧の單純な詩を、よろこんで歡迎したものである。そこでカンテミールやトレヂアコーフスキやスマローコフなどが苦心し

た詩形學の問題が彼の詩によつて解決されたと云ふことによつても彼は又世間に受けたものであつた。ロモノーソフは理論ばかりでなく實際に於てロシヤ韻律詩の中に字音の力がいかに秀れて使用され得るかと云ふことを試みて見せたのである。その他にも、短詩の要點が寺院用のスラヴ語の使用によつて、それを純文學的に效果あらしめ且つロシヤ語の純文學的な淘化に就ての工夫を試みて、いづれも相當の結果を收め得たのである。その外にも、外來語とスラヴ語との混合した從來の文詞から、注意深く言葉を選り分けた功もあつた。このロモノーソフを通じて擬古主義の文學は長い間ロシヤに行はれるやうになつた。その彼の作品の全部はビヨトルやエリザベタに至る二つの頌詩によつて代表されてゐると私は思ふのである。彼はさま〳〵の形形の詩節を用ゐて、その詩節を叙事詩的に、戯曲的に書いたが、それよりも詩人として彼を有名ならしめたのはやはり短詩であつた。彼の抒情的短詩の特徴とも云ふべきものは、二つの悲劇「タミールとセリム」及び「デモフォン」によつて會得出來るだらう。また彼の著作「ロシヤ詩形學の理論に就て」の一論文は、彼が獨逸留學中に、ペテルスブルグへ送られたもので、彼は只その要素に於てトレジアコーフスキーに相共通點を持つてゐると云ふだけで、その枝、葉に至つては全然かけはなれてゐると云ふことが出來る。たとへば、六音步詩其他の韻律が、何故一定數の字音によつて制限されなければならぬのか自分にも解らないと云つた彼の言葉を見ても解る。彼の詩に於ける修辭學は、最初にロシヤ語で書かれた。その後ラテン語に變へられた。しかし、そうしたことは彼が詩人としての獨立した仕事とは云へないのである。何故ならば、そうしたものゝ上に與へられた一定の規約とも云ふべき法則は、元來カウシンやホールやガットシエッドやヴォルフなどによつて作られたものを、勝手に抄採したに過ぎないからである。それに就て一寸述べたいのは、このロモノーソフ時代には、ロシヤ文法と云ふものが、たゞ一つあつた。（尤も一七五五年には彼自身でロシヤ文法を編纂したが）それは、アダドウローフによつて作られたもので、その他の文法書は皆スラヴ語で編まれてゐたのである。ロモノーソフが作詩の上に用ゐた文法書は、ギリシヤ語とラテン語を基礎的根底として作られたメンチスモトリツキーの文法であつたらしい。猶この他に彼は文法をして、宗教上の事柄にだけ拘泥して用ゐられてゐる弊をのぞき、且つその誤謬を正して文法そのものを一個の獨立した科學とするまでに完成した。ロモノーソフ文法が即ちそれである。ロモノーソフは文學上の言葉を二つの樂團に分つて一つを方言、或は普通會話とし、一つを寺院用のスラヴ語とした。「ロシヤ語に於ける寺院書の價値に就ての考察」に見るやうに、ロモノーソフは彼の天才を以てしても、やはり文學上の傳說と云ふのか、兎に角、さうした學者的傾向から自分自身を解放することが出來なかつたのである。この著述に於ても彼は形式と云ふものを三つに分け、高、中、低として考へてゐる。スラヴ語とロシヤ語に共通な言葉は高、殆んど用ゐられてはゐないけれども、すべての人々に解るやうなズラヴ語であるならば、中、純ロシヤ語は低の部に

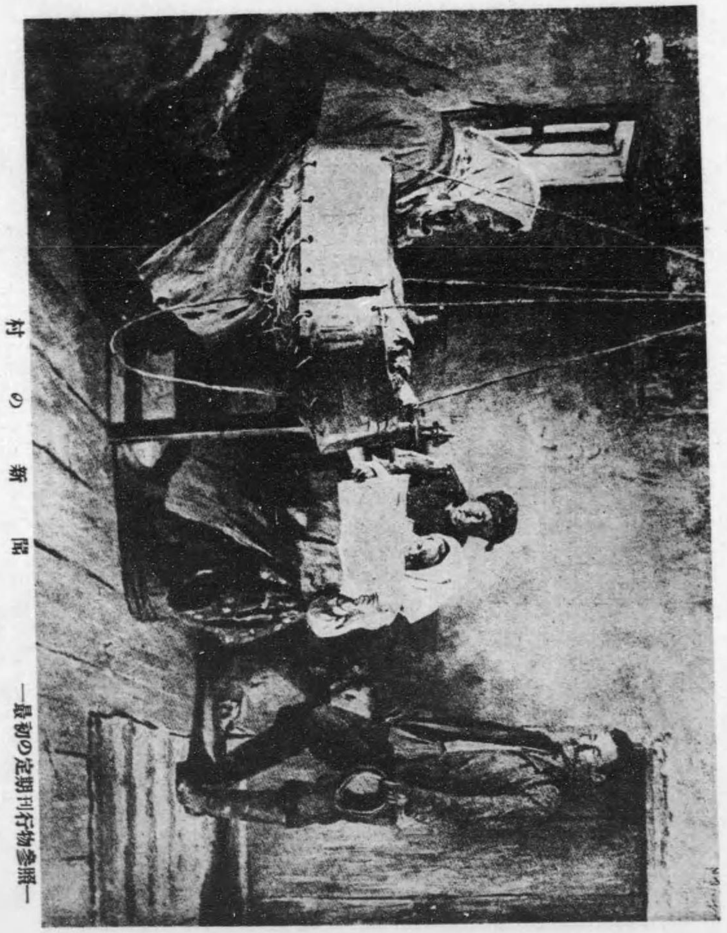
入るのだと說いてゐる。今日から見てこの瞬間的時代の過程に文學と科學とは宗教から完全に解放される可くして解放されたが、文學と科學とは當時の社會に於て二つの勢力としての獨立的學術とはなるに至らなかつた。その偉大なる天才と社會的にも科學の上に多大の貢献をなしたと自覺するロモノーソフも要するたゞ時代人として見られなければならぬとするならば、このロモノーソフとは互に相

スマーロコフ　敵視してゐた文學の上に反對者であるアレキサンドル・ペトロウイッチ・スマローコーフもこの改造の時代から近古藝術の黄金期として輝き出たカザリン第二世への過渡期に於ける時代人の一人であつたと云ふことに何人をも異議を挾ぬことだらうと思ふ。だが、彼はロモノーソフ程多方面に渉る才人ではなかつた。しかし、たとへば、今、テオフアン・プロボコーウイチを修道士文人とした意味に於てスマローコフはロシヤ文學に於て、純粹の最初の純文學と稱することが出來るだらうと思ふ。スマローコフは一七一七年に生れて一七七七年に死んだ悲劇作者であつた。彼は生れ落ちる時からの貴族であつた。そして、そう云ふ階級の青年と同じ道を踏んで陸軍元師ミュニッヒの貴族士官學校に入つたのである。士官學校に於て受けた教育はしかし彼のためには何の役にも立たなかつた。彼は其處在學中から別の方面——即ち文學に趣味を見出したのであつた。そしてエリザベス朝に陸軍司令官を勤めてゐたラズモーフスキーの副官に進み、その機會に女帝と相知るを得たと云ふことである。彼の作物は、彼が一七四七年に「コレヴイ」と云ふ悲劇を出版するまでは、まるで世間から顧みられなかつたものであるが、この悲劇が書かれたゝめに彼は一躍して、その當時の、形ばかりの文壇に持て囃され且つそれが女帝を喜ばすこと斜めでなかつたものと見えて、その後女帝はトレヂヤコーフスキーやロモノーソフにまで悲劇の執筆を命じたほどであつた。エリザベタの後にアンナ・イヴアノーヴナが即位すると間もなく、ポーランド王オーガスタスからペテルスブルグへ伊太利俳優の團體がつかはされたときに、女帝イヴアノーヴナはその伊太利俳優に實演を命じた、そして當時の劇場の監督になつたのは、スマーロコフであつたのだ。（演劇と戲曲參照）

カザリン二世の黄金時代に於ける第一人者とも云ふべき作者は、デニス・イワノヴイッチ・フオン・ヴ

フオン・ヴイジン　イジンであらう。彼は古代武士の家柄に生れた。彼の先祖の一人は、一七〇九年から一七一〇年にかけてピヨオトル大帝の時代にピヨオトル・フオン・ヴイジンと名でリヴオニア戰爭に於て子供のデニスと一緒にロシヤへ虜になつた。その孫の代からロシヤ人になつて了つたので、彼れの自叙傳によれば彼れは恐ろしく嚴格な父親を持つてゐた。彼れはその父によつて家庭教育を受けて、數年大學に學んだのであるが、大學在中には主として西部歐洲の寓話の飜譯をつゞけてゐた。丁度その頃、この大學出身者の作品をのみ出版する人があつて、彼の寓話はその人の手によつて出版されたらしいが、彼の「自叙傳」によれば、彼はその飜譯の出版による報酬としてホルベルヒ寓話で價

格にすれば凡そ五十ルブルほどの書籍を貰ふと云ふ約束になつてゐた。ところが、面白いことには、彼はその時受取つた書籍の挿繪がひどく卑猥なもので、彼の生道心の心はこれがために恐ろしく惱まされたと云ふのである。その大學を中途で廢めて、セミョノーフスキー聯隊に入つた。彼の才能が認められたのは、それから間もないことで、彼は或る重任を帶びて、外國へ遣られた。それから閑散の身の上になる頃、デルジャヴインやクニアジュニンや俳優のドミトリエフスキーなどゝ交るやうになつた。この自叙傳が彼れの鳥瞰圖なのである。さて、長月日の外國滯在後一七八二年に彼ははじめて文學の生活に入つたと云ふことが出來る。と云ふのは、その年から創作に沒頭して餘念なかつたのである。「若者」と云ふ喜劇もその年に書かれた。それは彼が外國滯在中に作つた「騎兵隊」より以上の喝采を博したところの云はゞ、彼の出世作であつた。喜劇「若者」(或は未丁年者)はロシヤに於ける農奴所有者の生活を描いたもので、その描寫の力の深刻なことは、その作自身が喜劇であるに拘はらず、一つの大きな悲劇的恐怖を與へたものである。たとへ、作者が、さま〳〵の場合に於て、それを喜劇的に導かうとするためのユーモラスがあるに拘はらず、この喜劇に於ては、人間の全性情は、一つの重苦しい農奴制と――一般人の心や頭や感情を支配するところの農奴制の犧牲、とに、世の中のあらゆる美と善とを呑みつくし且つ法律によつても制することの出來ない專横を敎へ込むものだと云ふ意味の主張として受取るとき、それは勿論恐ろしい喜劇には相違なからうと思ふのである。



村の新聞　―最初の定期刊行物參照―

このフォン・ヴイジンと時代を同うじて當代文士の不完全な性質を代表する一方に於てはまたフォン・ヴイジン其他の人々よりずつと掛け離れた個性の鋭さを示してゐたものに、このフォン・ヴイジンの友人であつたガブリエル・ロマノーヴイッチ・デルジャヴインがあることを記憶せねばならぬであらう。彼は陸軍々族の貧しき貴族の家に一七四三年に生れた。そして一般の青年貴族が受くるところの正規の教育を受けた後に軍隊に入つたが、十年の勤務の後相應の位置を作つたが、それまでは別段に彼に就て人と變つたところはないのであるが、一七六四から一七七二年までの生活に私たちは彼の極端な癈頽的性質を認めぬわけには行かない。ずつと後に來るべき詩人ミハイル・レルモントフにもかうした傾向を見るが、いづれも心の奥底には確乎とした道德の礎石として良心があつて、いかに放埒に、また自棄的にすべての「善」と云ふのを投げすてた破壞の生活に於ても彼は徹底した放蕩者となり切ることが出來なかつたロシヤ人なのである。一七四四年から一七七五年にかけてロシヤに起つた所謂「プガチョーフの謀叛」に際して彼はカザンとオレンブルグに於ける暴徒の鎮撫のため政府の秘密委員の一人に任ぜられてこの二地へ向つてゐたが、そうした新らしい任務上の關係からヴイアゼムスキー太公と近づきになり、ヴイアゼムスキー太公の取り立てゝ國會の進行係となることを得た。しかし、この太公には極く秘密である一人の貧しい娘と結婚したことが太公の耳に入つて彼は太公と絶交せねばならなかつた、だが、彼の社會的地位は一六一六年の八月の死まで依

デルジャヴイン

然として保たれてゐた。丁度ヴイアゼムスキー太公と仲違ひをした頃、彼は眞實に文學生活に入つて一身を文學に献げたと云ふことが出來る。その頃までに、短詩「神」と「ムルザの幻影」が書き終へられてゐた。晩年に彼が行政官の職を奪はれて、他に生活の資料を得る方便がなくなつた時から、彼の文筆は職業化して來た。彼が「プガチョーフの謀叛」後第一に發表したのは「メシュチェンスキー太公の死」と云ふ數齣の短詩で、引つゞき「王位に生れた子供の北國に於ける出生」が出た。そしてこの二篇の詩によつて彼の文學的才能は一般に認められるやうになつた。その女帝即位に當つて女帝のために送つた詩「フユリスタの寫繪」などは女帝自身の作にかゝる物語の模倣だと云ふ説もあつたが兎に角デルジャヴインが晩年に向つて殘した作物は可なりの數に達した。デルジャヴインの詩の特徴その他は彼の作物を充分に讀破した後でなければはつきり呑み込めない。彼はその作物を通じて見れば、どこまでも、ホラシオやアナクレオンやオシアンの感化を受けてゐることゝ、彼が、中年期の放逸な生活に入つたところのエピキユリアンに對する心の耽溺を否定するわけには行くまいと思ふ。かやうに當代の文學者が外國文學の影響を、その生活に或はその作物に受けたものはまたヒツプリトス・フボグダノヴイツチ・ボグダノヴイツチに於ても見られる。ボグダノヴイツチがダシユコーフ伯爵夫人の世話でモスクワのある外國語學校に教鞭を執つてゐる頃はヴオルテールの熱心な愛讀者であつた。就中ヴオルテールの「リスボンの破壞」を讀み耽つてゐた。かくて彼がペテルスブルグへ轉じたころには、既に飜譯者としての名譽を贏ち得てゐたのであるが、彼の處女出版「二重の幸福」と云ふ詩に於て、彼がその作に、黄金時代の科學による文化生活の功果、法律と寺院の權力による人生の償罪に關する思想などは正にヴオルテールから來た感化が現れてゐることを見遁すわけには行くまいと思ふである。しかし、彼は、かうした作物で有名になつたのではなかつた。彼が作者としての立場を確立し得たのは彼の後年の作「ドウセンカ」と云ふ寓話でなければならぬ。しかもそれすら、彼はラフオンテーンに感謝すべき多くのものを持つてゐるであらう。このボグダノウイツチが、當代のロシヤ社會に於て、いかに文學と云ふものが急速の發達に困難なものであつて、それは絶へず遲々として進歩して行くべき性質のものであると云ふことの證人であつた如くに「ロシアド」「ヴラジミル」「ヴエニスの尼僧」「科學の果實」等の作者で、當時の社會から、從來傳統された文學上の理論に從つて作られた擬古抒情詩を完全なる標目としてロシヤへ移植した第一人者であり且つその抒情詩に於ける前者デルジャヴインの位置が希臘に於けるピンダルのそれであるやうに、希臘に於けるホーマーと稱されたミハイル・マツヴイエヴイツチ・ヘラスコーフ（一七三三年――一八〇七年）によつても明らかに證據立てられる。そのヘラスコーフに次ぐイヴン・イヴノヴイツチ・ケムニステル。ヴシリー・ヴシリエヴイツチ・カプニスト。私達はロシヤに新聞雜誌のやうな定期刊行物が生れる時代に右のやうな生氣あり才能ある幾多の文星を持つて居つたのである。ケムニステ

ケムニステル　ルはデルジャヴインの推賞せる文章によつて永久に亡びない一代の名文家であつた。その名文は「心理學」と云ふ寓話によつて今日まで傳へられてゐる。同樣にカプニストはその幾多の單純素朴な抒情詩や短詩(例へば、「奴隷制度に就て」とか「ガザリン二世による農奴廢止に就て」など)と共に處女出版とも云ふべき諷刺「態度に就て」『ローマの盛榮』等に因て彼の

カプニスト　事業と名とはいつまでも亡びないであらう。彼の作風は小じんまりとして明快に優佳であつた。彼は自然描寫に忠實な寫實主義の採るべき態度を示してゐる。それは當時の作風としては最も目新しきものであつた。その寫實主義の宣傳として見ても彼の重なる作悲劇「イアーペダ」は生命があるであらうと思ふのである。かゝる事情の下にあつたロシヤの社會には、來るべくして容易に來なかつた印刷物の普及時代は漸くその緒についたのである。カテリナ第二世統治下のロシヤの社會は文化の發達とそれに伴ふ個人の修養の最も容易であり從つて旺盛な時代であつた。ロシヤの「元祿」として見ても敢て不當ではないほど、人間の生活にゆとりが出來て風俗は優美に、文物は典佳に、民心は平和を謳歌してゐた。そのカテリナ第二世は西歐の社會情態の研究者であつて、西歐の社會組織の長所を取り入れる發起者の主なる立役者であつた。其長所の一つとして彼女は西歐の文學の長所を認めた、同時に如何して左樣に發達したかとふことに迄想到した。その結果としてロシヤに於けるジャーナリズムの鼓吹は先づ彼女の周圍即ち宮中から始められたのである。(尤も一七四一年――一七六一年のエリザベタ朝に先づそうした先驅は行はれてゐたが)で、今私は當時を起點として發行された新聞雜誌及びその事業に係る文學者達の略傳とその主義主張を述ぶる煩を避けて、只一通り是等刊行物の名目と發行者(概ね當代第一流の文人であつた)とその消長を表記して一段落をつけたいと思ふのである。何故ならばこの一小冊に於ける私の眼目は露西亞文學のそうした歷史を總まくりにして行く處にないからである。

「勤勉な密蜂」(月刊)(スマローコフ)
「有用に費す暇」(週刊)(貴族士官團體)
「自由の時間」(月刊)(モスクワ大學)
「ためになる戲樂」(同)(モスクワ大學)
「パルナサス山の囁」(一七七〇)
「勤勉な蟻」(一七七二)
「饒舌家」(一七七二)
「藝術家」(ノヴイコーフ)
「資庫」(一七七四)(ノヴイコーフ)
「モスコヴスキヤ・ヴエデモスチ」(一七六〇)(ギムナジヤ)

「なまけもの」(一七六〇)(ノヴイコーフ)

「ロシヤ文人の歴史辭典論集」(一七七二)(ノヴイコーフ)

(この他にもまだ幾多の刊行物で廣く知られてゐないものがあるに違ひない。私は手許にある參考書を繰つて一渡り目についけものだけをこゝに擧げたに過ぎない程度だから。)この新聞雜誌に於て、ロシヤ文壇と讀書社會とを啓發した人はやはりスマローコフであつた。彼はロシヤ最古の新聞及雜誌記者と云つて差し支へない。スマローコフが、そう云ふ計畫を始めてから一時にその亞流の刊行物が出來た。そしてその刊行物の發行者であると共に執筆者として雄名を走せ、後に筆禍を買つて獄に投ぜられた者にノヴイコーフがある。スマローコフはさうでなかつたが、ロシヤの新聞、雜誌をして政府ノヴイコーフとはまるで沒交渉の一大王者に育て上げ、そしてそれに恐るべき公論の權威と權力とを與へたのはこのノヴイコーフであつた。彼は無冠の帝王であつた。このノヴイコーフに關する興味ある逸話の一つとして當時云ひ傳へられた事がある。それは、出獄したばかりの彼がぼろ〳〵の羊皮の着物を纏ふて故郷へ戻つたときに、彼の家族は勿論のこと、彼の友人、村人などが、その羊皮の衣を着たまゝの彼を捕へて、盛大な出獄祝賀會を催して彼の勞苦後の憔悴せる心を慰めたことである。彼等は狂喜の有樣で彼を迎へた。仲には彼の奇妙な姿を眺めて泣き出す者さへあつたと云ふことだが、それは云ふまでもなく、ノヴイコーフが新聞及び雜誌經營中に與へたところの幾多の便宜や親切を忘れずに恩に着てゐたからだと云ふ話だ。右のやうな刊行物に新生命を吹き込んだ「ヨローツパ新報」(ウエストニック・エヴロピ)「モスクワ新聞」の發行者としてのみならずセヴシンやコストロフやオゾレシモーフやデルジャヴインやカブニスト以後の文壇に於ける大立者としてカラムジンに就て一通りのことを述ぶれば、第一に彼は(私がこの一小冊子に於てそれを二つ分けて一つを傳說カラムジン俗謠に一つを私が最もこのロシヤ近古文學に於ける特殊時代と見てその研究に費してゐた)ガラムジン以後の詩壇、その傳說俗謠の一つ「ミユロンのイリヤ」の作者であるとなされてゐることであらねばならぬ。彼が歐洲巡遊以前の作品は彼が試作時代に屬すべき飜譯に過ぎなかつたのである。二十五歲で漸く再びロシヤへ歸つて來た。時代はカテリナ第二世の末期に近づいてゐた。歸國早々にして文壇へ打つて出た彼は既に立派な自分の、獨自の世界を開拓した藝術の持ち主であつた。最も主なる彼の著述は、彼が詩人としてゞはなく、獨立せる歷史家として著作された「ロシヤ帝國全史」であらう。彼はこの一大著作に前後二十三年餘を費したのであつた。この精力家の提言(「饒舌るやうに書け。だが軌範的文章家のやうに書け」——その意味は從來の作家の文章に缺けてゐる「單純」と云ふこと「自然的(ナチユラリシモ)」と云ふこと「生氣」と「銑鍊」と云ふことを鼓吹すると同時に、それは成るべく敎育者が使ふやうな上品な、ロジカルな文句でなければならぬと云ふ意味の事を云つたものである)を想ふ度に私は、彼が文章道に施した絕大の貢獻を考へずにゐられない。カラムジンはロモノソフのやう

な文章家であつた。「宗教書を用ふるの是非」と云ふ一論文に見るが如く彼は當時の作家としてその文章の型や氣分に就て最も腐心した人であつた。また紀行文家としても從來の僧侶が企てたものとは全然形式と根本の傾向とを異にした新傾向のものを殘してゐる。「ロシヤ旅人の手記」が即ちそれであらう。が、かうした文章上、傾向上、型の上、言葉の上の革新以外に彼を記憶する何物かゝ當時のロシヤ文壇に注ぎ込まれたものとすれば、それは正にロシヤ最古の「センチメンタリズム」でなければなるまい。カラムジンの事業を大觀すれば先刻も一寸云つたやうに歴史の研究發表であると同時に一方に於ては、文詞の改革であり、ロシヤ文壇への「センチメンタリズム」の紹介であると限定しても差し支へない。彼は彼自身が一個のセンチメンタリストであつた。それは一つは彼が歐洲歴訪中に受けた西歐文學の影響でもあるだらうが、大體を云ふとカラムジンは恐ろしく感情に强弱性を持つた生れつきの人間であつたからだ。「感情的であると云ふことはいづれの作家の特徴でもあり、且つさうなければならぬ」と云ふのが彼の持論であつた。其センチメンタリズムの傾向は彼の作「哀れなリーザ」や「貴族の娘ナターリア」などに明らかに表現されてゐる。この二篇は物語りである。それまでに獨立せる物語を持たなかつたロシヤの社會は、この二篇に對して特異の賞讃を投じたことは云ふまでもないことである。このセンチメンタリズムの潮流は、カラムジンの主義の承繼者イヴン・イヴノヴイツチ・ドミトリエフとウラヂスラフ・イヴノヴイツチ・オジオロフによつて傳統された。前者はその「センチメンタリズム」を史謠と抒情詩に傾けた。後者はそれを戯曲に注いた。前者には「我が生涯の回顧」がある外に「流行を追ふ妻」や「狂想家」などの小話風の物語がある。しかしそれ等は彼が愛讀したラオンテーンやヴォルテールから借りて來たもので、彼が本來の面目はやはりかうした諷刺よりも詩、小唄、諷刺詩にあつたと云ふべきであらう。また後者には、彼が一七九四年にそれを提げて文壇の生活に入つた「エロイズからアベラールへ」の英雄の詩の後に、有名なアデンの「オエヂプス」や「フインガル」や「ドミドリ・ドンスコイ」などの悲がある。勿論それ等は全部詩劇であつた。このうち「フインガル」は古代ゴール族をモデルにしたオシアン風の作で、彼は北國のアチールを描かうと試みてゐる。この悲劇はこの悲劇を上演したセメヨノワ女史(後にゴガーリン公妃)の力にあづかつて評判になつた。

ドミトリエフ

オジオローフ

最後の「ドミトリ・ドンスコイ」が出版されたのはロシアがナポレオン第一世と戰火を交へてゐる中であつた。(一八〇七年)ロシヤ人の愛國心は非常なものであつたが、その愛國心の一つの現はれとしてこの「ドミトリ・ドンスコイ」は書かれたことは疑ひもないことであらう。この當時には國民の愛國心を鼓舞するために種々の作物が續々として發表された。(クルコースキの「ボジャルスキ」もそのうちの一つであらう)、その時分には、このオジオローフはまだ彼の師匠とも云ふべき格のデルジャヴインの眼中にはなかつたのである。オジエローフは元來がフランス人であつて、それがロシアへ歸化

したもので、今でこそロシヤ語で種々の作物を發表してゐるのが、彼のロシヤ國語彼のフランス語よりも數段劣つてゐる。さうした極く些細な問題に拘泥した文人等は最初あまり相手にしなかつた。そのゝちにフランス文學の模倣からやゝ脱しかけた是等の悲劇は遇然の時機に出會つて目醒しい歡迎を受けた。「尤も、「ドミトリ・ドンスコイ」の中に現はれて來るドミトリ・アレキサンドルや、ママイやゴルシカ生れの男(韃靼人)には當時の興奮せる人々によつてさま〳〵の缺點を發見されたゝめに、化の悲劇ほどにあまり受けなかつたと云ふ話である。だが、悲劇作者としての彼の名はこのアレキサンド第一世の時代の文學史上から到底切り放すことの出來ない情況にまで、「センチメンタリズム」はロシア文學の主潮へ竿さして來てゐたのであつた。

ミユロンのイリヤ　(カラムジン參照)

王立の町キエフの嫻佳なる太公ウラジミルの宮邸に、數多の皇子や貴族や力强き勇士や、彼等の勇敢なる護衛兵やすべての商人によつて貴き祝宴が開かれた。

「美しの太陽」の歡びは斜めでなかつた。或る者には町々を、或る者には他の街々を、或る者には村々を、ある者には部落を與へた。

イリヤには貂皮の襟つきの貂皮の外套を與へた。

だかイリヤはそれを有難くも思はないし、賞美もしなかつた。

彼はそれを臺處で着たり、その裾を煉瓦の床の上に引き摺り廻つたりしてから云ひ出した。

『俺はあのカリン王の蛇の野郎の黄色い捲髪を引つ掴んで引き摺り廻してやる。丁度この貂皮の外套を引き廻すやうに。この外套の上に青い酒を注ぎかけるやうに、あいの煮えくり返る血潮と一緒に彼奴の熱い心臓をさらけ出してやらう』

だが、黑い顔の召し使ひはその言葉を美しき太陽ヴラジミル太公へ告げて了つた。

『イリヤは妾の臺處にゐました。そして貂皮の外套を引き摺り廻し乍らヴラジミル樣の黄色い捲き髪を掴んで引き廻すとか、外套の上に青い酒をたらして、この通りにヴラジミル太公さまの心臓を彼の白い手で引ぬいてやると云つて居りました。』

するとヴラジミル太公は怒り出して雷のやうな聲で怒鳴つた。

『やよ！　汝等英雄共！　イリヤを我が牢獄へ連れて來い、そして鐵格子を穿めよ。そのまはりに樫の薪を積んで砂を盛り上げよ』

この話を英雄達はイリヤの處へ持つて行つてこの場合自分達の立場を察した上で助けてくれ、でないとヴラジミル太公はどれほど怒り出すか知れないからと願つた。

イリヤは彼の良馬に乘つて、

いそ〳〵として牢屋へ向うた。

そこへ來ると彼は「雲落し」から降りて
チエルカシアの鞍と鍍金の終頭を外し、彼の栗毛を神の意に任せて放ちやつた。
それから彼は首斬り場へ下りたが、
英雄達はヴラジミル太公に命ぜられて彼を取り逃がさぬやうに固めた。
これを聞いた公妃アプラキシアは、
深い墜道を掘りぬいて、この老カザーキ・ムロンのイリヤへ、
砂糖水とパン菓子を持つて行つてやつた。
イリヤはそこに三年の長日月を坐り通した。
そのことが龍王カリンの耳へ入ると、
カリン王は黄金種族(遊牧民)の大勢を集めて、
キエフの町へ乘り込んで、
アプラキシア妃を拉つて自分の妻にしやうとした。
各四十人の皇帝とその妃、各四十人の王と王妃には、四萬の軍勢が率られることになつた。
彼等は急流ドニープル河に沿ふて陣を張つた。
どつちからもキエフの町までには百里は充分にあつた。

犬畜生のカリン皇帝は彼の折り椅子に腰かけ乍ら、
白鳥の翻筆で匆々と排戰狀を認めてゐたが、そのインキは純金で、その紙は赤い天鵞絨。
それから彼は寵愛の一等いゝ走り手を選んで、
その排戰狀を渡し乍らかう命じた。
『お前はキエフの町へ行くのだ。だが、あの白樫の門からは入るな。街の城壁を跳び越えろ。そこに馬をつなぐな。直へ白石の宮邸へ入つて來け。扉あけろ。だが、締めてはならぬぞ。そしてヴラジミルに敬禮をしてはならぬ、お前の帽子をとることもいらない。そうして彼の前に立つて、黄金の卓上にこの排戰狀をたゝきつけてヴラジミル太公にかう云ふのだ『さあこの排戰狀をとれ、そして中に何が書いてあるか讀め』とな。それから『矢のやうに眞つ直ぐなこの街の道路を清めて神の寺々の屋根からあの不思議な十字架を引き下ろして我々の良馬をそこへつなぐために寺の中へ馬小屋をこしらへろ、それからこの大理石の宮殿を清めておけ、でないと我々お客さんは大勢なんだからな。そして近くの小路に桶を積み重ねろ、何故なら我々の偉大なる主人カリン王はこのキエフの町に王となつて、アプラキシア妃と結婚をするのだからな』
カリンの命令通りのことが行はれると、
ヴラジミル太公はその返答に柔順な手紙を書いて云ふには、

『汝犬畜生のカリン皇帝め！　道路や宮殿を清めて、甘い酒を醸るから三月の休戰を承知してくれ』

カリンは休戰を許した。

ヴラジミル太公は苦悶にたへかねて行つたり來たりしてゐるばかりだつた。

彼の澄んだ眼からは燃ゆる涙がこぼれ落ちた。

彼は絹布でそれを拭き乍ら云つた。

『老ガザーキ・ムロンのイリヤも今は亡いし、信仰と故國のため、神の寺院とキエフの町のために戰はふと云ふ者もないし、またヴラジミル太公の自分を守つてくれさうなものもない。どうしたものかしら』

すると妃は云つた。

「ね、殿樣！　あなたの忠實な僕をあの深い牢獄へやつて、イリヤがまだ生きてゐやしないかお覽になつてはいかゞですか」

『お前は馬鹿な妃だなあ！　俺が今お前のその大きな首をお前の肩から引き拔いたとして、あとからまた首が生えて來るか？　どうしてあの善良な勇敢な男が三年後の今日まで生きてゐるものか？』

さうは云ふものゝふと氣にかゝるので彼は自身で牢獄へ行つて見た。

そこにイリヤが甘水や蒲團や、溫い掛布にかこまれ乍ら聖書を讀んでゐるのを發見した。

イリヤの前に腰を屈めて禮をした彼は

自分のためばかりではなく、やもめや孤兒のために、敵を防いでくれと乞ふた。

そしてイリヤを彼の白い手にとつて導き、

自分の卓子の側へつれて來て、

出來るだけおいしい飲み物や食べ物を與へた。

そこでイリヤは彼の良馬に鞍おいて、

まつしぐらに進んで行つた。

この善良な若者が馬に乘るのは見えたが、

走り出す影げは見えないほど早く、

平野には只煙ののぼるのが見ゆるばかり、

よき馬「雲落し」の蹄に踏まるゝ地上には、

泉がほとばしり出た。

彼は山の崖に登り、

老カザーキは四方を見渡し乍ら、
留守をしてゐるロシヤの英雄達を探さうと思つた。
すると東の方に當つて白い天幕を見つけたが、それはアリヨシヤ・ポポヴイッチが、
ネウイダの樫からレヴアニドフの分れ路へ、そこからアラッイルの白い石の方へ來る姿だつた。
彼は雪白の天幕を倒し、
彼が良馬に食はせるために大麥をこがし、
二十尋の棒を立てゝ黄金色の總を下げた、
それは美しく立派に見せるためではなく英雄同志がする合圖であつて、
平野の守りをしてゐるアリヨシヤ・ポポヴイッチを呪はれたる韃靼人等に知らせるためであつた。
遠い彼方から、遙かに遠い彼方から、
その樫の木のほとりへ、分れ岐へ、その石のそばへ、
ドブルイニヤ・ニキチチもやつて來る樣子、旗をひるがへし、二つの總を示し乍ら、
同樣に他の英雄達もやつた來た。
そこでイリヤは棒の上に三つの黄金色の總を下げ、
彼の馬頭に絹の手綱を打ち投げた、馬に麥食はせるために。

かくて白い天幕の中に入つた。
そこに聖きロシヤの十二勇士は席について食事をはじめたのである。
一同が立つて接吻をし合つた。
そしてイリヤを心から歡迎した、
それから又坐り直して飲んだり食つたりすると、
イリヤは彼の使命を一同に告げ渡した。
すると彼の名づけ親サムソン・サモイロヴイッチが答へた。
「否！　我が愛する敎子！　我々はキエフの町とヴラジミル太公と妃とを守る爲に馬に鞍くことはしないだらう、ふん！　彼は多勢の貴公子貴族を抱へてゐる、そしてそう云ふ人々に彼は肉や飲み物や物品を與へてゐるが、我々はあのヴラジミル太公から何一つ貰つた覺えがないからな」
『それはあなたのためによくないだらう』
とイリヤが口を利くと、それを切つかけに、人々は口論を始めた。
一方に於てはヴラジミル太公、
貂皮の外套に身をつゝんで、
キエフの町をあちこちと彷ふてゐる。

休戰の期限が切れかけて、英雄達がやつて來ないからだ。
かうして道を歩るき廻つてゐると、
彼の甥エルマク・チモフイエヴイッチが、
居酒屋の暖簾をくゞつて飛び出して來た。
そしてヴラジミルに向つて、自分こそ勇敢な馬と、九十プードの鎖かたびらと九十プードの重さの槌矛とを携へて憎い敵に向つて乘り込んでやらうと云ひ出した。
『お前は大體小つ葉天狗の小僧だよ。お前なんか今まで槌矛を握つたことさへないではないか』
とヴラジミル太公が云つた。
『もし馬を下さらなければ、伯父さん、私は歩いて行きますよ』
そこでヴラジミルは說き伏せられて、
厩にある馬をエルマークルに選ばせた。
そこには又彼が必要だと云ふ武器もあつた。
若者は直ちに大急ぎで出掛けた。
だが、鎖子鎧があまり錆びてゐたので、
煉瓦の床の上に叩きつけて、

錆を落して了つたのだ。
そこでエルマークは良馬に鞍置き、
ネヴイダ樫のほとりの城壘へ乘りつけて、十二人の勇が黃金の草上で將棊を差し乍ら遊んでゐるのを見つけた。
その時、イリヤは貂皮の被ひの下の魚の齒の寢臺に眠込んでゐた。
エルマークは困つたが、あらむ限りの力をしぼつて怒鳴つた。
『おゝそこにゐたのか、老カザーキ・ミユロンのイリヤ！　あのキエフには夥しいパンがあるのだ。だが、誰一人あの町を守らうとする者がないのだ。』
すると老カザーキが云つた。
『濕つた樫の木へ登れよ、若いエルマーク、そして旗をかざして敵を招き寄せろ』
エルマークは濕つた樫の木に攀ぢのぼつた、
大勢の敵がすぐ目についた。
そしてづん〳〵進んで來るのもわかつた。
その重さのために母なる大地は、
打ちふるへ歪みたわんだ。

この「灰色の狼」はその大勢の數を流石にこの長い春の日にも見定めることが出來なかつた。
黒い鳥は更に長い夏の日でさへ、その軍勢の頭上を飛び越えることが出來なかつた。
また秋の日永さへもその軍勢の頭上を赤色の鳥が突つ切つて行くには短かいものであつた。
エルマークは素早く樫の木から飛び下りて、彼の良馬に打ち跨り、
その軍勢へ向つて駈け出した。
イリヤは三日三晩眠通しに眠込んだ。
その間に若きエルマークは韃靼人と獨りで闘つた。
食べる暇も飲む暇もないし、馬を休ませる時間もなかつた。
『あの濕つた樫に登つて見ろよ、ドブルインカ。そしてあの若僧のエルマークが斃れてゐやしないかどうか見屆けろ』
樹上に、ドブルイニャは大勢の敵とも一つ何かを見つけた。
飛んでゐる黒鳥でもなし、
舞つてゐる白鷹でもないが、
それは、この畜生共に向つて跳りかゝつてゐる勇敢な若いエルマークであつた。
この話をイリヤに聞かせると。

『さあ立て、汝等ロシヤ英雄よ！』
と老カザーキは叫び出した。
『良馬に乗つてあの敵の軍勢へ押し寄せろ、鐵の拒釣を提げて、若きエルマークの肩越に彼等を捕へるのだ。
そして彼奴等をとつちめるのだ、『お前は今日朝めしを食べたね、さあ我等は晝飯にかゝらう』
でないとあの若僧が殺されて、英雄になれまいからな』
そこで、アリヨーシヤは強い鐵釣を提げて突進したが、
若きエルマークは三度敵に追ひ立てられた、
アリヨーシヤは天幕に戻つて來た。
ドブルイニャも又同樣だつた。
そこでイリヤは自分で今度は出掛けたのだ。
彼は百年の老樫のやうにどつしりと馬に跨つて。身ゆるぎもせず、エルマークの首すぢを引つ掴んだ。
『お前の勇敢な心をしづめろ、今度は我々が動く番だ』
と云つた。

輝く鷹は今、かくて、鵝鳥や白鳥や小さい灰色の候鳥うやうな家鴨の上に舞ひ下つた。

かやうにして聖きロシヤの一人の英雄は、韃靼人等の種族の中へ押し寄せて行つたのである。

彼は敵を馬蹄にかけた踏み倒すのだが、

それはまるで、草刈りが草を刈るやうだつた。

すると良馬「雲落し」が人間の言葉を利き出した。

『おゝ、汝力强きロシヤの英雄！　お前は勇敢に敵をやつつけたが、とても征服することは出來まいぞ。何故ならば、あの犬畜生のカリン皇帝はもつと大勢の偉大なる勇士や女戰士を抱へてゐるし、その上、彼は三つの大きな濠を平野の中に拵へてゐる、お前がもし、この種族共に向つて突き入つたら、お前も私も諸共にその濠の中へ陷込んで了はねばならぬ。最初の穴からはお前を乘せて跳び上ることは出來る。その次の濠からも、しかし、第三の濠からはたとへ私が跳び出すことが出來てもお前を乘せゐることは出來ない。お前は一人濠の中に殘されるだらう。私はお前が眠つてゐる間に、彼等が濠を作るのを見屆けて來たのだからな、そうして見屆けてゐたから物を食べる暇もなかつたのだ』

この言葉が老カザーキには面白くなかつた、彼は白い手に絹の鞭を振り上げて、

馬の脇腹をぴつしりと打つた、

『この謀叛氣のある畜生め！　俺は貴樣に食はせたり餌つたりしたではないか、それにお前は俺を平野の中の濠の中へ棄てゝ行かうとするのか！』

そうして彼は良馬「雲落し」の忠告を聞入れなかつたのだ。

かくて乘り込んだ、

馬蹄や彼の鎗先で敵を打ち斃しながら、

それでも力は衰へなかつた。

第一の濠に彼が陷ちたとき、

彼の良馬は安全に彼を脊に乘せて跳び出した、再び乘り込んだ。

かくて第二の濠が現はれた。

その濠からも彼は遁れることが出來た。

第三番目の濠から「雲落し」は跳び上りさま、一目散に平野の彼方へ遠く逃げ出した。

だが、イリヤは乘せてゐなかつた。

すると惡韃靼人等は老カザーキの身邊へ一時に迫つて來て、

彼の素敏つこい足を引つぐゝり、

白い手を縛り合せて、

麻の天幕の中に控へてゐたカリン皇帝の處へ引つ立てた。

『これ、老カザーキ、ミユロンのイリヤ！　お前のやうな若僧が又どうしてたつた一人で、この我々の軍勢へ入り込んで來たかの？』

とカリン皇帝が訊ねた。

それから彼の護守兵に向つて、

『イリヤの白い手を解いてやれ、彼の素敏つこい足の枷を外してやれ』

忽ちさうされた。

『さあ俺と一緒に卓子につくがいゝ。イリヤよ。俺の砂糖酒や麥酒を飲んでくれ。俺の花衣を着てくれ。そして俺の娘の婿になつてくれ。そしてこれからヴラジミル太公には決して仕へるな。カリン皇帝の俺の從臣になつてくれ』

『俺にもし鋭い劍があるならば、犬畜生のカリン皇帝の首にお見舞ひ申すのだぞ！　だが、俺は貴樣の云ふことは聞きたくない。俺は神の寺院を守り、ヴラジミル太公と妃とキエフの町とを守るのだ』

とイリヤは答へた。

その時彼は天の彼方から落ちて來る聲を聞いた。

『イリヤよ、汝の手をあげよ』

イリヤは兩手ををあげて、狂暴なるカリン皇帝の首を打ち落し、

天幕を跳び出して韃靼人等を亡ぼし始めた、しかし、もはや彼に手向ふものは誰もゐなかつた。

だが、彼は自分の仕事が容易なことでないことを悟つて、

一人の韃靼人の足を引つ掴んでぶら下げ乍ら、それをふり廻して韃靼人等を叩き潰し始めたのだ。

『こいつなか〳〵潰れないところを見ると強いぞ。

そして引き裂けないところを見ると、なかなか固く出來てゐるな』

とイリヤは呟いた。

丁度平野にさしかゝると、

彼はその釣してゐる韃靼人を遠くへ投げ棄てて、

勇しく野牛の角笛を吹き鳴らした。

何故なれば、彼の澄める眼は霞み、

熱い心臟は燃えて、

黑夜と白晝との區別さへつかなくなつたからだ。

彼の勇敢なる良馬はその笛の音を聞きつけて、遠くから主人の側へ駈けつけて來た。

そこでイリヤは馬に打ち跨り、

高い山に登り乍ら東方を見詰めると、

そこには勇ましい多くの馬が白天幕の側に立ち並んでゐたのだつた。

彼は馬から飛び下りて、

火のやうな矢を强弓につがへて云ふ。

『燃ゆる箭よ飛べ、あの向ふの白い天幕へ！　屋根を突き拔いて、武裝をしてゐる我が義兄の白き胸を貫け、だが、あまり大きな疵をつけるな、小さく引つ掻け、何故なら彼は眠つて休んでゐる、俺はたつた一人こゝに立つてゝゐて何事も出來ないのだから』箭は辷り走つてサムソン・サモイロヴイリツチの白い胸に突つ立つた。

そこでこの聖きロシヤの光榮ある英雄の深い眠りを醒したのである。

彼が目を見開いて、

天幕の屋根が飛び去つてゐて、

小さい箭が自分の胸に刺つてゐるのに氣がつくと、

彼は素早くはね起きた。

『おい、そこにゐる我が力强きロシヤ英雄達！　皆急いで良馬に鞍置いて、早く乘つてくれ。俺の義弟から武裝した不吉の報せが舞ひ込んで來た！　それは一本の箭だ。俺の胸に六プードの重さの十字架が置いてなかつたつたら、俺の大頭は夙の昔掻き破れてゐたのだぞ』

聖きロシヤの英雄達は直ぐ樣馬に鞍置いて、キエフの町を指して乘り出した。

イリヤは高い山から下つて十二勇士と落ち合つた。

そこでこの十三人の勇士達は韃靼人等へ向つて進み出すのだ。

五時間ばかり是等善良なる若者達は歩きつゞけ乍ら、

走りつくらをするのに一人とて殘されたものがなかつた。

それから、再び一同は落ち合つて、

銘々に自慢を始め乍ら云ふのである。

『もし天へ登る梯子があるなら、我々は登りたいものだね、そして天に居る敵を滅ぼしたいものだね。』

彼等はやがて韃靼人を殺し始めたが、あゝ！

二人、三人のものが、殺されてゐる場所からむくり〳〵と起き上る。

すると是等ロシヤ英雄達はお互に矛を交へ始めたのだ。

互に突き刺したり、打ち斃したりして、
到頭ロシヤ戰士は死んで了ひ、
そこに生き殘つたのは、たつた一人、エルマーク・チモフイエヴイッチばかりだつた。そこでエルマークはキエフの町へ戻つた。
嫻佳の太公ウラジミルは彼にかう訊ねた。
『俺は今どう云ふ風にお前に禮を云つていゝか知らないのだ、可愛いゝ甥よ？　お前は國がいゝか、黃金の寶がいゝか！』
若きエルマークは答へた。
『伯父さん私はお願ひがあります、それはこの市中の茶屋にありとあらゆる麥酒と葡萄酒とを無代で飲ませて下さい』
ヴラジミル太公はそれを許した。
だが、ミユロンのイリヤ・ドンの老カザーキは、あの呪ふべき韃靼に捕はれて、彼の良馬「雲落し」は石になつて了つた。
そして老カザーキの骨は聖き寶物とはなり終つたのである。
（註）　イリヤは或有名なボガツイルの子孫（フレスチアヌイエ・イリウシニー）だと歴史家は云つて居た。そのイリヤの出產地（カラチヤーロフ）にはイリヤの愛馬の蹄のあとから湧き出たと云ふ泉があると云ふ話である。そしてそこにはイリヤのために建てられた寺院があるさうだ。キリスト教傳說（神話）の中には彼は「豫言者」エリジオ（イリヤ）として現はれてゐる。その他の神話の比論によれば、彼は自然現象例へば、澄める大空、雨、雷光、雷雲等、として現はれてゐる。彼の馬は風であつたと云ふ人もある。この種の傳說の一つには、イリヤやドブルイニヤなどが、「鷹の船」に乘つて何處かへ立ち去つたまゝ再び戻つて來なかつたと云ふ物語もある。要するに、この傳說史謠の中のイリヤも實際に生存してゐた人物の事蹟を謠つたものだと云ふ考證は色々の學者によつて調べられ發表されてゐるが。それ等の例證について私は特別の研究を持つてゐないから、省略する。で、この物語の中のエルマークと云ふのは、イヴン恐怖王時代にシベリア遠征を企てたエルマーク、チモフイエヴッチのことである。英雄達がお互に殺し合つたと云ふのは、殆んど無限に押し寄せてくる敵勢に避易したのださうである。小ロシヤの傳說には、この最初のボガツイルは、巡察の將校のために捕へられ、兵士にされたともある。

第三篇　近古文學と其時代

第一章　詩及詩人

ワシリー・アンドレウイッチ・ジユコーフスキー

ロシヤ文學の始祖詩人であり批評家の一人であるジユコーフスキーは、一七八三年中部露西亞ツラ附近の一貴族に從屬するブーニンと云ふ地主の子に生れた。だが、彼の母親はこの地主の土耳古生れの下女で、彼女が彼を生んだのは十六才の時であつた。この地主にはジユコフスキーの外に多くの子供があつたけれどもそれは皆女ばかりであつたゝめに、云はゞ幼ジユコフスキーは生れ乍らにして、廣大な土地所有者となつたのであつた。しかも、このこの幼兒はブーニン夫人が十一人もの母親であるに關はらず、至極物の解つた婦人であつたために、ブーニン家の人々の非常に手厚い好意の下に引き取られたのである。彼は親の顏さへ知らない嬰兒時代から十一才になる迄、是等人々の愛と親切とが溢れるほど、行き屆いた家庭の零圍氣の中に育くまれて來た。幼名のワシリーは姓と、號とからとり、アンドレウイッチとジユコフスキーとはアンドレエイ・ジユコフスキーと云ふ父ブーニンの舊友にして、いつも彼の家に寄食してゐた男の名から採つてつけたものであつた。此の幸福なる庶子の敎母はブーニンの嫡出の娘のユシユコフ夫人で、彼女はツーラの町では最も智的生活と藝術的生活にい

そしんでゐる家に嫁いで行つた人がある、而して、幼くして愛すべき少年ジュコフスキーは十一才から十四才迄の三年間を此處に過したのであつた。かうしたユシュコフ夫人は此の少年に授くべき最善の教育の凡ての好機を與へた。即ち、彼等は青年時代の詩的な情熱と貴族的ロマンチックな天賦を善導すべく最も好適所とも云ふべきモスクワの「大學貴族寄宿舍」へ入れたのであつた。かくして、遂に三十四の時に若きアレキサンドラ・フョードローウナ（ニコライ一世の妻）に對して初めての露西亞語の教師並びに進講の役を得るにいたつた。續いて、其の皇子アレキサンドル二世の家庭教師となつた。そして此の踐位すべき皇儲の七歳迄（一八三五年）最重き此の責任の全部を委ねられたのであつた。其の後も皇子の踐位後も二十四歳になる迄相手方を勤めた、更に云ふならば、役は一箇の家庭教師ではなくして、アンキサンドル二世の親愛なる私的友人であり、同時にロマノフ家の新しき友でもあつた。

「庶子――名もなき下婢の土耳古少女の小供――それが皇帝たるべき皇緒の家庭教師であり、然も王家の親愛なる友達であると如何なる理由であらうか？」

云ふ迄もない。彼は偉大なる詩的天才と眞面白なる理想主義的の抱負と、そして限りなきロマンチックな性格とを併せ持つた教養ある人間であつたからである。私生兒と云ふ境遇が彼の天才に何の關係があらう。否むしろ夫がかうした境遇を育んだと云へるかも知れない。

Жуковскій, В. А. (1783-1852)〔ジュコフスキー〕

ジユコフスキーのロマンチックな性格に潜む憂鬱（メランコリヤ）な陰影否憂鬱に潜むロマンチックな性格は彼の母からの感化による幻時の環境から生れたとも云ひ得るであらう。未だ自身の素性にさへ氣のつく年頃でない幼年時代から遠慮勝ちな愼み深い素質が窺はれた。殊に彼の母のサラと云ふ婦人の愼み深い性質は、他日彼の憂鬱（メランコーヤ）の陰影を育ぐくむに充分だつた。そんなわけで幼年時代のジユコフスキイは學業については大した才能を發輝しなかつたが頭のよい彼にとつて、學問そのものがあまりに下らない無味なものだつたのだらう。それは、彼れの最初の家庭教師として雇はれた男が、モスクワの洋服屋か何かだつたのに徵しても容易に察することが出來るだらう。が此の男は、ジユコフスキイの嫌惡と憎惡に觸れて直ぐ逐ひ出されて了つた。次にブーニン家に寄宿して居た、アンドレイ・ジユコフスキイが後を引受けてやつてみたが、勿論それも失敗して了つた。恁うした彼の幼時の性質は、やがて、小學校から放逐されざるを得なくなつてしまつた。其處で彼は、十一歳から十四歳まで、姉のユーンシコフ夫人の家庭の一人として引取られ生活して行かなければならなかつた。此の少年の智的生活は其頃から急激に然も豐かに瞳を見張つて行つた、それからの四年間、彼れがモスクワの大學にあつた時代こそは實に彼の後年あるべきすべてを決定的に育くんだ時代であつた。所謂「貴族學校」であつた此の大學は詩人ヘラスコフによつて建設されたものだつた。一體此のヘラスコフと云ふ人は、非常に洗錬された性格の持主であり、然も、風雅で纖細な感情を持つ處の、誠に好々の人物であつた。當

時上流階級の青年子弟の教養の基礎を受くべき唯一の學府が此のモスクワ大學であつたのも偶然ではなかつた、此の學校の目的が餘り多方面に渡り過ぎて反つて徒らに兩兎を逐つて一兎をすら得ない憾みがないでもなかつたが、併し主義そのものとしては決して間違つたものではなかつた。むしろそれは正しすぎる程はつきりしたものだつた。ジュコーフスキイが後年、教育爭に對して正鴻な興味と、資格をもつてゐた事も亦必ずや其處に遠く根ざしてゐることだらう。

大學時代に於ける彼の材幹は、幼年のそれと違つて思ひきり大きく發輝された。かなり彼の周圍はその頃華かに動いてゐた。「露語講演同人社」の創立と同時に彼がその幹事長として衆人から推されたのを見ても當時の彼の眼覺しい生活の動作が窺はれる。（此の結社が露國學生結社の嚆矢だとも云ふ）。學生時代の彼の最も輝いた半面は、その雄辨と、詩人としての驚くべき性情とであつた。殊に鋭い批判に基づく彼の熱の迸つた辯舌は驚くべきものだつた。こうした華かなジュコフスキイの學校生活も遂に破れなければならないことになつて了つた。教母のユーシュコフの死が突然彼の身邊に投げつけられたからだ。恐らく彼は氣の狂ふほど嘆きにくれたことだつたらう。凡ての自分が根底から覆された程の苦痛を感じたことであらう。彼の處女詩「墓場に寄する」はその悲嘆の裡に產れた一つの作であると云はれてゐる。此の作は、この作者の「若き日の冥想」の處女傑作として謳はれた作品である。

大學卒業後彼は、暫らく政治上の仕事に携はつてみた。がそれは長續きする道理がなかつた。間もなく職を抛てゝ、養家の家族と一緒に田園に奔つた。四年間の學窓生活と、田舍に於ける家庭生活に至る迄終始して彼は、詩作と、獨逸、佛蘭西、英吉利の著名の詩譯に沒頭した。殊に西歐文學に對する研究振りは非常に熱心なものだつた。大體彼は獨學の效果を最も痛切に信じた人であつたらしい。

其頃彼はグレーの「哀悼歌」を移植して發表した。それは單に勝れた譯詩であるばかりではなく、グレーの詩を通じてのジュコーフスキーであつた。（丁度ボーを迪してのボードレールの樣に）その陰欝な著しい主觀的な情調は當時の露西亞人の一般的雰圍に適合してゐたので忽ち人々は共鳴した。其頃彼の家庭生活に於ては、內面に傷ましい戀愛の事件があつたのだつた、此の情熱的詩人の燒きつく戀の相手となつた佳人はブーニンの末娘であつた。運命はそれ程皮肉に動いて行くのだ。勿論彼女にも此の若い青年の心持ちは理解されてはゐた。けれども此の不倫な戀がどうして成立されやう！　彼が田舍に奔つた原因の一つは此の惱ましい運命に抵抗する爲めでもあつた、けれども此の戀は、他日ジュコフスキーの聖い心の光明となつて彼の生活を輝かしたのであつた。二人の間の其後の關係は非常に聖く持續されて遂には彼女に對して宗教的な尊敬を感ずる樣になつたさうである。それは彼が五十八歲迄結婚しなかつたのでも判る。（彼の妻はさる獨逸美術家で彼の友人であつた男の娘）

「哀悼歌」を發表した彼は一躍して文學的の位置を得た。其頃露國では、眞の小說と云ふものすら了

解されてゐなかつた。カラムジンの「憐れなリザ」的な誇張で虛構された作品に安價な涙を惜まなかつた位だ。ジュコフスキイは國家主義を楯にした浪漫主義を眞向にふりかざして同年輩に共鳴する氣分を立派に築き上げ乍ら、安價な感傷主義を人々の頭から一掃し樣と努めた。(併し彼は、此の努力の爲め、決して彼自身の、藝術の途を誤る樣なことはしなかつた。)此の努力が次第に效を奏したことは疑ふべくもない。ロマンチックな彼の美しい空想は人々を被ふ唯一のヴェイルであつた——。

此の青年詩人は、例の奈翁が突如として國內に出現した時、「モスクワの晩の焰」に出會した人であつた。彼は、一戰士として、クツゾフ元帥の先驅に召集されたのだつた。この機會は偶然にも彼を有名なボロデイノーの大戰に參加せしめた。(一八一二年)あらゆる凡てを抱擁しなければ已まない迄に狂喜してゐる愛國者等に鼓舞された彼は、「陣營の戰士」の詩作を公にした。戰後此の作は人々から熱狂的な歡迎を受けた。寓話作家ドミトレフスキイは讀了後これを皇后に獻じた、これがそもそも、緣となつてジュコフスキイは宮庭にかしづく迄になつたのであつた。

王家に奉仕した境涯——と云ふよりも皇儲アレキサンドル二世との親密な友情關係があつてから——は彼はかなり時間を空費したらしかつた。退職後、彼は外遊の途に上り、結婚してやがて獨逸に腰を下した。獨逸の二十年間、此の半生は決して短いものではなかつた。併し、彼は孜々として、專意、半ば散文詩の製作に半ば西歐文藝の移植に沒頭した。

ジュコーフスキイ時代の露國詩壇は歷史上から見ても決して見逃すことの出來ない繁忙な時であつた。クルイロフ、カルツオフ、レルモントフ、ベリンスキイ、乃至プーシユキン等は皆當時の人々である。彼の死の前後に生れた人々こそ大トルストイに至る迄の近代露國文藝の大立物たちであつた。此等の人々と彼との箇人的關係に就いて一通り云はなくてはならない重要な點もあるけれども併し此まではそれ程迄に委しく這入る必要もないと思ふから省略する。

これで彼の生涯についての傳記はほゞ分つた。更にジュコフスキイに就いての他の人々の批評に目を傾ける事は甚だ重要なことで且つ興味深いことである。有名な批評家ベリンスキイ(一八一〇—一八四八)は次の樣に彼のことを云つてゐる。

「ジュコフスキイの作品から國民的構成分子を除いて他に何者をも見出すことは不可能である。多分これは明らかに一箇の大きな缺陷に相違なかつた。が同時に決して惡い素質でないことも述べなくてはならない。若しも國家主義が彼の詩作の基調を形成してゐるものとしたならば、決してその浪漫(ロマンチ)的な性格の進展を期する事ことが出來なかつたに違ひなかつたし、露國詩壇にした處で、豐かな浪漫(ロマンチ)主義(チズム)の中に生長して行くことは困難であつたに違いない。彼の基本は矢張り浪漫主義にあつた。だから愛國詩人ならんとした彼の努力は常に、未知の阻路を辿る彼の性格を表現し樣として、その偉大なる天才を傾けて描寫する『哀感』そのものを高調してゐるのである」と。

それは同じ露西亞人のベリンスキイの批評であつて內輪譽めの弊がないとも云へない。私は更に忌憚なき批評家としての英國人モーリス・ベリング氏の說を引用してみる。

「獨逸浪漫主義を露西亞に紹介したジュコーフスキイは又浪漫主義を露西亞から追放してしまつた人である。」

ベリング氏は、ジュコフスキイに就いて恁う云つて冷たく見極めてゐる。ケイ・ウエリシコフスキイ氏はもつと突込んで冷酷に眺めてゐる。彼はジュコフスキイに就いて次の樣に云ふ。

「浪漫主義が露西亞に紹介されたのは、一にかゝつてジュコフスキイの功の樣に云はれてゐる。がそれは單純なるイルジオンに過ぎない。讀者諸君は、オデッシイ（註ホーマーの二大叙事詩オデッシイとイリアッドの一つ。）の移植に其の文學的生涯を縛されてやつた浪漫派のある作家を想起することが出來ないであらうか？……。新しい詩の力に歸すべき偉大なる照準とか題材（テーマ）は全く彼の身邊から蒸散し去つて了つて、後年僅かに、バイロンの懷疑論やヘインの皮肉的な親察が唯一の玉手箱とはなつてしまつた。」

此の觀察は餘りに酷に過ぎた見方かも知れない。實際露西亞に於ける浪漫主義の生命は極めて短かいものだつたのは爭はれない事で、それはやがて露西亞藝術の眞の構成に最も適したリアリズムに道をゆづらなければならぬ運命を背負つてゐたものと見る方が眞個の見方ではないかと思ふ、敢てジュコフスキイ一人に責を負はせるべきであるまい。どつちにしても、たとへ兎や角の批難はあるにせよ、ジューコフスキイが露西亞浪漫派の鼻祖乃至は彼の國屈指の愛國詩人として尊敬さるべき士でなくてはならないのだ。

「露西亞には、所謂文學上の中世紀なる時代がなかつた。ジュコフスキイは其れを我々に示してゐるのだ」

とは例のベリンスキイの明確な批評である。が、全くは、ジュコフスキイは此の中世紀を造つた人であつた。只其期間が短かいのに過ぎなかつた。夫は決してジュコフスキイの罪に歸すべき事實ではない事勿論である。彼は、それを鄕土文學として、地方の傳說等から民族性を研究し、夫を彼一流の麗筆で民謠や哀歌の優雅な色彩をかりて紹介した。（がーやがて國家主義的の濃い浪漫主義の諧調を辿つて行つたのだ。）何と云つても失張り彼は、露西亞浪漫派を形成した唯一の詩人であつた事に否定は出來ない。

更に轉じて詩人としての彼が、珍奇にも宮廷に途を辿つた所以に就いて、考へてみる必要もあらうと思ふ。

彼が最初露國女皇の國語敎師と皇儲の家庭敎師に任用された頃、人々は、「詩人、節を捨てて宮中に入る」と稱して此の詩人の醜さを罵つた。

プーシュキンすら痛烈にこれを罵つた。併しジュコフスキイにとつて、宮廷生活は決してそんなに

望ましいものではなかつた。千八百十五年彼の詩作「陣營の戰士」が公にされて以來常に注目を怠らなかつた女皇は、ウヴァルフ伯に一書を送つて依頼した。

「私はジェコフスキイに就いては『大きな計畫』を抱いてゐます。でその計畫に就いて彼が歸つて來次第、私の名を使つて是非ともさう告げて約束して下さい……」

恁うして買ひ採られたジュコフスキイの私簡の一節には次の樣な傷ましい文句さへ見える。それは如何に彼が淋しく感じてゐたかを物語つてはゐる。

「『大きな計畫』は甚だしく私を驚かした。それは私の詩想を幽閉してしまふ準備ではないのかしら？」

併し宮廷生活は彼の最初の豫期とは多少違つたものであつた。彼自身を見出したミリューは、優美な然も簡楚な雰圍、或はインテリゲンツィアの周圍であつた。皇后は文學的趣味の豐かな女性であつた爲め勢ひ彼も宮廷生活に引入れられて行つた。殊に皇后の西歐文學についての該博な智識は、たまたま同じ興味と智識を持つジュコフスキイと彼女との間を接近させた。次第に彼は王家一族と親密になつて行つた。そして兎もすれば彼は「王家の一人」としての待遇をさへ受ける時があつた。が彼は決して「家族の一人」とならうとはしなかつた。と云つて勿論、恁那位置にある陰謀とか野心の世界には近づかうとはしなかつた。が寵臣としての或程度の我儘位は屢々仕ないこともなかつた。兎に角、十數年間の宮廷生活が彼にとつて望ましいものゝ、凡てゞなかつただけは、たしかだ。

彼が國家主義者としての事實も少し調べてみる必要がある。彼はたしかに君主主義の思想を根底としての最も偉大なる理想主義者であり且つ人道主義者であつた。勢ひこの思想は彼を專制主義讃美者に導いた。そして彼の專制主義の行方は根强かつた。アレキサンドル二世に對する彼の教育方法は、何時でも此の思想で進んでゐた。

「人民に對するツァルの愛がなければ、ツァルに對する人民の愛も亦ない」

彼は皇儲アレキサンドル二世に常に恁う教へた。ボルテールがフレデリック大王に献じた言葉と比較してみるも面白い。更に具體的に彼の思想的背景を知る方便として、彼の言葉の中から發見することにしてみる。

「各國政府はその標語の如く常に正義を保持すべきである。私人の犯罪はやがて政府によつて犯されたる犯罪の如く認められる……。國家建設の中には絶對主權者の自由が存在する。專制主義は行政權ではなくて、それは單に一箇の思想である」

又云ふ。

「我が露國は、彼得大帝が我々に解放して與れた歐羅巴への門戸を閉鎖してしまつた。その結果は我々がなすべき正當の旅行さへ出來ない。併し神は次に來るべき凡てを知り給ふ。人民に、國家に愛着

すべく强要することは全然不可能の事に屬する。强いて强要すれば事實は反つて逃れ出でん事を痛望する。宛も過てる施設や、頑迷固疾な宗教が齎す結果の如くに。須らく國家をして家庭の如く住みよからしめよ。勇を鼓して門戸を開放せよ。決して人々が欲する生活を拒むこと勿れ。すればやがて彼等は凡てを知るであらう。人々をして各自家庭に於て幸福と安寧を得しめよ。されば彼等は國家の齎す平和と幸福の價値を了解するだらう。家族生活の神聖を崇敬せよ。やがて國家の神聖に額づくことであらう。かくして凡ての安寧幸福は各自の安寧幸福の裡に見出さるべきである……。法律を警護せよ。汝等の愛國心は燃え立つだらう！」

これて見る通り彼は如何にも熱烈な國家主義者的で君主主義者で然も專制主義者であつたことが窺はれる。「基督敎的の屈辱や謙遜は又專制主義の王冠である」とさへ云つて專制主義を高調してゐるが、結局彼の專制主義も常に愛を根底とした發現であつた事を忘れてはならない。それだけ又、「詩人の專制主義」であつた事に氣注くであらう。所謂マキアベリ流の政略的なものでない事は明らかに窺はれて何となく無邪氣に微笑される。

最後にジュコフスキイの生命でもある詩作に就いて簡單に述べてみる。

「陣營の戰士」の一作は、云はゞ、假晶的古典主義の死に頻した世界と、將に芽生えんとする浪漫主義との境堺にあつて歌つた作品であつて、過渡期的な產物である。當時露國は國を擧げて愛國心に燃え立つてゐた。アレキサンドル一世は又非常に藝術に興味をもち、殊に藝術的靈感にはことごとく自身を打ち込んで省みないと云ふ熱心さだつた。例のレルモントフは當時、一兵卒の口を藉りた詩の形式を通して、軍國的愛國心を熱烈に歌つた事すらあつた。ジュコフスキイの詩も亦常に國家主義に翼を延し、愛國心を高潮したものに外ならなかつた。その詩は詩としての偉大なる價値を充分持つて居ることは今更云ふ迄もない。彼の詩風は古い殼と胸甲とで固められた堅苦しいものではなくて、露西亞語の極めて上品な洗練された文體で綴られてゐる。其頃の貴族間で用ひられた言葉は非常に高雅な氣品のある調子をもつて居た。彼の詩は又主觀的傾向の他の新しい第一歩を開拓した革命的作品でもあつた。即ち——

「坏をとりて」「スヴエトラナ」等は千八百十二年に製作されたものであつて、彼の作中で最も異色ある傑作品だと稱せられて居る。殊に後者は其の作風が獨逸のある作品から構想を得たものであるとか或はキイツの「アグネスの死」を參酌したものだとか云ふぎこちない兎角の評はあるにしても、「ジュコフスキイの最も傑出した作品」として熟考さるべき作であると思ふ。彼はテーマとして露西亞人を撰ぶ時如何なる思想と如何なる言葉とを撰ぶべきかを知つてゐる天才であつた。それは「スヴエトラナ」の中に現はれてゐる浪曼的神秘主義とそれを表現する技巧とを見てもわかると思ふのである。

スヴエトラーナ

一

ある萬聖節の前夜に、
乙女達は運命を占つてゐた、
門の外へ靴を擲げ乍ら。
雪はしげく降り積んでゐた。
その話聲を盜み聽くために、
窓の際に彷ひ、
米つぶにて鷄に餌ふものがあつた。
蠟燭は燃え滓の上に溶けてゐた。
澄み切つた盥の水へ、
エメラルドの高價な首飾や、
黃金の飾り物を沈め
その上に注意深く麻布をひろげて、
まじめに歡びを歌ひ合つてゐた、信實に、
それも古風なならはしで。

二

月は薄暗く陰慘に見えた、
冬の霧を通して、
スヴエトラーナは興醒めてゐた。
彼女を誘ひ込まうとする戲れに。
『あなたは何故そんな悲しさうに默り込んでゐるのですか?
お話しなさいよ、そして私達と一諸にお笑ひなさいよ!
ね、嬉しいでせう、あなたの指輪で、
この先何んな事が起るか一つ占つて見ては!
美し人、歌ひなさい。顫へてゐちや駄目よ、
冶工は黃金の冠を鑄り、
汚れのない指輪をつくる、
その冠をもつて私はお嫁に行くわ
その指輪によつて私は寺院の結婚の卓子の側へ行くことでせうよ』

三

『でも、妾どうしたらあなた方と一緒に樂しむ事が出來るでせう？
妾の心のよろこびは、もう逃げ去つて了つたのですもの、
だから妾の運命は、死ぬことに決つてゐますわ、
悲しみのあまり悄悴して了つて。
それから一年になるけれども、
あの人から便はちつともないし、
でもあの人があるばかりに妾の生涯は明るいのですけど、
そして妾の心を唱はせるのですが、
何處にゐる？
妾のことをこんなに構はないで、
孤りぼつちにして置けるのだらうか？
妾の涙つぽい祈りはこんなに熱いのに。
守護の天使樣！　聞いて下さるでせうか、
そして妾の嘆きを和らげて下さるでせうか』

四

まばゆい部室の中に、布片が、
樫の卓子を被ふてゐる。
蠟燭も鏡も、卓子も皆戀人同志のために置いてある。
『さあ、ズヴエトラナ、來て御覽、
ちよきんと其處へ座るのだよ、
鏡の中を疑乎と見詰めるのだよ。
きつと眞夜中に、
忠實な鏡は反射するだらう
お前の望み通りの事を、敬々しく、まつすぐな愛情を持つて、
するとあの人は扉を叩いて、あけて入るだらう
（ネヂや門が扉に衝つて響く）
それから晩餐の卓子につくだらう』

五

かくて美しいスヴエトラーナはたつた一人座り乍ら怖ろしげに覗き込んだ
周圍の沈默の眞中で

明るい鏡の中を。
その中にあらゆる期待を持つた彼女の顏は暗がる闇の底に打ち顫へてゐた。
仄々とゆらめく燭火、
ある時は朧ろげに、ある時はぎら〳〵と。

六

スヴエトラーナは少しも、
身動きせずにゐた。
彼女の疲れた視線は、
後ろ向くのを怖がつた、
藍色の焰は閃めき、
低く馴れ馴れげに蟋蟀が鳴いてゐた。
眞夜中の思ひ出に。

七

息つく力もないやうに、
彼女は肘杖ついてゐた。

と、不意に優しい戸を叩く音、
秘密の合圖をするやうに。
彼女の後ろの鏡の中を、
闇を透して見詰めてゐる彼女を、
眞暗いどん底から何者かの目が現はれ
輝くばかりに彼女を凝視した。
息もつがずに彼女は判然と聞いた。
耳ばたに響く戀人の私語。
そのやさしい響を。
『俺の可愛い〻美しい女よ。俺は此處にゐる。
神樣はお前の祈りを聞かれたのだ
それはお前の涙が屆いたのだ。』

八

その男の顏に次いで、暖かい抱擁に、
彼女は出會つて驚いた。

『人の世の光！　俺の貴い歡び！
もう決して別れないよ！
さあ寺院へ乘りつけやう
直ぐに結婚するために
結婚の歌が夙から唱はれてゐるのだ
明燈は眩しい光を落してゐるのだ』
彼女の返事――優しい一瞥。
時間や機會を失はぬやうに、
二人は一緒に出掛けて行つた。
庭を横切る處に門があつた
そこに我慢して待つことにした。
絹衣や革衣をぢらすまでも。

九

軍命づけられたこの二人の男女が橇に乘るや否や、
駈け出した。馬々の蹄からは、

雪が雜に散りかゝつた。
トロイカは跳ぶよ……見る限りの禿地。
草原と雪は、彼女の姿を朦ろに隱した。
月の周圍の霧の輪に、
平野はその時閃めくのであつた。
スヴエトラーナは心の戰きを、
暗の中に感じてゐた。
『妾の可愛いゝ鷹（愛人の意味）よ。物を云つて頂戴！』
然し、沈み切つて蒼褪めた彼女の男は、一言半句も云はないで、
だゝ月の光を見詰めてゐた。

十

雪の隆肉を深く波立たせ
馬は狂氣のやうに跳び走つた。
勿ち一軒の淋しい寺院が、
ちら〳〵と見えて、悲しさうに、

路端に立つてゐた。その扉は開け放たれて、
折からの疾風に、
香爐は點けられ焚香は煙を吐いてゐた。
悲嘆者は押し合ひへし合ひ集つてゐた。
その中に一つの黑い柩が立つてゐて、
僧侶が大聲に引導を渡す。
『汝よ！灰になれ！』
スヴエトラーナは恐れおのゝき、
彼女の戀人は啞のやうに蒼褪めてゐたが、
トロイカは猶駈けて行く。

十一

雪風は高く飛び舞ひ、
雪片は戀人等の目を潰しさうであつた。
凶兆の鳥が近くで羽搏きした。
叫び聲を擧げ乍ら、彼等の頭上に舞ひ乍ら。

それが「悲嘆！不幸！」と娘には聞えた
そして有情の馬も
耳を竦立て乍ら鬣をふるはせた、
力のあるかぎりに。
野の遙か彼方へ弱々しい明りが
嵐と夜の中にふるへてゐる
雪に蔽はれた小屋から見えた。
いかにもそこは安全で平和でやらすらかなやうに。
そして馬は並んで、
熱く、泡ふき乍ら、近づいた。

十二

彼等はそこにやつて來た。すると、忽ち
彼等は永遠に消えてなくなつた——
馬も、婿も、橇も、まるで、
そんなものは始めからなかつたものゝやうに。

たつた一人、闇の中に、
戀人から放れておいてきぼりされて、
恐れおのゝき乍らスヴエトラーナは突つ立つた
目を潰すやうな疾風が彼女の頭上を吹きまくつて行く。
家へ戻ることも叶はず、
明りのありかは入口のやうに見えた……
彼女は祈りをとなへ乍ら、
十字を切つて扉をこつ〳〵と叩いた……
鍵鉸ひの軋り、錆びくちて——
靜かに扉は開かれた。

十三

そこには何があつたか？一つの柩が
白い柩衣にかざられてゐた。
その足もとに救世主の畫像が、
燭の火に見えてゐた。

哀れなスヴエトラーナ！お前は一體どこにゐるのだ？
この人氣のない住居は誰の家か？
恐ろしい沈默はその持ち主を圍んでゐる
ある恐ろしい秘密が潜んでゐるやうに。
だが、彼女は入るや否や、ひれ伏して、
基督に祈つた。彼女は自分の運命を最早知つてゐるのだ。
それは天に守られてゐると云ふことを。
彼女が洗禮を受けた時の十字架は彼女の手に握られてゐた。
聖畫像の側に彳み乍ら
彼女は待つた。泣き乍ら。

十四

暴風は止んだ。今萬象は平和に返つた。
幽かに燭火はゆらめく。
弱々しき光を放つかと思へば、
また小さく閃めく。

すべては死のやうな眠りに包まれてゐた。
音もなければ呟きもない……
聽け！それは何だつたか？……靜かにぎら〳〵と
靜な羽音がして來た。
スヴエトラーナは今や見守つた
輝く鳩のやうな目をひろげる
雪のやうな眞つ白い翼を
そして彼女の重々しい胸に、
その翼をひろげて、そつと止つた
やさしく輕やかに。

十五

だがまたもそこには何の活氣もない……
彼女の目がどうかしてゐるだらうか？
彼女には隱れた屍が見えるのだらうか
そのうごめく被布の下の？……

うづまく被布は辷り下る。死人
夢魔のやうにも幽靈のやうにも見ゆる。
それが包まれてゐるのだ、彼は冠を戴いて、眼をつぶつてゐる。
彼女はその男が動き出して
兩手をひろげやうとするのを見た……叫び聲が
彼女の唇から迸る、悲慘な、
彼女は强い恐怖に打たれた……
だが、白鳩は眠らない、
注意深く見守り乍ら防がうとする！

十六

その優美な翼をひろげて
白々と舞ひ上る、
そして屍の腕にちよんと乘つた……
おぼろげに、目にふれないやうに。
力を奪られて、屍は呻めき聲をあげた

雷のやうな聲を
倒れかけてぎろりと――齒をむき出して、
打ち顫へてゐる乙女に向つたのだ。
　唇は今や蒼ざめてぢつと閉ざゝれ
　目は死人のやうに滑光を放つて冷やかにだが、最早彼女に向つて來ることは出來なかつた。
　しかし、――おゝ神よ……スヴエトラーナは知つてゐる、この死人
　の中にまことの彼女の戀人を、
『あ！』――さう云ふ聲にふと目がさめた。

十七

彼女は鏡に向つて立つてゐたのだつた。
レースかがりの窓掛けを通して、
朝日の光が差し込んで來る、
あたゝかに、明々と、しつかりと。
ぱた〳〵と羽搏し乍ら、歌を唄つて、
鷄は朝の言葉をかけてゐる。

ただ哀れなスヴエトラーナの心は
まだ怕ろしさにふるへてゐた。
『まあ、何と云ふ怖い夢なんでせう、ほんたうに！
　屹度、妾の一生は無事でないわ、
　明日は闇でせうよ！
　妾を待つてゐるのは何でせう？　何でせう、
　妾の未來に殘されてゐるものは？
　歎び、それとも悲しみでせうか？』

十八

彼女はその重々しい苦痛の心で、
窓扉に腰かけてゐたが、
羊毛のやうな霧の中に一條の路が、
消え消えに横つてゐるのを見てゐた。
ピンク色の朝の霧、雪も
ぎら〳〵輝いて來た、

お丶聽け鳴り渡るトロイカの鈴
幽かに響いて……段々近づく、
橇は翼のあるやうに飛んで行く、
渦卷く雪、見る限り、
飛ぶ飛ぶトロイカ樂々と
近づいたかと思ふと、門際で止つた——
その門を潜つて、すらりと、
眞つ直ぐに巧みに歩るき寄つたのは、
彼女の戀人だつた。

十九

だが、お前の恐ろしい夢はどうしたのか?
此處にお前の戀人が居ると云ふのに!
スヴエトラーナよ、
今やつとお前は發見するのだ。萬事もとのやうに
以前の別れも戀人に恙なかつたことも、

以前の戀人は明々と輝き出す。
戀人の目の中にも唇の上にも、
言葉の端もよろこびに充ちて響く、
聖き寺院よ——今扉をひらけ!
天に翔れよ、聖き誓、
心のまことはお前をつなぎ止めたのだ!
皆集つて來い、老人も、若者も、
さあ幸福な歌につけて唄ふのだ、
『永遠への生よ! 』洋盃は鳴り響く

二十

そこで、我が慈愛ある聽き手よ!
我が此小唄(此詩全體を指して云ふ作者の言葉)に頬笑め!
この話にはいろ〳〵の不思議が含まれてゐる、
だが詩の中にはそれがない。
諸君を頬笑ませるのは嬉しいが、

私は光榮を避けたいのだ。
諺にも、名聲は煙の如しとある——
世界は最も悧發な判斷者だ。
こゝにある單純な道義は、
恐るべき運命ではない。
だが、神の手にあるものは、
我等が生を去るのだ。
神掟は眞理だ。
地上の陰暗は夢に歸して、
歡樂はその目醒めの中にある。

二十一

この怕ろしい夢に、
可憐いスヴエトラーナは、もう惱まぬ、
汝創造者よ、彼女の楯となつてくれ！
そして苦惱の傷をして、

彼女に觸れしむる勿れ、又、
彼女の上に不穩の影をして近付けしむる勿れ彼女の靈を晴れ切つた日のやうに、
不幸不運の指をして、
彼女から遠く去らしめよ、
丁度野の後ろに見ゆるやうに、
樂しき小川がきらめいてゐる。
かくて、彼女の生涯もその通りに輝かせ、
先づ、すべての歡びをして、
永遠に彼女の友たらしめよ。

花に寄する歌

（ジユコーフスキー）

（一）

萎びてすてられた花
もろい草地の美しさ
虐い秋の手は
お前から夏の魅力をとり去つた。

（二）

おゝ！年々はまたくりかへして
同じ運命をすべてにもたらすのだ
私達の歡びは片はしから飛び去つて
お前達の花びらは一つづゝ散つて行く。

（三）

その通りに毎夕の鐘は響く
ある亡びたる夢か歡びの音の
飛び去る時刻は
深く樂んだ幻影を一つゞつ消し散らす、

（四）

人生の幻影は假面を脱して横つてゐる
希望の星はいよ〳〵蒼白く燃ゆる。
賢者は昔からかう尋ねてゐなかつたか、
人間と花と、どちらがもろいか？と。（ジュコフスキー）

Крыловъ, И. А. 1768-1844.〔クルイロフ〕

イワン・アンドレイウイッチ・クルイロフ

寓話作者（一七六八――一八四四）

イワン・アンドレイウイッチ・クルイロフと云ふよりも、「クルイロフのお爺さん」として露西亞人の間には知られてゐる人である。

大體、ロシヤ文學は餘りに人生の永久的な、そこで、大き問題を取り扱ひ過ぎた。

ジュコーウスキーにしろ、プーシュキンにしろ、はたまた、ニエクラーソフにしろ、ゴーゴリにしろ、皆あまりに熱情的な反抗文學者であつた。しかし、こゝにたゞ一ッの小供に對しての文學者があつた。即ちそれは「クルイロフのお爺さん」であつた。彼はその呼稱の示すやうに、てつぷり肥つて、親切で、溫情をたゝえ、而も總明な輝きを以て實に好い、「祖父さん」であつた。そして又同時に、露西亞古典文學の「祖父」でもあつた、このクルイロフの現はれるまでには、實際に、露西亞には小供に取つての詩と云ふものはなかつた。只僅かに古典（クラシックス）からの引用や、何處から來たか解らい樣な可愛い、短かい詩の類を聞かされるに過ぎなかつた。しかしそれは彼等子供には半ば無意識に繰返されるに留まり、彼等の心に觸れるものがなかつた。彼等の嬉んで聽かされる物語りや童謠と稱すべきものは皆大人（ポリシイ）即ち露西亞の子供達の所謂大人の讀む話であつた。彼等の母や父は口を開け、目を見張つて聽きとれる小供達にプーシュキンや、コルツオフや、アレキセイ・トルストイや、フエットや、或

はボロンスキー等の心を奪ふ樣な、面白くして教育的な古典的な詩や物語りを話すのである。しかし、一度人の頭に入ると決して一生忘れる事が出來ないで、其の成長と共に物語りの意味の深くなつて行くのはクルイロフのものに限られてゐる。此の價値は彼の物語りが次々と書かれるに從つて一般に認められ續いて其の價値は教育者達竝に文壇子によつて支持された。又露西亞の古典的詩壇を睥睨し、「Vissarion the Furious」と外國の文學者等に云はれる程遠慮のない、鋭さを以つて文學界を分析し批評した處の批評家ベリンスキーによつても認められたのである。

勿論、クルイロフ前にも寓話作者が二三ないでもなかつた。しかし、彼が現れてからは彼以前には露西亞には寓話作家はなかつたと云つても過言でない程であつた。彼は鋭い洞察力を以つて、見るものゝすべてを吸收し、今迄の露語を以つてする寓話作家から、一等地を拔いた。ベリンスキーは、クルイロフの粗雜な物語りに於て露西亞の國民性を具體化した事に對して、所謂 Kygprboend ——ちぢれ毛の意にして、つむじ曲りと云つたらよからう——と呼んだ。即ち彼れは眞面目と剽輕の相矛盾する手法を以つて描いたのである。そして、批評家をして冗慢の譏りを爲さしめなかつた。なぜならば、彼は現さん事を自から確然とつかみ、一字一句をもゆるがせにしないと云ふ、藝術的タクトを持つてゐたからであつた。加ふるに更に藝術的價値を大ならしめたものは、そのヴイヴイッドにして、アイロニーに滿さてゐた事であつた。而も露西亞人の現實的な常識はクルイロフの寓話に於ける判斷を正しい立脚地として取らねばならなかつた。例へば、批評なき輸入文明を諷刺した。「獅子の教育」に於けるが如く、アレキサンドル一世のラハーブの影響の下に爲したるスウイッチエルランドに於ける教育は結極證明された。なぜならば共和黨の思想は失敗に終つたからであつた。又「百姓と蛇、」又は「蜂と蠅」の話は吾等の心は教育的思想によつて如何ともする事の出來ない事を現してゐる。即ち外國の思想に對して疑惑のみを表現した。換言せば、彼の教育に關する思想は自國の知識に於て見出されねばならいものであつて、外國の政治家やなどによつて爲されるものでない。健全なる家庭の健全なる影響から成長せねばならぬと云ふことを主張したのである。其の他次から次にと出る寓話は非常に多くの露西亞官憲の當時の直接なる批難であつた。かくて彼の外觀はあらゆる方面に向けられた。史的事件は云ふに及ばず、法の亂用警察、官僚的取締り、片手落ちな裁判、行賞の不公平、間違つた哲學、及び普通の人間性に於ける愚鈍性を諷刺した。例へば、Kyma rucn は少しも正直な處のない士官の種々なトリックを書いたものである。要するに彼の時代は彼のヴイヴイッドな描寫によつて市場にさらけ出された觀をなしたのであつた。

クルイロフの父はオレンブルグの町がプガコフの暴動でおびやかされてゐた頃、下級士官であつた。彼の少年時代の回想錄に於て三歲の勇敢な小兒が、靜かに此の町に起つた暴動によつて加へられた家庭生活の不安を眺めてゐる極めてヴイヴイッドな姿を見る事が出來る。彼が父を失つたのは七歲

の時であつた。そして、淋しい母に就いて僅かに讀み書きを學んだ。彼は一生を通じて其の事を忘れなかつた。彼等母子は初めがら餘り富裕ではなかつたが、父の死後其の貧苦は極端に達した。母はパタとパンとを得る爲めにはあらゆる恥辱を忍ばねばならなかつた。故に、家に獨り殘された此の少年は父の書架の中に隱れてゐた。古くさい小說や物語りの類を讀んで生長したのであつた。十五歲頃彼は短かい喜劇を書きかけた。同時にペテルスブルグの一官署の悲慘なる給仕になつて、年俸二十五ルーブルを給せられるにいたつた。しかし、首都に於ける彼の生活は本屋や、出版屋や記者や、其他の作家達に接觸する機會を得せしめた。そして、生活竝びにあらゆる方面に奮鬪の結果は遂に創作界に足を蹈み入る事が出來た。で、決してさうする事に消極的ではなかつた。彼は自己修養を怠らなかつたのは云ふ迄もなく、新聞界に蹈み入り、雜誌を發刊し、そして、ユーモラスな短詩とか、嬉劇とか或は音樂的笑劇を書いたに過ぎながつたが常に其のサテイリカルな鋭敏な才能を是等の雜誌を通して發表した。かくて、四十歲に至る迄ほとんど餘暇を見出さなかつた程であつた。そしていよ〳〵其の名聲を博するに至つたのはほとんど五十歲になつてからであつた。即ちそれはラフオンテーヌの三つの寓話を露譯してからであつた。たとへ、それが最初の飜譯とは云へ、確かに、彼自身の特殊な詩的才能を發輝する機緣となつたのである。尤も彼は飜譯をしたと云ふものゝそれを全く、露西亞精神に變へてしまつたのであつた。そして彼はゆう〳〵と自分自身の寓話に手を染めかけたのである。此處に於てか彼の名聲はとみに高まり、彼の書物は生前百萬部を賣り切り、今日迄に八萬を越えると云ふ盛況を呈するにこととなつたのである。就中處女出版たる二十三編の寓話を集めたものゝ如きは驚くべき成功であつた、ジュコフスキー（——）——Europien Courrier——は極めて立派なる意見を以つて賞讃した。そして、間もなく、皇族の寵遇をも受け、續いて當時の中央文壇の知遇をも得た。即ちジュコフスキーは云ふに及ばず、プーシユキン、ワゼムスキー公、デルジャーウイン等とも交際を求め又敎育界にも立入つた。從つて兒童からも前述の如く「クルイロフのお爺さん」として尊敬され、アカデミーの會員に任命された。フランスに於ては、De la Fontaine Russe と呼ばれ、一八一二年には帝室圖書寮の頭となり、多くの報酬を得るやうになつた。

一見彼の佳作及び性質の漂逸のみを觀る者には懶惰の生活を樂しんだ樣に思はれた、即ち彼は氣が進まねば、決して筆を執らなかつたと。しかし、一度び取れば容易に作を爲すと云ふ風で、まるで、お慰み半分で、自然に頭に浮いて來たまゝを書いたかの樣であつた。而も、彼は結婚さへ、面倒臭い事務かなんかの樣に心得て結婚をしなかつた。むさくるしい、恰も鳩の巢かなんかの樣な帝室圖書寮の堆裏に二十七年間何の不足もなげに生活した。——或る室の如きはから空きになつてゐるかと思ふと他の室は氣まぐれで買つた贅澤品で滿たされてゐた。そして、其の品物たるや買つて二度と眺めると云ふ事をしなかつた。そして彼の只一の家庭生活の友は一人の老ひぼれた婆さんの料理人に過ぎなか

つた。（彼女は英吉利の老學者の料理番と云つた所は少しも見出せなかつた。が、哲學者的の感じのする。朴訥な如何にも露西亞式のタイプの精神を持つた老婆であつた。）彼の友人や、崇拜者達はいつも書籍を取り散らした同じ室に二人が一緒に寢椅子によりかゝつてすや〳〵と居睡りをしてゐるのを見出すのは敢てめづらしい事でなかつた。その寢椅子の上の壁には非常に危かしく大きな重い額縁の繪が永い間懸つてゐた。友人が危險だと注意すると、イワン　アンドレウイッチはのん氣にいつも答へるのだつた。

「何、僕はちやんとどんな角度で落ちて來るか知つてゐるよ。だから僕はその角度の外にゐるんだ。」と。

周知の彼の生活はまつはる只一のロマンチックな細部はオレーニナ夫人を恐しく賞讃し、崇拜した事である。彼女は交際仲間のチャーミングな年増の婦人で、澤山の家族の母であつたが、その家庭にあつてクルイロフは一個の Pognoï であり、信じ合つた友であり同時に子供から愛せられ且つ人氣作者であり、そして皆の「お爺いさん」（デードウシカ）であつた。此の美しい友情は非常に永年間續いた。

或る夏の午後例の寢椅子に横になつて、彼は小さなパイ（ピロジュキ）の事を考へてゐた。是は露西亞の甚だありふれた料理で、コックはいつも晝食にスープとともに歡めるものであつた。しかし、時間迄に用意が出來上らない時には。彼の料理人はそれを出さなかつた。彼は程なくそれが出來て呉れゝばいゝがと思ひながらコックを呼んだ。しかし返事がなかつた。彼の想像は段々食慾をつのらせた。彼は何度か料理人を呼んだ、――しかし、沈默が答へるのみで、お人好しの主人公はコックの氣分に從はざるを得なかつた。コックは今でも昔でゞもあるがすべての露西亞の使用人のクラブである庭のベンチに腰をかけてゐたのであつた。いよ〳〵彼はたまらなくなり、立つて彼獨特の Kazeh har Kapmupa を通つて臺所へ行つた。そこには二三十のふくよかなパイが鷲鳥の脂のソース鍋の中で靜かに煮えてゐた。クルイロフは先づ一つをフォークで取つて口に入れた。又二つ目を取つて食べた。さうしてゐるうちに遂彼は皆な平げてしまつたのに氣付いた。彼は其瞬間非常に滿悅を感じたのだつた。しかし、そのまゝ鍋を火にかけばなしにして置いた爲めに鍋の石を皆な頽がしてしまつた。加ふるにその食傷の爲めに病氣に罹つてしまつた。彼は此の病氣がかなり烈しかつたと見えきつと死ぬると思つたのだ。（此の話の過半は公認された彼の傳記に記錄されてゐる。）で、彼は病床にあつて次の樣にオレーニン夫人の家（うち）へ行つて彼の理想的な愛の足下に死にたいと卒直に云つてゐる。即ち、

「あなたの足下で死なねばならないと私は云ひます」

此の話は其の他の多くの逸話や傳記等の事實によつて證明された彼の性格の著しい姿に同じく私を導いて行くと思ふ。即ち、彼の性格として、若し或る空想にしろ、一度び彼クルイロフの心に入つたならば、彼は何處迄も彼の望む目的が遂げられる迄、根氣よく、それに向つて進むと云ふ事である。

此處に於てか、人々は果して彼を懶惰と呼んでいゝであらうか、甚だ疑はしく爲つて來るのである。こうした彼の性格を示す例は極めて多く見出されるのである。例へば、五十一才から五十二才の間にかけて、イソップを原語の希臘語から研究した事であつた。勿論彼は、希臘語から單にイソップを知らうとしたのではなく、友人との賭に勝つ目的であつたのではあつたが、かうした一つの勝つと云ふ空想は遂に希臘語を完全に修得せしめたのである。賭けて負けて驚かされた友人は彼の堅いベットの下に澤山の希臘語の書物が置かれてあるのを見出した。（一體に彼は賭は無論賭博さへ非常に好きで、三十歳になる迄其の前六年間ほとんど毎日の樣に賭博に耽つたと云ふ事であつた。）正確な年代は不明であるが、彼は尙ほ晩年に及び、伊多利語、曰く何々と提琴を彈く事さへ學んだ。彼は曾て、インド人の奇術師を見て、その小球を頭上で圓形をなして投げるのに、ひどく感嘆したことがあつた。すると、彼の友人の或る者が二週間餘りたつて、行つて見ると彼はカーペットの上に坐じて、一生懸命に、二十餘りの小球を頭上で、うまく圓形を描いて投げ上げてゐたのを見たと云ふことであつた。が、又、彼は、火事を見るのを、決して缺かさなかつたと云ふことであつた。如何なる眞夜中であらうが、又如何なる遠い場所であらうが、一度び警鐘を聞くや、たちまち起き上つて、馬の樣に馳せ參じたと云ふことである。要するに此の意味に於て、彼は決して、世の怠惰なものとは選を異にしてゐた。

かうした漂逸な性格に關聯して、誰でも、彼を極めて、のんきなおしやべりの樣に思ふだらうが彼は非常に用心深い男で、私人生活に於ては、丁度用心深い外交家の樣に、獨り合點をすれば足りるのであつた。又別に、彼の寓話の成功と相竝んで、彼の嬉んだ處の一般の尊敬と愛とは得られなかつたけれども、彼は絕對に彼の人格的な、事の現れには無關心であつた。只特別な場合にのみ、自からきちんとしたのみであつた。一日、彼はオレーニン家の或る何かの大きな正餐に招待され、眞つさほな夜會服を着用に及んで、その巨軀を會堂へと運んだ事があつた。處が實のところ、彼はまだ、其の着物が仕立屋から來たばかりのものを直ぐ着てしまつたつたので、ボタンの全部は尙ほ蓋ひ紙が殘つてゐた。で、會衆達はおかしさを忍んで、それを見ぬ振りをしたのが彼を不機嫌にした。そして、只一つ彼を愉快にしたのは虛飾を取り除いた瞬間に過ぎなかつたと云はれてゐる。

曾て、此の人氣を得た作者の七十回目の誕生の祝宴を開いた事があつた。此の時、オレーニン氏は椅子により、ヂユコフスキーは三百人の出席者の中に立つて、極めてアーテイツクな雄辯をふるつて語つた。

皇帝ニコラス一世の二皇子も親しく祝福すべく出席されてゐた。詩人のヴイアゼムスキー公は自作の祝詩を朗讀した。其の詩は、「クルイロフのお爺いさん」の、銀婚式の祝の樣に書き出されて、句々、實に輝しきばかりに、立派な、眞面目な、而もユーモラスなものであつた。そして次の樣な句

て結ばれてあつた。

Zdpacmbyŭ eb umroio, merlo, Zdpacnu-byŭ diedynka, Kpbirobb!

彼が最後の病氣に罹る少し前二つの一寸した事件があつた。一つは彼の住宅の直ぐ隣に火事があつた。人々は直ちに彼にそれを知らせに走つた。彼は落ちつき拂つて、通り迄て出て、恰も美術鑑定家の樣な確かけなに調で、

「騒ぐにも及ぶまい」

と云つたと云ふ事である。

他の一つはバクーから彼のものを出版するに就いて、訂正する處があつたらして吳れと云つて稿本を彼の處へ送つて來たのであつた。處が、「好きにするがよからう」と云つて又再び顧りみなかつたと云ふ事である。

彼の死は七十六歳で、やはり自からの食ひ過ぎであつた。時の皇帝は彼の葬祭料として、九百封度を支拂はれた。そして、露西亞の習として、若し誰でも望むものあらば、手づから其の者が棺を運ぶのであるが、彼の時は當時の高官が自から中央會堂(カシドラル)から墓地へと棺を運んだのであつた、此の詩人に私淑し、尊敬する弔ひの群集は蜒々ネブスキー街の大通り三哩に溢れるの盛況を呈したと云ふ事であつた。

然り、實に彼は溫情溢るゝ、偉大なる祖父であつた。十七世期露西亞文學の勃興はロモノソフに負ふ處大なりと雖も、クルイロフが、處女地なる露西亞に現れる迄は正しく、露西亞文學はまだ竹馬で歩いてゐるに等しかつたのである。かくて、露西亞文學は彼と、ヂュコフスキーとに上つて用意され、而してプーシユキンの種を播いたと云つても敢て不當の言とは云へないであらう。

猫と料理人　（クルイロフ）

料理も出來るが讀み書きも出來るが讀み書きも出來る料理人が、
ある時厨房を一寸あけて、
酒店へ金を拂ひに出掛けた、
彼のクムは夙に死んで、丁度その日が命日だつた、
彼はこの命日が來ると一杯づゝ酒をのんで死者の供養にする。
そこで鼠が出ないやうに用心をして
食べ物を綺麗にして置かうと云ふので、
彼は猫に留守をさせた。
だが悲しみの情を一杯の酒でなぐさめて
さて厨房へ戻つて來てから何を見たか？

と云へば疊の上には、
ぼろ〳〵になつて饅頭の屑と
猫のトムが
桶の後ろに樂しさうに隱れてゐた
チキン天ぷらを食べつくして了つたその猫が。
『この慾ばり猫めが、手前は何て狡い畜生だ！』
と咎め出す。
『手前はそれでこの壁に面と向かつてよく恥かしくないことだ！』
ところがトムの方では、そんな小言には一向無頓着で食べつくしてゐた。
『これ、手前は今日まで至つて正直で、謙遜で花形役者のやうに可愛がられてゐたではないか！
だが、今日と云ふ今日、俺はお前をいやしめてやらなくつちやな！
近所の人達も皆さう云ふだらう、
トムは狡い猫だ、トムは泥棒だ
トムを厨房や家の中へ入れてはならぬ
庭へだつていけない俺も喜んでさうしてやる

あの羊の群にゐる狼が叫ぶのを聞けよ！
あいつは禍だ、ペストだ、この邊にとつては危險な奴だ！』
だがトムはかく罵られても相變らずムシャ〳〵食べてゐたが高尚な文句の好きな私達の演說
家、（料理人のこと）はかうして途方にくれてゐた。
そして料理人がこんな御話を列べてゐるのちに、
天ぷらは猫トムにすつかりしてやられて了つた。
ところで若し私がこの料理人の忠告者だとすれば、
私はかう云ふことを考へて貰ふだらう、
しやべつたり怒鳴つたりするよりも、
喉を鳴らしてゐる泥棒を引つぱたく方がずつと悧巧だと。

二匹の犬

十二人に忠實な雜種の
バルボースと云ふ名前の犬が、
ゐる日自分のおなじみと出會つた

それはスペイン種の縮れ毛のジュジュと云ふ犬なんだ。
その犬は沓板の上の素張らしい蒲團によりかゝつてゐた。
バルボースはなつかしさうに近よつて
やさしい心から泣き乍ら
窓の下で跳び立つて
樂しい吐息をつき〳〵
尻つ尾をうれしさうに打ち振つて、
かのしさに胸をおどらせ乍らかう云つた、
『まあ〳〵ジュジュさん!
お前さんはどんなくらしをしてゐなさるか私達の主人達がお前さんを邸へつれて行てこの方?
屹度お前さんは覺えてゐるだらう
ひもじいのを堪へて、雨風の日にも我慢をしてゐた頃のことを?
お前さんは今どんなしごとに氣をとられてゐなさるか?』
『眠素しんでゐるところへぶつ〳〵呟いて聞かせるのは罪なんだぜ、だが、
私の主人は全く法外に私を取愛がつてくれるよ

とジュジュが答へて云ふには、
『私は樂しい生活を送つてゐると云へるね。食べるにも飲むにも銀の器で、
主人と一緒に遊んだり、休むときには、
氣まゝにソファへもぐり込むよ
そしてお前さんはどうだい? いゝ方だらうね?』
『私かね?』
と老バルボースは悲しさうな目つきて、
鼻も尻つ尾もぐつたりと垂れて、
『私は昔のまゝさ、疾風にも
空腹にも、ぽかんと突つ立つて、
主人の家の番をしてゐる
そして雨の降る中に籬の下で寢るよ。
若し私が吠ゆれば、よろこばれる代りに
なぐられるよ。
だか、そんなとこへ行つたお前さんは何てえ幸福なんだらう

ジュジュさん、あんなにひよろ〳〵で小さかつたお前さんがさ、
一方私のやうな元氣のあつたものがつまらなくて？
お前さんの仕事は何だい？ところで、その
私の仕事かね？
お前さんは見にくいね！
大體が――』
ジュジュはあげるやうに
『私はな、こゝて、
後ろ趾で立つてやさしい聲で物を乞ふのだよ』

一體その後ろ趾で器用に立つて
優しい聲で物を乞ふのにどれだけの幸福があるのかしら

凧

雲の眞下に一枚の凧が翔つてゐた
その高いところから見て、
谷間の胡蝶にかう云つた、
『お前の姿がはつきり見えないなんて云ふたらお前は信じないかね？
聞かせてよ、美いちやん
お前が、この高所まで飛ぶ私を羨しがつてゐることを！』
『妾が羨むつて？いゝえ、ちつとも。
威張んなさんなよ。お前さんは高く飛べるだらうが、大體、鎖でつながれることは拒めないでせう。
そんな目標のやうなものが、
何で少ちとでも樂しからう、妾の智識から見ると
そこへ行くとこの妾は
そう高く翔ばないまでも、
自由に飛べますもの、
ちつとでも束縛なしに。
それに妾はね、人々に
ちやほやされたり矢ケ間しく云はれたり

して騷がしく世を送らうとはしませんからね。

四人合奏

歯をむき出す猿と片意地な驢馬と
角の長い野羊と足の曲つた愚鈍な熊とが
ある日出逢つて相談をした
面白い四部合奏をやらうと
ヴイオラもヴアイオリンもある、
セロもあれば樂譜の本もある。
場所は皆が集まつて來るあの芝生がいゝと。
その話が纏るまで山路を迂路いてゐた。
弓があげられた！　旨く彈ふれた。
だが、聞ゆるものは矢ヶ間しい音ばかり。
お了ひには猿がじれて怒鳴り出した。
『後生だから一寸やめてくれ。
この合奏はちと變だよ。

この通りの場所で、君、ヴイオラ、此處へ來い、
そこでセロの向ふ側に行くと。
僕は指揮官だから、
君と向き合つてゐると、
さあ今度は大丈夫旨く行くぞ、
僕等の音樂に森も山も、
たまらなくて浮れ出すぞ。』
銘々がその席について、
も一度はじめからやり直したが駄目だつた！
『止めろ！　さあ俺が教へてやる！
俺は眞個のやり方を知つてゐるぞ。
俺の云ふ通りにすれば屹度旨く行く、
さあ一列にならんだならんだ。よし始めろ、
皆は驢馬の云ふことを聞いて、
一列になつてまたやり直したが、

調子はまるきり合はない。
一體全體どうすれば旨く合ふんだい？
どんな具合に列んで、どうすればいゝか？』
皆が騷がしく怒鳴り出して困り果てた。
ところへ一匹の鶯が飛んで來た。
皆はこの有樣を打ちあけて聞かせた、
『すみませんが私達に敎へなすつて下さい。
あなたは御商賣だけに旨いのだから。
どうしたらぴつたり旨く合ふのか。
こゝに樂器や本があります、
やり方を一寸敎へて下さい。』
『ほんたうの音樂家になるためには、
荒つぽい人達の持たない才能や
純な味ひや手際や耳の修養がいるんですよ、
あなた方にそんな資格を持つたものは、お氣の毒ですが、一人もゐないのですよ。

あちこち座り直したつて駄目ですとも、
要するに、あなた方の名前は音樂家の名薄にないのよ。
だからとても出來ない相談なのよ』と鶯が答へた。

アレキサンドル・セルゲウイッチ・プウシユキン

クルイローフの時代はあきらかに露西亞に於けるローマン主義文學の醗酵の時期であつた。同時にまたバコヂンやポレヴオイやザゴーシユキンやラズネチニフなどによつて作られた歷史小說の流行時代であつた。（ザゴーシユキンが一八二九年に書いた「ユリ・ミロスラヴスキー」やラズチニコーフの「不忠者」や「氷の家」は當時の事件をさま〳〵に取り扱つた純然たる歷史小說である）——然し、ナデジユニンはさうした古典文學に大いに反對し、ポレヴオイはローマン主義を排斥した。そして勃興しやうとするローマン主義に對して偉大なる勢力を奮つてゐた。物語作家と云ふよりも寓話者として私たちが知るところのイズマイロフが「善良なる意志」を發行して獨逸の思想界に建てられた哲學や美學の宣傳をしてゐたのもこの時であつた。それは露西亞はじまつて以來賑やかな刊行物を持つてゐた時代で次に來るべき詩聖プーシユキンの時代でもあつた。

私は今、プーシユキンに就て、述べねばならぬところへ到達した。彼は一七九九年五月二十六日、モスクワで生れた。彼の家は古い家柄で、彼の伯父ワシリー・ルヴオヴイッチは當時のロシヤ社交界

及文學者仲間でも詩人として夙に知られてゐた。彼には二人の兄セルギエとワシリーとがあつてこの二人ともこの時代の青年貴族の典型的な性格の持ち主であり、プーシュキンとは幼年時代からまるで思想が違つてゐた。彼の母は、その以前トルコのコンスタンチノープルに駐たロシヤの大使の手を通してピョトル大帝の手許へ食客として送られた一人の黒人の孫娘に當つてゐる。黒人の名をイブラハムペトロヴイッチハンニバルと云つた。プーシュキンの作なる先祖の記憶の中に「ピョトル大帝のアラブ」とあるのは即ちこの人のことで、彼はアラブではない純粋の黒人であつた。プーシュキンの容貌が幾分黒色人種のそれに似てゐるのは正にかうした事情からであらうと思はれる。このイブラハムはロシヤの宮中から留學生として巴里へ遣られた。詩人の祖父（オシプ・ハンニバル）は馬鹿に短急な性情の黒人で詩人の祖母と結婚後更に二重結婚をしたことが露見して彼は嚴重に所罰され、詩人の祖母との結婚生活は破れて了つた。この祖母こそはプーシュキンが幼時の唯一の教育者であり且つ彼の肉親の被護者であつた。と云ふのは、少年のプーシュキンは非常に陰欝な性質の怠け者の上に、多少その兩親からは愚鈍だと見られて彼に對する親としての愛は妹のオリガや弟のリョフにばかり注がれてまるで相手にされないばかりか、ある時などは宗教學校へ放り込まれて僧侶にされやうとした位であつたが、そうしたみじめな境遇にある彼を慰めたのがこの祖母であつた。祖母と同じやうな彼の味方が、しかし、も一人ゐた。それはこの家の下婢でアリーナ・ロヂオノヴナと云ふ乳母役を勤めた女であつた。このアリーナと云ふ女は純ロシヤ風の至つて優しい性質の、そう云ふ型がロシヤの典型的の下婢とは云ふけれども、この家にはなくてならぬ役目をつとめてゐた。素朴な、溫順な、家族とは主從のやうな間柄であつた。そのアリーナがプーシュキンを一人可愛がつた。彼は祖母にはじめてロシヤ語と云ふものを教へられ、そして嘗て祖母が奉仕したことのあるカテリナ第二世の宮中の話などを歴史的の興味の中に物語つて聞かせられたやうに、アリーナからはロシヤの昔噺とか民謡とか傳説などを繰り返し繰り返し聞かされたものである、全く彼女はさうした物語や小唄の種類に驚くべく精通してゐた。プーシュキンが文學に感興を見出したのは、一番最初はその邊からであつて彼はこの二人を極端に慕つてゐた。そして世の中には、勿論、彼に親しみを覺えるのはこの二人に限られてた。かやうにして兩親の蔑視の中に育てられた。プーシュキンの性格が突然と云つても差し支へないほど急激に變化する時期がやつて來た。それは彼が七歳の時であつた。今まで陰氣に鎖されてゐた彼は就學年齡に達すると同時に太陽の光をあびた萎びた草のやうな勢で動作は活潑になり、心は明るく生々として來た家族――ことに兩親の驚喜は一通りでなかつた。その後の彼の一語一動は悉く家族の好奇的な注視の焦點となつたのである。この調子で進んで行つたら或は育て甲斐のある一人前の者となるかも知れないと云ふやうな人々の希望は彼を次に教育しやうと云ふ目的に移つた。ことに今まで彼のことゝ來ると、まるで見向きもしなかつた父親が反動的に彼の教育と云ふことになると一人で躍氣となつた。

Пу́шкинъ, A. C. (1799-1837)〔プーシュキン〕

かくて貴族風の家柄としては餘り裕かでない家庭へ、態々彼一人のためにフランス語の教師が傭入れられたのである。その教師は外國人だつた。彼はこの教師に就てフランス語を學ばされた。だが、彼の父は彼を文學者、詩人にする考へは毫もなかつたので、折角少年らしい少年になりかけたかと思ふ頃から、父の書齋に入りびたりに入り込んで、そこに父が愛讀してゐたフランス文學書類、例へば、ルウソウとかモリエールとか、ブルータークの英雄傳記などを夢中になつて貪り讀む傾向が出來たことを苦々しく眺めてゐた。それはプーシュキンが十二歳の時であつた。こんな狀態がつゞくことを恐れた父親は間もなく他の貴族の子弟と同じやうに當時ツアルスコエ・セロに建てられて開校されたばかりの中學程度の寄宿制度の學校へ入れて了つた。父親の目的はこの少年を他日ロシヤの外交官に仕立てるつもりで、その準備のための第一階段を踏ませたのであつた。ところが、この學校と云ふのがまた不思議な學校で、生徒は三十人足らずであつたその生徒が碌々正規の課の勉强をしないのであるどう云ふ樣子なのかと云へば、朝はおそく起き、夜は深更まで起きてゐて、放談飲酒に時間を潰すのであつた。でなければ、學校の圖書に入りきりで、英雄傳やフランスあたりの古典文學に讀み耽けるのである。生徒の間には「自由」と云ふ言葉が流行つた。思想の自由、信仰の自由、政治の自由、言論の自由。その渦の中に捲き込まれた筈であつた少年のプーシュキンは忽ち同僚を拔いて彼等の首領株になつて了つた。彼が浪曼主義文學の祖、ジュコフスキーやバツーシュコフやデルジヤヴインや老

歴史家のカラムジンを崇拝し彼等の詩句に倣つて詩作に沒頭し出したのも確かにこの時分で、一方では盛んに英雄崇拝熱にうかれて英雄崇拝の論議を闘はせてゐた。かくてこんな放埒な生徒の中心人物となり、尊敬の的となつた彼がこの學校の教師や校長から少なかず不良性を帶びた生徒として睨まれたと云ふことは何の不思議もないことで、彼は今にも放校處分を受けやうとしてゐたが、運はまだ彼を見放さなかつた。それは一八一四年であつた。カラムジンの主宰にかゝる「ヨーロッパ新報」にフランス風の詩がA・H・Kの匿名で表はれた。發表當時はそれが誰の作であるか解らなかつたが。その次の歳には、A・H・Kと云ふ匿名は自分だと名乘つて堂々と今度は本名で又フランス風の詩を發表して世間の注目を惹いた者があつた。それはプーシュキンであつた。當時首府で發行される新聞は極く少數であり且つその讀者も殆んど貴族か高等官吏が文人に限られてゐたので、たま〳〵かう云ふものが現はれると直ちに驚きの目を見張るのである。するとその年のことである。このツアルスコエ・セローの妙な貴族子弟の學校で公開的の學課試驗が行はれて、試驗場には當時の文官や有名な文學者等が列席した。その人々の中にデルジャヴインがゐた。丁度プーシュキンの順番になつてプーシュキンが自作の「ツアルスコエ・セローの印象」を彼等の前で朗讀した。それはこの年齡の少年の作としてはまことに稀有な名文であつた。老詩人デルジャヴインの注意は彼に集まつた。老詩人はプーシュキンの文章に對して賞嘆措く能はなかつた。そして少年がそれを朗讀し終るのを待ち構へたやうにして彼の側

へ近よつて彼を抱かうとした。少年は驚いて校庭へ逃げ出した。だが、日頃から自分の崇拜するデルジャヴインを敬服させたと云ふ誇りと喜びとはこの少年の胸にはち切れさうにあふれてゐた。そして内心秘かに彼の名譽がこの老詩人の口から文壇へ紹介されることを祈つてゐたのである。その希望は彼の願ひ通りに行はれたと云つてもいゝ。プーシュキンの詩才は文部省の高等官達の間の話柄となつた。詩人ヴイアゼムスキー太公は迚もこの少年の才能に適はぬと云つた。デルジャヴインはこの少年を詩人に仕上げてはどうかと云ふ提議を彼の仲間に持ち出したのであつた。かくて、「出發點はまるで、さうした種類の文人にならうと云ふはつきりした考へもなかつたプーシュキンを一つは自分の力とは云ひ條、先づ周圍から彼を詩人たらしむべく型造つて行つたわけである。かやうにしてプーシュキンの文名は文學社會に一時ひろまつて了つた。それと同時に、文壇からは來るべき詩星の一人としてその將來に多大の矚目を受けるやうな有樣とはなつたのである。カラムジンと親み合つたのもその頃であつた。尤もずつと以前には、カラムジンが暫くモスクワに逗つてゐた時分プーシュキンの父の家で會つたことはあるがそれは彼が幼ない時のことであつた。二度目に出會つた（ツアルスコエエセロで）時は、プーシュキンの文才がカラムジンにも充分に認められてゐたので、カラムジンは彼を勵ますために、例の自作のロシヤ歴史を彼のために朗讀してやつたりなどした。かうした四圍の境遇に置かれた彼はやがてこゝにいよ／＼自分の詩的能力の發展に一身を捧げやうと決心するに到つたのである。この學校にある間、彼は二百幾篇の抒情詩風の詩やヘレン流の歌やエピグラムなどを作つた。それ等は大部分當時の有名な文學者、詩人に宛てゝ書かれたものであつたが、不幸にして當時の檢閲官の目から見ると、孰れも政治的又は道德的に世間へ發表を許されないものばかりであつた。と云ふのは、この學校に於ける生徒間の空氣と云ふものが、或は無政府主義的な傾向を帶び、或は極端にエロチックなものであり、さうした空氣の中に包まれて詠つたものであつたから、右のやうな風の作物になつて彼の趣味なり思想なりが表現されたのも無理のない話であらう。有名な「ルスランとリウドミラ」が作られたのもこの時代（一八二〇）であつた。恐らくこの長篇の妖奇物語が學校生活に於ける一大收獲であつたと同時にまた最後のものであつたらうと思はれる。「ルスランとリウドミラ」が發表されて彼は一躍して文壇の寵兒となつた。首都は勿論のこと、地方の都會でも此の作を得る機會のある人々は、軍人、商人、學生、官吏などの諸階級を通じて廣く讀まれた。少數の印刷本は瞬く間に部數の不足を告げた。その結果、一冊の本を寫した肉筆の寫本は地方から地方へと移されて行つた從來の妖奇物語と云ふべきもので、ロシヤに紹介されてゐるのは主として西部ヨーロッパのものであつたが、プーシュキンのこの作物は新らしく自國の題材によつて所謂國民的の妖奇物語（傳說史謠の一種）を作り上げたと云ふ點でも少からず歡迎されたらしかつた。當時の文壇としては全く珍らしかつたに違ひないのである。その物語の骨子と云ふのは、一人の魔術師の侏儒がキエフ町の太公ヴラジミルの

一人娘を引つ拉つて己が不思議な城中へ閉つて置く。その娘にはルスラーンと云ふ婿があつた。尤もこの婿の他にまだ三人の戀人(と云つても男から見れば彼女が戀人であつた。つまり片想なのである)の悲しみは斜めでなかつた。そうして彼等は侏儒の魔城へ押し懸て行くことになつた。即ち四人の勇士の冒險と、リウドミーラの幽閉。最後に於けるルスランの勝利。さう云ふことを組み合せたもので、作者が題材の取扱ひ方と技巧との魅力はまことに從前の物語に比べて朝の露のやうに、春の曉の微風のやうに清鮮な或物を讀者の心に波打たせずにゐないのである。だが、その物語の主潮として流れてゐるその清鮮な或物とは一體何であつたかと云へば、それは作者自身すら恐らく意識しなかつたに違いない「自然的(ナチユラリシム)」と云ふことに外らなぬ。「自然的」と云ふことは或時は「素朴」とか「無飾」とか「單純」とか云ひ替へられる。まことにロシヤ人はそう云ふ意味に於ける「自然的」な心の持ち主であつた。また持ち主であり、且つ持ち主であらうと思ふが、ロシヤの物語類に頗る突飛な、突然な、何の文(あや)もなくして男女相識りし相戀する事が多くの場合に取り扱はれてゐるが、それは彼等の「自然的」な心を知るものゝ誰もが一向怪しまないところである。プーシュキンもそう云ふ人種の一人であつた。讀者も亦さうだ。彼等は「自然的に在ること」を愛してゐたが、プーシュキンによつて、ことに「ルスランとリウドミラ」の一篇によつてそれを具體的に示されるまでには、まるで意識しなかつたと云つてもいゝのであつた。彼等の心の中からそう云ふ思想の脉を掴み出して見せたのは「ルスランとリウドミラ」であらねばならぬ。彼等が歡喜の源を明示したのはそれであつた。「寫實主義」と云ふ言葉はそれまでロシヤ文學の辭典の中にはなかつた。この時に當つても讀者と作者と當時の衒學的な文學者等はこの一篇の物語によつてロシヤ文學の礎石が置かれたのだと云ふ事實に對してすら互に無意識であつたのだ。勿論プーシュキン自身すらさう云ふ事業をしやうとも思はないのであり亦現にその時も自分の功績についてはたゞ物語の珍奇がかうした評價をもたらしたものと云ふ考へ以外にはなかつたと云つていゝ。ところが、その當時に存在してゐた二つの文學の黨派——一つは擬古派、一つはジウコフスキーによつて明らかに現代されてゐるローマン派——は爭つてこの評判になつた「ルスランとリウドミラ」の派別を試みた。それはどの派に屬すべきものであるか? と云ふやうな討議は猛烈なものであつた。詩と云ふものゝ綺羅びやかな長所のないこれが詩と云ふ資格を持つものと云へるだらうか? と云ふやうな說が擬古派の人々から傳へられた。續いて、「ルスランとリウドミラ」に對する排斥と非難の聲が彼等の間から湧き出た。その非難の一例を擧ぐれば、「ルスランが大男の鼻の孔の中へ鎗を振り翳して飛び込んで行くとか、鼻の下に突つ立つたとか、髮につかまつてぶら下つたなどゝ云ふのが我々の持つてゐる今日の新らしい詩だらうか、果してそれは詩と云ふことが出來るだらうか? と云ふのであつた。その時もプーシュキンは只微笑する丈で一言の答辯も敢へてしなかつたのであるが、かう云ふ旋風がまき起つてゐる最中に突然彼は全く別の方面へ走り出した。そ

れが彼の藝術の上に、どう云ふ影響と結果とをもたらしたかと云ふことに就てはまつたく無頓着で、そして何の顧慮も思索も費さずに一八二〇年彼の最も親しい友人等によつて組織されてゐる社會改革の結社の中心に飛び込んだのであつた。

それは彼の詩「自由を歌ひて」に就て見ることが出來る。その前に（一八一七年）彼は、例の妙な學校を卒業して近衛兵の隊に入つてゐたので、彼はその詩才に秀でゝゐる樣に、當時の武術にもなかなか得意の技を持つてゐた。馬術、銃獵、水泳、角力など彼は好んで行つた。そして、これが少年時代のプーシュキンであつたかと思はれるほどの强健な體格を造つてゐた。で、先刻の結社に入つたのは、それから間もないことで、その結社と云ふのは例のカラムジンやジュコウフスキーのやうな文學社會の人々によつて組織された、シシコフの傳統主義とは正反對の文化運動（その結社にも彼は加つてゐたが）以外に純政治的の革命を目的として、この方面に活動する熱狂者等によつて秘密に作られたところの、どちらかと云へば、前後の考慮もなく、當時の專制君主制度に對し、官吏の專横に對して一つの改革を實行するべく熱狂してゐた青年達にはその行動から見ると、いかにもやり過ぎて危險な政治的聯盟であつたのだ（エ・ゼ・サック氏著ロシヤ民主主義運動史參照）。――この秘密社記の中には、ジュコーフスキーやカラムジンなどがはじめ稱へた「自由の保護」に感化を受けた若い學生達以外に中心人物としては、ムラビヨーノやクレイエフやベスツージエフ・フリウミンやペステルなどゝ云ふ急進主義の人達があつて、その中へ新らしくプーシュキンの名が加へられたと云ふわけであつたが、彼がこの秘密結社へ加盟したと云ふ噂が官邊に傳はり、密々に革命運動に着手してゐると云ふ報知がアレキサンドル第一世の耳に達して間もなく、次々に發表される詩人の諷刺文とともに、彼は極端な黑表上の人物となつてやがて、それはアレキサンドル第一世の憤怒となり、詩人のシベリヤ流刑決定となつて現はれた。今まで元氣であつたプーシュキンはひどく驚き恐れた。そしてカラムジンの許へ赦免を乞ふて呉れる樣に出掛けた。詩人を愛するカラムジンは直に無造作にそれを引き受けて、アレキサンドル第一世に謁してプーシュキンに對する特別の情宜と寛大とを「彼はロシヤ文學の誇りであるから」と云ふ一語を楯に、頻りに赦命を願つて見たが、この偉大なる老歷史家の命乞ひすら既に皇帝の怒りを和らげて氣を換へさせるには力がなくなつてゐた。しかし、幸にして、どうにかこうにかシベリア流刑だけは免かれたが、今後一年間は一切筆にも口にも沈默を守ること、云ふ嚴しい條件で南部ロシヤへ一小官吏（チノヴニク）として追ひやられて了つた。流石に元氣な彼も一時は非常な悲嘆に囚はれたと云ふことである。その悲痛の心の中に彼は早々として旅立たねばならなかつた。かくて彼が孤影飄然と行き着いたところはエカテリノスラヴで、着くと直ぐ烈しい感冒にかゝつて殆んど一命も危く見えた。丁度その砌りに、コウカシアの陸軍總司令官として赴任の途にあつた、ツアルスコエ・セロ時代の學友の父ラエヴスキー將軍が彼の佗住居を訪ねて、この有樣を見ると驚いて自分の家へ彼を引取つ

てやつた。將軍の家はカメンカの丘の上にあつた。考へると運命と云ふものは不思議なものである。このプーシュキンが後に決鬪で斃れた際に、民衆を煽動したと稱する科で、同じ樣にこのコウカシアへ流刑に處せられたレルモントフが、後日、この風光明眉の山水に魅了された樣に、彼の先驅者であつたこの詩人プーシュキンもコウカシアの風物から受けた感化は絶大なものであつた。已ならず彼を優遇してくれた將軍の家族は遇然にもバイロン宗の人達が揃つてゐたので、プーシュキンは期せずしてバイロンの一愛讀者となり且つ熱心なバイロンの崇拜家となつて了つた。バイロンの英雄的な性格と、プーシュキンのそれとは端なくもかうした雲深い山溪の間で、ぴたりと行き合つたやうなものであつた。それまでに彼の心の中に漸次に形つくられてゐた厭人癖、傳統破壞、個人主義と云ふやうな思想の潮はだん〳〵高まつて來たのである。彼の內的及び外的の生活は一般人のそれと段々異つて來た。人々は彼を指して反キリスト敎者だと罵つた。それは彼の言動と特異な政治的思想や哲學の上ばかりでなく、彼の生活の樣式全體が、妙に幻想的な色彩に包まれてゐたからであらう。彼は尤も、當時の嚴格なギリシヤ、オルソドックスから見れば、反キリスト敎者のやうに考へられ兼ねない惡魔的の仕事をしたり、決鬪を好んだり、兎角さう云ふ氣味があつた。そう云ふ見方をされた彼は文官と共にベッサラビヤのキシニエーフへ赴任せねばならなくなつた。そこには、ギリシヤ人やモルダヴイヤ人やトルコ人やイタリー人などが群居してゐた。町全體が何となく、異國情緒的の空氣に包まれてゐた。詩人の思想や觀察はそこでも亦何等かの新らしい物を發見したのは疑ひもないことである（「バチサライの泉」參照）。彼はもとより囚人として此南國へ遣られたのではなかつたから、生活は可なり自由であつた。彼は是等の南人種の中に混つて可なり不道德的な生活に耽溺し、非常な不規則の日月を過してゐた。その時に得たらしい惡癖（放蕩、飲酒、賭博）は後にペテルスブルグで殆んど彼を破滅の淵へまで誘ひ込まうとしたほどであつたから、かくて一八二二年の秋、プーシュキンは町の者と烈しい喧嘩をして隣の町へ轉任を命ぜられた。彼はキシニエフを出發した。そしてその途上でツイガン（遊牧者、日本の虛無僧、旅藝人、乞食のやうな種類の渡り者を云ふ）の群に投じて放浪流轉の旅をつゞけた（彼の作「ツイガン」の主人公アレコと云ふ嫌人癖の個人主義者は、その時の自身を描いたものである）。間もなく彼はオデッサへ着いた。そのオデッサの長官と云ふのは、前の長官よりもずつと武斷的な矢ヶ間敷屋で、彼の爲には全くの鬼門であつた。彼はプーシュキンを單に貧弱な安官吏として以外には、何等紳士的、或は流謫地にある有名な詩人としての待遇は與へなかつた。從つて彼はこゝでも立派に虐待された。が、この町へ滯在中にふとした機會から、或一人のイギリス人と知り合になつて、その人の手からセレーを借り受けて讀むことを唯一の慰安としてゐた。彼が、セレーの作物に接したのはこの時がはじめであつたらうと思はれる。セレーの繙讀はプーシュキンの傾きかけてゐた信仰をだん〳〵非宗敎的へ導き、彼の國家觀念を稀薄にして了つた。オデッサに於て彼が公に

した右のやうな非國家的の所謂當時の國家に取つて、頗る有害な、危險な、露骨な言論は、中央政府をして一層彼に對する憎惡を深くさせた。詩人プーシュキンは、いつの間にか、シベリヤ流刑を免ぜられるための條件を忘れて了つてゐたのであつた。恐らく、それやこれも皆、セレーの感化に歸すべきものかも知れないと思ふ。一八二四年には、彼は、プスコフ政廳の管轄に屬するミハイルフスキーへ遣られた。そこには、彼の父が持つてゐた地所や家屋等もあつた。その一軒の家に彼は住居を卜したのである。言葉を封ぜられた囚人同樣の待遇の下にあつたプーシュキンの生活には一言にして之を盡せば、只そこに神秘的な思索と不斷の冥想と讀書があるばかりであつた、その思索を沈默の中に彼は從前より深い、そして新らしい成熟した人生の一角に足を踏み入れやうとしてゐた。その讀書にはバイロンの感化と同樣に强く大きな力を彼はセイクスピアに見たのであつた。この寓居に於ける一切の生活は彼の傑作「エヴゲネ・オニエギン」の第四章に於て私達は見ることが出來る。それはこのミハイロフスキーに於ける彼自身をスケッチしたものに外ならぬのであるから、この謫居に彼はまた十幾年の昔に溯つた經驗を繰り返してゐた。と云ふのは、例の、親のやうに彼が慕つた忠實なる下婢アリーナ・ロヂオノーヴが再び彼の唯一人の話相手になつてくれたからである。プーシュキンの生涯を大別すれば、彼が生れてから現在の境遇に逢着するまでと、今後の生活なのである。プーシュキンの生涯に於ける最も重要な轉化期は此處に横つてゐたと云はねばならぬ。彼は毎日の氣欝をアリーナ・ロヂオノヴによつて慰め癒されてゐた。彼は昔に還つた心持で、再び、この溫良な女性の口から淳々として昔噺や民謠のありつたけを聞かされ且つ自動的にと云ふよりも、ずつと乘り出して彼女の物語りに傾聽してゐた。同時に、少年時代に於ける彼の性格の急激な變化は、再び、こゝで繰り返されずにゐなかつたのである。と云ふのは、今まで彼がそれに心醉してゐた外來の情趣と云ふものを、急に嫌ひ出した。と云ふのか、それ以上に醇な趣味を發見したと云ふのか、兎に角彼は今までの世界から一時に逃げ出して、その時代の明確な雰圍氣に浸らうと努めたのであつた。それについて思ひ出すのは彼の住居の附近にトリゴフスキーと云ふ淋しい町があつて、そこにオッシポフと云ふ純ロシヤ趣味を尊重し、それに從つて生活してゐるところの或素朴なインテリゲンツィアの家族があつた。それは全くが、想像するに、當時のロシヤ人としては模範的な教養のある家族であつたらしい、彼はこの家の主人と近づきになり、その人の娘達とも交際するやうになつたのである。かうした家族との極めて智識的な往來も亦手傳つてプーシュキンの心の中に復活した純ロシヤ趣味の高潮を助けたらしく思はれる（「エヴゲネ・オニエギン」の中へ現はれる女主人公は此家族の娘達がモデルになつてゐる）。プーシュキンの藝術はこのオッシポフ一家の人々の趣味によつて無意識の裡にロシヤ風へと導かれて行つたことは明らかな事實であらうと思ふ。だが、かうした心の轉化——急進的社會思想、革命、自由保守運動——から遁れて生れた國の昔ながらの習慣風物に隱れた彼は文學的使命を存續する野心と創作

の發表慾と現在に到るまでの名聲を保守して行きたいと云ふ希望とは勃然として燃え上つて來た。同時に、この手狹い町に逗つてゐることが、この上もない苦痛となつて來た。彼は日夜この土地を離れて、しかるべき都會での華々しき活動を夢想してゐたのであるが、そこへ、トリゴウスキーの者が、たま〳〵聖ペテルスブルグ市からこの町へ戻つて來てプーシュキンに取つては、全く驚くべく意外な報知を與へたのであつた。それは、聖ペテルスブルグ時代にプーシュキンが投じて革命運動にあづかつてゐたと云ふことになつてゐる政治的の秘密團體（十二月黨）の革命騷動の話であつた。その騷動のために通路は兵士のために塞がれ危險を冒して漸くやつて來たと云ふことであつた。それを聞いたプーシュキンは一度は彼等と生死を共にしなかつたことと悔ゐ、且つ又飜つて、冷靜に考へてかうした仲間から隔てられてゐることが、彼が、本來の目的から云へば、非常に有り難いことでもあつた。そうしてゐるうちに、引つゞき十二月黨員及首領の捕縛と計畫の失敗との報知がこの町へ傳へられた。

この事實と前後して、こゝに、このプーシュキンの新らしい路が自然に開拓される機會が彼を待つてゐたのであつた。彼は、以前十二月黨員との間に往復した改革運動に關する文書を慌てゝ燒き棄てゝ了つた。彼は自分の罪過がまた蒸し返されることをひどく恐れたのであつた。丁度その時分であつた。彼の書齊へアリーナ・ロヂオノヴが入つて來て、門前に宮廷からの使者を乘せたモスクワ警察署の旅行馬車が停まつたと云つた。プーシュキンは何心なく出て見た。巡邏は何の說明もなく彼を殆んど投げ込むやうにしてモスクワへ向つたのであつたが、プーシュキンの恐怖はやがて彼が、クレムリの中の宮室へ送られたとき、全く餘計なものだと云ふことが解つた。それは、十二月黨革命のもなかに（一八二四年十二月十四日）、即位したニコライ一世が、プーシュキンを引いて面接するための、當時のロシヤ官憲の一つの常用手段であることが解つた。皇帝がプーシュキンを招いたのは、十二月黨革命に關する可なり穩かな訊問と、今度に於ける彼の行動に就ての注意その他のことで、この機會に彼の流刑を許されることになつた。プーシュキンは敬順の意を示した。皇帝はこれから先の彼の作物は皇帝自身が檢閲すると云ふことを明言した。プーシュキンは皇帝が、彼を詩人としての取り扱ひ方と、かうした寬大な恩典に感激して、この皇帝のために働くことを誓ひ且つ自分でもさう決心したのであつた。處刑以前のプーシュキンと現在のプーシュキンとは別人の觀があるではないか？　だが、プーシュキンに對する好意は只この寬容なニコライ一世だけであつた。一度つけられた汚點はどうしても拭き去ることが出來ないのを彼は間もなく覺つた。それは、彼が再び以前のやうに自分自身の世界に戻ることが出來たのを喜び且つ間もなく發表した創作に就て、そこにニコライ第一世の好意を前提としても、當時の警視總監であつた伯爵ベッケンドルフの恐るべき制肘と壓迫とを發見したからであつた。ベッケンドルフ伯爵は依然と少しも變らぬ疑ひと憎惡を挾んで彼の作物を嚴重に檢閲したのである。それは、これまでの詩人や文學者達が一度は必ず經驗しなければならない壓迫と警戒とを、

實生活の上にまで感ずるやうになつた。一八二七年にニコライ第一世の承諾の上で「毒の樹」、「スタンザ」「エヴゲネ・オニエギン」、「ステンカ・ラージン」などを作つた。しかしそのうちの最後の二篇はベッケンドルフ伯爵の名によつて、發表を禁ぜられた。その理由とも云ふべきベッケンドルフ伯爵の口實は、是等の二篇は、いづれも宗教上、また道德上公表を許るすわけに行かないし、第一、この二篇は藝術品としてもあまり秀れたものではない、それは、フランス藝術の模倣に過ぎない。と云ふのである。かうした制限とベッケンドルフが權能の暴用とは、多少、明るくなりかけてゐたプーシュキンの性格を一時に陰暗に、神經質に傾かせた。彼は不安に襲はれた。生活の規則的步調はしどろもどろに亂れて來た。彼はその憂鬱を遣るためにまた遊蕩を始めた。間もなく田舍へ引込んで、「狡い騎士」や「ドンジュアン」や「ボルタワ」その他の短篇を作つたその間にゴンチャレフと云ふ人と知り合ひゴンチャレフの娘とも親しくなつた。やがてこの娘とプーシュキンは戀に落ちた。そうして一八三一年にモスクワで結婚式を擧げたのである。しかし、この結婚は彼の運命を釘づけたものであつた。彼は稀に見る容貌の美しいこの娘と結婚したために死期を早めたとも云へないことはないであらう。だがツアルスコエ・セロに於ける新婚當座の作物は、彼の新らしい氣分のもとに、「ツアル・サルタン物語」、「僧オストローフ物語」などが、引つゞき發表されたのではあつたが、それは少なからず以前の讀者の期待に外れたものばかりであつた。それ等はあまりに其筋の意向を氣にして、沒收、公表不許可を恐れたために、自然幾分當局に對する讃美的の感情が仄見えてゐたためであつたらうが、位地の安全と物質上の利益は、プーシュキンに取つてはよかつたかも知れない。何故なら、詩人の態度が何となく官邊尊重と云ふ風に變つて行くのを認めた宮廷では、詩人の懷柔策として彼に外務省の一椅子を與へ、一年に五千ルーブルを給して可なり優遇したからである。且つ彼に詩材を提供する意味に於て宮中の記錄所の調査の自由を與へ、一方からは、ピョトル大帝の事蹟を綴錄させるために、暗にそれを勸めてゐた。その翌年「プガチエフの謀叛」や「ルサルカ」や「ドウブロヴスキー」などが完成せられたのであつた。かうした政府に對する詩人の妥協は、他方面に於ては、彼の熱心な讃美であつた愛讀者をだん〳〵減らして行くことになつた。プーシュキンの考へでは、實のところ、官邊と民衆との兩方に自分の勢力と感化とを與へるつもりでの、最初の出發であつたのが、無意識のうちに失敗して了つたのである。その苦惱は明らかに彼の詩「民衆へ」に見ることが出來る。だが、彼は智的生活の頂點に達してゐた。

そして云つた。「この地上に幸福と云ふものがなければ、せめては平和と自由とがあるだらう」と。だが、そうした考へに辿りつくほど彼の心は悲慘な狀態にあつたと云へるであらう。「世の中と云ふものは厭な泥沼見たやうなものだ」とも彼は云つた。世の中は苦痛と、不愉快の坩堝に過ぎなくなつた。そしてそこに住むことが堪へがたくなつたのである。この悲哀の中に突如として持ち上つた事件

があつた。プーシユキンの死はだん〳〵近づいて來た。それはお互に睨み合つてゐて、そして一方ではプーシキユキンの缺點を見つけては彼を穽に陷れやうとしてゐたベツケンドルフ伯爵の姦策に到頭乘せられて了つたことである。プーシユキンの手へ幾通かの匿名の手紙が屆いた。その手紙には彼の若く美しき妻（當時貴族の社交界の花形であつた）が若き守衛のヘツケレン・ダンテー伯爵と不義を働いてゐると云ふことを密告したものであつた。その手紙はプーシユキンをひどく惱ました。だが、彼は妻を信じて疑はなかつた、すると、さう云ふ憎むべき噂は段々廣まつて行つて、お終ひにはあまり洗錬されてゐない火急な性質を刺激されて、終に怒り出したのである。彼の妻が彼に說いてさうした無根の事に拘はらずして田舍へ引込まうと勸めるのも聞かずに彼は、當時の紳士の名譽と體面を保つために採るべき取段としてダンテー伯爵に決闘を申込まねばならないことだと信じ、且つさう思ひ詰めるまでに自分を忘れて逆上した。彼はかくて準備された警視總監等の奸穽に落ちて了つた。一八三七年一月二十七日にダンテー伯爵とピストルで決闘をした。そして彼は恐ろしい致命傷を受けた。この決闘の時間と場所（聖ペテルスブルグ郊外）とがベツケンドルフの伯爵の耳に入つた時、その決闘を中止すべき責任者としての彼は、巡査を數名急派した。だが、巡査達が駈せ向つたのは、まるで反對の方角であつたのだ。プーシユキンは傷いたまゝ、聖ペテルスブルグの彼の家に擔ぎ込まれた。命數は刻々に盡きやうとしてゐる。その中にあつて、彼は自分の妻の將來を頻りに苦にしてゐたが、やがて、彼が危篤に陷つたと云ふ報知が、ニコライ第一世まで達すると、ニコライ第一世は使者を遣つて彼の心を慰むるために、彼の遺族の生活その他のことは、皇帝の方で面倒を見てやると云ふやうなことを告げた。彼は僅かに微笑を浮べ乍ら頷いた。枕頭には、彼のこれまでの著書が列べられた。その傍には、彼の妻やジユコヴスキーが彼の最後を見守つてゐた。戸外には、殆んど往來を遮斷するまでの民衆が彼の容態の經過を知らうとして集まつてゐた。かくて、二日の苦悶の後に彼は死んだ。プーシユキンの訃音は民衆に一つの偉大なる打擊を與へた。プーシユキンの死は、はじめてロシヤが此處に偉大なる國家的の損失を受けたのだと云ふことに氣づかせた。民衆は決闘の眞相を知ると同時に騷ぎ出した。その騷ぎのまんなかに飛び込んで熱狂せる民衆を煽動したものがあつた。プーシキユキンの死を悼む一文を草してそれを巷間に撒き散らした。民衆はその男に導かれて、危く一つの運動を始めやうとしたが、その男は直ちに捕はれてコウカシヤに送られ、かくて辛うじて事なきを得たのであつた。その男と云ふのは、あの有名な後年のユヴリエヴイツチ・レルモントフであつた。詩人の缺點、彼の行き當りばつたり主義、民衆と政府に秋波を送つてゐた晩年、そうしたプーシユキンに對する民衆の感情は、彼の死によつて償はれて餘りがあつた。民衆の心は只悲哀と彼の事業に對する感謝で蔽はれてゐた。各階級の人々は詩人の死を弔ふためにさま〳〵の計畫をしたが、政府はそこまで干涉した。政府が彼に對する憎惡と狐疑は、彼の墓場までつき纏つて行つた。そして民衆の示威

運動を恐れるのあまりに夜中ひそかに彼の遺骸を警護の下にスヴイアトゴル・ウスペンスキー寺領へ運んだ。そこには彼の母親が眠つてゐた。

サルタン王物語序說（アウシユキン）

ある夕三人の乙女が、
窓際に坐り乍ら機を織つてゐた。
そのうち一番年かさで料理人に應はしい娘がかう云つた。
「もし妾が御妃さまでしたなら、
妾は盛んな宴を開いて、
世界中の人達と一緒に食べたいのに」
すると二番目の、これはまた機織女に應はしい娘がかう云つた。
「妾がもし御妃さまだつたら、
妾は老人や若者のために織つてやるのに美しい、そして丈夫な亞麻布をどつさりと」
すると今度は只可愛らしい乙女に應はしい第三番目の娘がかう言つた。
「もし妾が御妃さまでしたら、
妾は夫の皇帝のために、
星のやうに輝く男の子を生んで進ぜるのに」と、
彼女の空想がかう云ふ風に、
語られたかと思ふと扉の錠が靜かに搖れて、
あの美しい國の皇帝が、
直ぐまぢかに來て居つた。
彼は處女等の話聲を聞きつけたのであつた。
そして散策の足をふと止めたわけであつた。
立ち聞きして打ちよろこんだのは、
三番目の乙女の野心であつた、
「お前は幸だ。嚴そかにも優しきものよ！　お前は幸者だ」と彼は言葉をかけた。
「これから直ぐ私の妃におなり、
そして私に立派な皇子を生んでくれ、
悧巧な可愛いゝこの娘の姉達よ、
これから私の許に來て長く留つてくれ、
お前達のうち一人は料理女になるがいゝ、一人は私達の爲めに亞麻布の監察人になるのだ」

こゝで一同は皇帝の宮殿へ、
銘々の運命と向き合ひ乍ら連れ立つて行つた。
皇帝はうら若く、また何の猶豫もせずに華燭の燈はやがて眩く燃え立つた。
その夜たゞちに、
彼は宮廷の祝宴につらなつた。
衆客は心づいた。
二人を彼等の部屋へ移すことを、
そして象牙の床に導いて、
この新婚者を其の上に殘して引き揚ぐることを、
時に厨房では料理娘が泣き沈んでゐた
織機のそばにゐた機織娘は嘆息してゐた。
二人が二人嫉妬の舌を打ち鳴らして、
彼女達が逸した幸運をかこち乍ら、
一方では、それは彼女が努めたゝめに、
その當夜に娘はみごもつた、

星のやうに輝く皇子を。
丁度その折りに戰ひが開かれてゐた。
サルタン皇帝は誓ふやうな口調で、
軍馬に跨り乍ら彼女にかう言つた。
「お前が私を愛してゐるなら體に氣をつけてくれ」と、
彼が宮廷を離れて戰ひのもなかにあるとき、
敵は勇氣を挫かれて了つたし、
皇子の生れる幸福な朝も來た。
その小兒、身の丈四尺、が生れた。
親鷹に似た子鷹のやうな、
若い上に妃らしい妃は、
騎子をつかわした。
父皇帝にあてた手紙を持たせて、
だが、料理娘と織機娘と、
嘘つき仲人は、

彼妃の名譽を毀さうと考へて、
使の途上に騎士を捕へ、
別の手紙を持たせてやつた。
驚くばかりの事柄を認めて、とは、
「ある夜妃は產み落されました、
男子でもない女子でもない——それよりもつと——蛙でも鼠でも魚でもない、
獸同然の奇異な小人を」と。
この奇怪な事情に接した皇帝は、
使者がもたせた消息にあるやうな。
見る見る氣も狂ひ始めて、
はじめのうちは使者を絞らうと思つたが次第に怒りが鎭まると、
やさしき言葉を與へて使者を追ひ戻した、
「皇帝の歸京を待たれよ、
さすれば皇帝はそちに獸辭の挨拶をのべむ」と、
危いところを遁れた使者はかくて、

御殿へ急いで返事を持ち歸つた。
だが、料理娘と機織娘と、
嘘つきの仲人は、
使者を戸外に遮り乍ら、
旨い酒を呷らせて置いて、
彼の體を探り手紙を拔き取つた。
その代り僞書をこしらへて置いた。
ところが醉ひつぶれた使者の男は、
かう認めてある手紙を屆けた。
「皇帝は命ずる、もろ〳〵の貴族達に妃と其子を掠つて一刻も早く秘かに、
海へ投げ込めよ」と
もろ〳〵の貴族達は刑の猶豫もせずに、
妃の悲歎に、
可憐の妃の部屋へ押し入り、
最後の運命を宣告し、

子供と彼女へ危難を加へた。
僞られた皇帝の酷き意志によるとて、
かくて怖ろしい手紙は讀まれたのであつた。
その刻すみやかにも、
黑い箱は用意とゝのふて、
彼女と子供はその中へ押し込められた。
やがて青みどりの海原へ、
投げ込まれて浮き漂ふた——それは皇帝の命令だと、
青空には無數の星が閃めいてゐた。
其海原には無數の波が踊つてゐた。
其空には雲の布がたなびいてゐた。
其海には一つの樽が浮動してゐた。
失はれ喪心したものゝやうに、
身をもだへ手をふり乍ら妃は泣き叫んだ。
だが子供の方は晝となく夜となく、

體はすこやかに力は强く次第〳〵に、
一日過ぎても妃は泣きしやくつてゐた。
子供は生の力に波打つやうに、
足はやき波に「あゝ！　波よ！
岩壁や洞穴に打ちよする波よ、
お前は行きたい處へ勝手に行ける、
そこへ打ち上くる時に岩壁を遂石のやうに尖らせたり。
陸の汀をなだらかに斜したり。
浮ぶ舟足を止めたり辷らせたりすることも出來る！
だが、我等の魂を危地へ運び去るなよ——
後生だ我等を岸邊へ打ち上げてくれ、大海の波よ！」
どぶりと音がして波はその通りになつた樽を浮べて、
斜汀へいと物しづかに横たへた。
と思ふとまた敬々しさうに退いて行つた。
こゝに母子二人は、

陸地についてよろこんだ。
だが、彼等はどうして遁れ出ることだらう——
相變らず黑い樽の中にちゞこまつてゐるか？
神よ！　二人を救ひたまへ！　子どもはやがて起ち上つた。
頭を樽の天井に押しつけ乍ら、
いさゝか肩ひぢを張つて——
「窓の戸を破らうではありませんか？」と彼は叫んだ。
天井を破りて——かくして二人は自由の體となつた！

「青銅の騎手」〔序曲〕

彼は淋しい岸に立ち乍ら、
深い波のとゞろきのやう考へ込んでゐた。
はるかの彼方を眺めたときに、
ネヴ河は目の前に悠々と流れて、
たつた一隻の舟が矢のやうに走つてゐた。
かなたこなたには綠の沼苔が見えて、

フインランド人の汚ない小屋の黑點があつた。
太陽の光は霧の簾に隱れたまゝ、
暗い森の奥に祝の宴もせずして、
樹は嘆き、ささやくだけであつた。
彼はかう考へた。
『スヴエデンの威力を自分等の手で遮つて、
此處に街を建て、一方には棘の先を向け、
自分等の隣邦の誇を惱ましてこの方、
天然自身すら自分等の國の窓を開いて、
歐洲の高塀へ通ずることを希ふのだ。
バルチックに沿ふて堅固な壁、
その新らしい港へ向つてまつしぐらに、
船旗を飜へしつゝ續いて入る外國の船々が、
やがて自分等の樂しい宮廷の祝宴にまで、
やつて來るのを見ないか。

百年にして町は一新した。
北國の誇りと驚異とは、
森の茂る沼地から起つた。
嚴そかにも華々しき美よ！　その前に、
嘗ては寂しいフィンランドがあつたのだ。
天然の繼子は可哀さうに漁網を、
處女の波間へ投げ、その仄暗い影は、
荒涼とした低地の岸邊にある。
彼が村の寂莫を破るに過ぎなかつたのだ。

樂しさうな群衆が、
互に押し合ひへし合ふ、
今こそこの賑やかな道々には、
塔の林と宮殿が聳えてゐる。

船の足跡は長々と過ぎ、また過ぎ行く、
富の撒き散らされた港の濱にそふて、
ネヴ河は御影石の衣を纏ひ乍ら、
水の上に橋々をかけ渡して、
『島々の娘』然と飾り立てられ、
樂しい綠の公園を擁してゐる。
今ぞ古きモスクワは、
若き都の前に頭を垂れてお辭儀をするのだ。
丁度新らしい皇妃に向つて、
紫の葬衣まとふた太后が腰を屈する樣に、

私は汝ピョトルの創造を愛する。
私は汝の峻嚴な風貌を愛する
廣々としたネヴ河の威力ある流れ。
その偉大なる御影石の堤防の力。

入り組んだ鐵の水門の設計、
そればかりではない汝の透明な考へ深い夜々も、
柔らかな銀色の月のない閃めきが、
私の部屋に差し込む――が、燈もなくて、
私は讀み、書き乍ら深夜の鐘音を聞き過す。
丁度その時には、綺麗に截られた巨屋は眠つてゐる。
空虛な道に添ふた家々、そこに高々と、
海軍本部の尖塔が翔つてゐるのだ。

夜の深い暗は、黃金の空雲にふれないで、
夕ぐれに代つて波立つて來る黎明に、
今頭を屈しやうとする夜、一時半ばの支配に、
私はまた汝の酷い冬の輝きを愛する。
ネヴ河の氷上を辷る自由な橇の競爭などを、
その處女らしき顏に立つ霜ばしらを。

氷に凍められてゐる不動の高き場所、
舞踏室のさんざめき、
若人が姦しく騷ぐ時、
泡立つ酒瓶の靑鳴り、
私はまた戰爭のやうな響と喧噪とを愛する。
『軍神街』の練兵の、
そこに步兵と騎兵と
旋律的に、魔術的に、
嚴そかに湧き起る步線の一つ一つに、
奪つた敵旗を裂き破つたり、
格鬪の中で碎かれた輝く軍帽の、
硬鎧の光、
私はまた大砲の煙と轟きとを愛する。
陸軍本部にやがて眺められるのだ、
その前方に見ゆる北の宮居に、

皇妃が皇子を生みしことにも、
勝利に過ぐる戰ひにも、
露西亞人が歡呼する其時や、
廣いネヴ河がやがて破れほころびて、
氷がすみやかに海へ卷き流れて、
春日のかほりによろこぶ時も。

毒ある木

不毛の沙漠の最中の、
烈しい日光の照りつけてる地上に、
痩せた番人のやうな毒の木が、
淋しく立つて沈默を守つてゐた。

私はかう考へた、
平野の自然が怒りの發作にその樹を削つて。

枝毎に病的の綠色を與へ、
根毎に毒を泌みこませたのだと、
樹皮を通して汁が流れてゐる、
白晝の光にはすみやかに、
夜の影には鈍く暗く、
樹脂毒液は濃くなつて行く。

そこまでは鳥すら路を知らない。
そんないやなところには虎も棲家を求めない、
たゞ毒惡な旋風が吹き漂ふて、
瘡の病毒を暴々して撒き散らすばかりだ。

丁度むら雲が樹冠を濕すと、
厚い葉がそれに纏いついて、
そこに傷ましい色の枝から、

眞下の砂地へ毒が落ちるのだ。

ある暴君が家來をつかわした、
この毒ある木から毒を借るために、
哀れな奴隷は從順にも其處へ駈け急いた、
そして其翌日毒汁を携へて戻つて來た。

彼はそれを携へて來ると直ぐ毒に當つて、
貧しい疊の上に哀れにも例れた、
そして呻つたり息絶たりした、
憐みのない無慈悲な主人公の足もとで。

然し乍ら彼は歎んだ——かの蠻王は——
彼は毒液の中に簇を漬けた、
有毒の力は四方八方に飛んだ、

地は呻く、死體の上に死體を築かれて。

黑い肩掛〔モルダウイタの唄〕

黑い肩掛を見詰めると、
私は感覺を奪ひ取られたやうになつて、
戰く心は恐ろしい絶望のために苦しめられるのだ。

物事を輕々しく信ずる靑春の夢に溺れてゐるときに、
私は情熱と眞心のあるギリシャ乙女をことの外愛したのだ。

そのギリシャ娘はおとなしい上に、
可愛らしくて、美しかつた、
だが、私の歡びは忽ちにして絶望の日へ入つて了つたのだ。

ある日私は愉快な友と祝宴を張つてゐたが、
その宴が終らぬうちに、

呪はれた一人のユダヤ人が私の部屋の扉を輕く叩きにやつて來た。

「貴郎は物狂ほしい歡樂の渦の中で、
笑ひさゞめておいでになりますがね」と彼が私語いた。
「あの貴郎のギリシヤ娘は、貴郎を裏切つてゐますぜ」

私は彼を呪つたが報酬として金貨をやつた、
そして、私の一番信用の置ける奴隷として、
私はこの男を仲間の一人に入れてやつたのだ。

私は自分の駿馬に跨るや否や、
仲間に別れをつげた、
私の心藏の奥には、哀悼の聲が低く迷つてゐた。

ギリシヤの乙女の住居は、

やつとのことで見つかつた、
それはなぜかと云ふと、
私の足が凋へた上に目がくらんで了つたからなのだ。

その時、彼女が顏を蔽ふとした黑い肩掛けを私は引つたくつて引き裂き乍ら血の滴る刃を拭いて、
あたふたと立ち去つたのだ

丁度夕靄が陰鬱に湧き上つて、
私の例の奴隷が二つの死骸をドナウベの急流へ投げ込んだのだつた。

それつきりあの魅力のある目は、
私を歡ばせるために二度と再び現はれることが出來なくなつた。

それつきり、

私は夜間に祝宴を張ることを止めて了つたのだ。

黑い肩掛を見詰めると、
私は感覺を奪ひ取られたやうになつて。
戰く心は絶望のために苦しめられるのだ。

惡魔

1

雲は押寄せ、雲は渦卷く、
そのうしろから青白い月光が、
驅る雪風の上にちら〳〵と落ちかゝる。
空は暗く夜は暗い。
橇は私を乘せて進む、
小さい鈴がりん〳〵と鳴る、
ふと私を驚かすものがある、
神秘な平野の圈境のまんなかで。

2

『御者よ、進め！』『且那、出來ません』
馬は進んぢやいけないことを知りました。
吹雪が目に入ります。迚も行けません。
路すつかり雪で蔽はれてゐる。
私を打ち斃さうとする。求めても駄目だ！
どうしたらいゝだらう？　路は見つからず、
これは惡魔の仕業だ。たしかに、
私達をぐる〳〵引き廻してゐるは。

3

そら、見ろ——彼が戲れてゐるのが見える。
私の方へまつ直に息吹かけたり唾したり。
今彼は堀の中へ押し込んで行くのだ、
ね、哀れに狂へる馬を。
そこにはない一里塚のやうに、

彼は傲直に私の目の前で突つ立つてゐる、
そこに彼は火花のやうに閃めいて、
暗の中へ消え去つて了つた。

4

雲は押し寄せ、雲は逆卷く。
そのうしろから青白い月光が、
驅る雪風の上にちら〳〵と落ちかゝる、
空は暗く夜は暗い。
私達は愈遠く輪につながれる。
鈴は鳴り止み、一と跳びに、
馬も止つた。『向ふにあるのは何だ?』
『且那、誰にも解りつこありませんよ? 狼か木の株でせう』

5

吹雪は哭す、吹雪は吠ゆる、
馬が嗅ぎつけた、恐ろしさに鼻を鳴らした。

遠い彼方に彼は戲れてゐる。
彼の目は暗の中に明々と燃えてゐる。
馬は突進し、汗泡いた。
そこに惡魔等が群がりながら、
霧のやうな白さで舞つてゐる。

6

幽靈のやうに無數の惡魔が狂ひ廻る、
幽かな月光閃爍のなかに——
あらゆる形の惡魔はみな醜つてゐる。
飛びちる「十二月」の木の葉のやうに!
彼等の群! 彼等は何處へ連れ去られたのか?
悲しい闇の底の嘆きはどうしたわけだ?
彼等は家鬼(JOMOBOÏ)を埋めてゐるのか?
それとも惡魔と鬼女との結婚なのか?

7

雲は押寄せ、雲は渦捲く、
そのうしろから青白い月光が、
驅る雪風の上にちら〳〵と落ちかゝる。
空は暗く夜は暗い。
惡魔は進み行く、
無限の粗野な空虛に充ち充ちて、
彼等が咆え猛り悲しく叫ぶとき、
私の心は殆んど二つに裂けさうだ。

「エヴゲネ・オニヱギン」

（作の梗概）　ヱヴゲネ・オニヱギンと云ふ一人の紳士があつた。オニヱギンはフランス風の學問と教育とを受けた稀に見る人物であつた。彼はロシヤ人であり乍ら、露西亞式の教養と趣味とをまるで持ち合せないバイロン主義者であつた、彼は交際社會やら假面舞踏會などで日夜を過ごしてゐた。その貴族的な社交界でも彼の學問に於ける造詣は目立つて冴えてゐた。しかし、彼はやがてそうした社會の空氣に倦んで了つた。かくて彼は丁度その時に差し迫つてゐた財產の整理をするために故山へ歸つて、しばらく田園の生活を送ることになつた。だが、何物にも魅了される事の出來ない彼の飽き易

い性質は、直ぐまたこの單調な田舍の生活に飽き果てゝ了つたのである。ところが丁度、その時、彼の隣家にレンスキーと云ふ青年詩人がゐた。その青年詩人は、このオニヱギンとは全然正反對の氣質を持つた熱情家であつた。レンスキーは獨逸で教育を受けて來たばかりの人物で、シルレルやカントの崇拜家であつた。優しい病的なローマン主義者であつた。感情家であつた。このレンスキーと或機會から知り合つたのである、するとお互に自分達の心の中に缺けてゐる物を充たし合ふ事が出來るので二人の交際はだん〳〵親しくなつて行つた。レンスキーに接近することによつてオニヱギンは自己の行き詰つたやうな心の轉換が出來たことをひどく喜んだ。レンスキーはかうした隣人に幸福を與へたと云ふ意識の中に樂しむことの出來る弱い詩人らしい善人であつたのだ。二人の交歡が高まつて行く或日に、レンスキーは近所のラーリンと云ふ家族へオニヱギンを紹介したのである。そのラーリン家には二人の年頃の娘があつた。姉をタチアナと云ひ、妹をオリガと云つた。姉のタチアナは純粹な農民の娘に見る樣な無垢な至純な、あまり學問のない、併し、馬鹿に空想的な、引つ込み思案の、むつつり屋だつた。そして、彼女の周圍の人々からはいつも「おかしな娘だ」と云ふ風に見られてゐた。彼女はかうした周圍の誤解から遁れ去つて、どこかに自由な生活をつくりたいと、そればかり寢ても醒めても考へてゐた。例の後年に文壇へ現はれたツルゲニエーフの作にある「サーシャ」と云ふ女性によく似た純朴な完全な、ロシヤ型の女である。で、彼女は、幼ない時分からフイリピエヴナと云

ふ乳母に育てられて、その乳母の口から、ロシヤの傳説やお伽噺などを聞き乍ら、成長したと云ひたいやうな、信仰家ではあるが、ロシヤの農民の娘にありがちな、超自然的の世界をも半ば信じ且つさうした奇異な世界に憧れてゐる、云ひ替ゆれば、彼女はロシヤの女性の、特に處女の大部分が同じやうに脊負つてゐる運命と云ふものゝ標本と云つてもいゝ古風な思想の娘であつた。その娘を殆んど一手で育て上げた乳母からして先づかうなのだ。

タチアナ「お前が若い時分の戀はどんな風だつたかえ？」

乳母フイリピエヴナ「まああなたさま、そんな大それたことをしましたら、妾は自分の繼母から地球の外へ拂ひ落されて了ひますよ！」

と云つた具合の恐ろしく保守的な老女であつた。彼女の歳は十七であつた。ところで、その妹のオリガと云ふ娘は、これは又タチアナとは大分違つた調子の快活一點張りの女性である。姉のタチアナが美貌の主であるに比べて彼女（オリガ）は所謂「あつさりした水平線に浮き出たあつさりした月」の様に圓くはあるが、しかし、姉ほどの綺緻ではなかつた。彼女は女學生であつた。彼女の性質は、一口に云へば、快樂主義とか實際的趣味本意とか、臨機應變主義とかさう云ふ明るい功利的なものを一丸にしたやうな言葉があるならば、即ちそう云ふ言葉で云ひ現はすに最も適當な、當時のロシヤ女學生氣質の代現者であつた。オニエギンはレンスキーの紹介でこの二人の乙女と知り合ひになり、次いで、自然に親しい交際を始めるやうになつた。すると、オニエギンのやうな學智のある珍らしい人物がこの淋しい田舍へ來たと云ふところから、先づ、彼に好奇的な心を動かしたのは、むつつり屋のタチアナであつた。タチアナは、やがて終にオニエギンを戀するやうになつたのであるが、それは丁度日本のたとへば德川時代に於ける小説の中の女主人公に見るやうな、いかにも乙女々々した、あるいぢらしさを持つて彼を戀ふてゐたが、到頭、或る日、自分の心を手紙に認めて「無分別にも」オニエギンへ送つたのであつた。彼女は、戀のためには身も世も棄てるやうな女ではあつたが、また一方に於ては世間的のありふれた名譽心から、そうするまでは幾度も幾度も躊躇したのであつた、ところが、その手紙を受取つたオニエギンはタチアナを失望させて了つたのである。輕卒とか浮薄とか向ふ見ずと云ふことの大嫌ひな彼は、この手紙を讀むと、今まで彼女に對する親しみを自分自身で失つて了つた。それでこのタチアナの戀文に現はれてゐる彼女が自分を戀ひ慕ふ動機や、その戀ひ慕ふことのいかに恥かしいかと云ふ樣なことに就ては丸で理解することが出來なかつたのである。つまりオニエギンは乙女心の微妙さを窺ふことが出來なかつたのである。その反對に、この純な心持ちの田舍娘は無趣味な、嫻佳なところのない無作法極る粗野な女として彼の目に映つた。そして情ない返事をしたゝめて、そして、その手紙の中には一種の嘲笑と皮肉とをさへ混ぜて送り返した。次に私は、タチアナからオニエギンへ送つた懸想文の一節を抄譯しやうと思ふ。

——妾がはじめて貴郎を見ましたときに、妾は、
自分の平和をしつかと守つてゐました、それは全くのことですの、
妾の恥かしさが、どんなことがあつても、あなたへ見えないやうに、
一生の境遇がたゞ希望の閃めきに、そゝのかされて、
あなたがお見えになつて、
妾たちの田舍の家で妾たちと逢ふために、
時々に、妾が、
あなたのお言葉の一ふし一聲を捕へるために、
そして、たゞ一人生き長らへて夢見る、
つぎに、また會ふまでを夜となく晝となく、
でも、何の希望もないやうに思はれますの、
妾たちが粗野な沈默屋だからあなたはもう飽き飽きなさつたのでせう、
皆がさう云ひますわ、あなたは人間と云ふものがお嫌ひな性分ですつて、
そして、妾達——見世物ではないのですが——、は世間知らずだとお思ひなさつたことでせう。

何故あなたは妾達を訪ねて下すつたのですか、
この世の中から忘れられた淋しい場所に？
妾はこんなに問へなくても濟んだものを、
もしあなたのお顏を見ないものなら。

何にも知らない妾の心は、
もう夙からこんな懶い生活を棄てゝゐたのでした、
そして末來の年月は妾に、
違つて愛を與へて來てゐるのでした——妾の運命、それは他でもない、
尊い母と云ふこと眞實の妻と云ふことなのです。
他人の！　いゝえ、この地上の誰も、
妾は自分の心を許るしたことはありません。
あの「最も高いお方」のお定めによつて、
天帝の御心によつて、妾はあなたのものです。

妾はあなたへあてがはれました、
妾が生れ落ちるときから既に、
妾の未來の運命に忠實に從つて、
そして神樣は、妾はちやんと知つてゐますの、あなたをこゝへ送つて、
妾の對手、妾の味方になさらうとしたのです、
妾の墓石が妾を蔽ふまでも——

夢の中にあなたは屢〻現はれました
だから妾は、あなたをこゝで、はつきりと、
見る日の前々から、妾はあなたを愛してゐたのでせう。
あなたの不思議な凝視の底に妾は萎んで了ひます。
そしてあなたの聲は妾の心に鳴り響くのです
長い間——それは決して夢ではありませんでした！
あなたはお見えになつた——直ぐ妾は悟りました
この妾の血の中に忽に起つた騷ぎを、

すると妾の想ひは私語くのです——「まあ、このお方だわ！」
これが眞個でないものでせうか？　確かにさうでないのでせうか
あなたが平和の「時」に妾に話しかけたと云ふことが、
妾が哀れな靈を訪ねに行つたとき
でなければ、搖り動かされた妾の魂の痛みを、
鎭めるために祈らうと努めてゐた時に

あなたのお姿が現はれなかつたと云ふのでせうか、
優しい幻影となつて——早く失せ過ぎて了つても——妾の陰欝な心を明るするには？　妾の目
に、
あなたが妾の寢臺の上にしづかに横つてゐるのを見なかつたのでせうか？
戀と希望の
低い言葉が私語かれなかつたでせうか？　今度、あなたどんな形に化けて、
いらつしやるでせう？　善良な守護の天使としてでせうか
それとも計略の多い心を持つた誘惑者としてゞせうか？

何卒聞かせて下さい、そして妾の疑惑をやすめて下さい！
どんなによくつてもそれは皆
空つぽの夢になつて、
泡沫よりも輕く、
これで苦しめられたことのない單純な心の？
えゝ、えゝそれでも結構ですわ！　でもこの先
妾は運命をあなたへ任せなければならないのですもの。
あなたの足もとに泣きくづれて涙をこぼし
妾を蔽つて下さる愛にたよらなければならないのですもの。
妾の姿を胸に描いて下さい――妾はたつた一人坐つてゐます
妾の苦痛を察してくれる者もなくて――そしてもう今は妾の理性も亡びて了ひました！
妾はあなたを待ち佗びてゐます。あなたを一目でも見て、
新らしい希望に妾の心を甦らせるか、
それともまた虐い夢が戻つて來るか
誘惑の餌に――あゝ！　――

タチアナは自分の切ない心を一たまりもなくはねつけられたが、彼を戀ふ心は依然として燃え立つてゐた。彼女は何故オニエギンがそう云ふ返事を寄越したかと考へた、そして先づオニエギンの人物性格をはつきり呑み込まねばならないと云ふことからして、オニエギンが崇拜するバイロンを讀んだが、彼女にはバイロン主義がどんなものだか更に會得することが出來ないのであつた。そして彼女が相變らず男を慕ふと、男の方では一層彼女から遠ざかるやうな有樣になつたばかりではない、彼はタチアナよりもオリガに氣を奪られて、折を見ては彼女に近づいて戯れたり口説いたりするやうな樣子なのである。ところが、このオリガには戀人があつた。その戀人は他でもない詩人のレンスキーであつた。レンスキーとオリガとは許嫁の間にまで話が進んでゐたのである。そのオリガと戯れることをオニエギンも實際いゝことだとは思はなかつたが、彼は自分の自我中心主義を滿足させるために相變らず彼には不似合な行動をつゞけてゐた。しかし、オリガの方から云へば、かうした生活に疲れ果て、妙な風に生眞面な男などゝは、あゝも性が合はないのであつた。すると、こんな樣子を見たオリガの戀人のレンスキーは一時に激怒を發した。不幸な青年詩人は鍛錬された性質を持ち合せなかつた。彼の感情は生地のまゝだつた。しかも、オニエギンの半分の固い自己制御の意志をすら持たなかつた。レンスキの嫉妬は恐ろしいものであつた。その結果オリガを中心とするはオニエギンとレンスキーとの決鬪となつて現はれたのである。こんな場合に男の取るべき手段はロシヤ當時の習慣として決鬪の

他に名譽を償ふための方法はなかつたのであつた。この決闘に哀れなレンスキーは斃れて了つた。私は、その決闘の場面を原作の逐行譯によつて髣髴したいと思ふ。

――彼は武器を提げて彼の敵を狙ひ始めた――

今や運命を定むる審判者の九歩は、數へられて――打ち顔へるレンスキーは、

左の目を閉ぢ、狙を定めた――その時に、オニヱギンの拇指は引金を壓した――

砂漏は轉倒された！　――レンスキーは嘆息した――

たゞそれだけだ！　――かくて短銃を取り落したのだ。（以上第三十節後部）

彼は自分を鉤のやうに曲つた指で撫で廻した――

彼は倒れて顔は蒼暗くなり、やがてじつとして了つた

その姿はたゞ死を告げてゐた、苦悶もなくて、

丁度東方の丘の上の上のすべては

朝の光にきらめき、

雪に包まれた景色は消えて見えずなつた。

オニヱギンは忽ち恐怖の寒さに襲はれた、

彼の射撃に手應への

あることがわかつたので。

彼は急いだ、詩人の屍のそばへ

そこに立ちすくみ乍ら彼の名を呼んだが――もう遅過ぎた！

彼はすでに死んでゐた――時ならぬ運命！

花は暴風雨に散つたのだ

破れた竪琴の音樂のやうに、

祭壇石の上には、火！（以上第三十一節全編）

彼は世の中で恐らくこれほど親み合つたものがないほど仲のよかつた詩人のレンスキーを射殺したことを恐れ且つ心の底から後悔したのであつた。そして良心の苛責は彼を苦しめ始めた。その苦痛を忘るゝためにも、猶且つ殺人の村にもゐられないので、そこを飛び出して了つたのである。だが、レンスキーの戀人オリガは最初こそは彼の死を悲しみ嘆きこそしたが、彼女はいつまでもさうした境遇に侵つてゐることの出來ない臨機的な女であつた。のみならず、彼女は彼女の母親や、彼女の土地を離れることの出來ない女でもあつた。そして、これまでのタチアナやオニヱギンやレンスキーの心を苦しめたものも要するに彼女の魂を搔き搖ることは更になかつたのである。かくてレンスキーの死後あ

る一人のウランと結婚して生涯の問題を手早く片付るやうな實際主義者であつた。即ち此處に作者

プーシュキンが表はさうしたローマン主義者の弱點を持つて死んで行つたレンスキーと戀し合つた彼女は、また全然別な世界へも進んで向いて行けるだけの資格のある女であつたことが知れるではないか。かくて、一人取り殘されて罪深き戀人を想ひ、自分の運命の儚なさを煩ふてひどく憔悴して了つたタチアナは彼女の叔母などに伴はれてモスクワへ行つた。彼女はこんな騷ぎが起つてから數年の後に、モスクワで有名な老人の、富豪の家へ嫁がせられたのである。その老人は彼女が尊敬してゐた人物であつた。それと同時に、彼女の社交界に於ける位置は一時に高まつた。間もなく、その貴族富豪社會での社交婦人の花形となつた。そうしてゐるうちに、旅行を終へたオニエギンが飄然として都へ立ち戻つて來た。故國へ歸つたオニエギンが第一番に發見したのは、嘗て彼が、その自然的な、至純な初ひ〳〵しい戀を拒けて顧みなかつた考へ深い田舍娘が、社交界の明星として輝き出てゐることであつたに相違ないのである。彼はやがて、その社界で再びタチアナと巡り合つた。そして、はじめてその當時はまだ處女であつたタチアナに對して野生な獸的な情慾を感じたのである。で、彼はある時、タチアナへ彼の胸中を打ちあけて口説いたのであつた。ところが、正直なタチアナは、彼女の心にもまだオニエギンを想ふ心の影が殘つてゐることを告白した。實際、タチアナはオニエギンを憎んでゐなかつた。いや、まだ〳〵彼を愛してゐたのであつた。だが、彼女がまだ處女である時に抱いてゐたオニエギンに對する戀の中には英雄崇拜的の情熱が多分に含まれてゐたが、今は既にさうした積極的な何物をも持つてゐなかつた。たゞ、失戀によつて殘された心の疵を慰むるところの淡い淡い哀愁に伴ふ最初の男の忘れられない俤がある、つまりそれに過ぎないのではあつたが、彼（オニエギン）の顏を再び見た彼女には、そこに聖潔な愛が湧然として湧いて來たのであつた。最初のうち、彼女は、オニエギンが告白する自覺（？）せる戀に同情して耳を傾けることを辭しやうとはしなかつた、その恐ろしい機會――その危險な瞬間は、ことによるとタチアナを誘惑し兼ねない力をさへ待つてゐたが、しかし、彼女の信仰の心には德義を叫ぶ良心の聲と、現在の夫に對する忠實の念とが入り交つて響き渡つた結局、――彼女は强い女であつた。決してトルストイの「アンナ・カレーニナ」に示されたやうな女性ではなかつた。彼女の良心は勝利者であつた。彼女はさま〳〵の盲目的な情慾を征服することが出來た。彼女は最後に、決心し、勇氣を振つてオニエギンの願ひをきつぱりと拒絕して了つたのである。云ひ替ふれば、オニエギンは見ごとに復讐をされたのであつた。かくて、オニエギンは心の懊惱の中に都を立ち去つて了つた。――と云ふのが、この物語の筋である。今私は、この物語に就て私の感想を一通り披歷しやうと思ふ。そうして、プーシュキンの他の作、（その中には、この「エヴゲネ・オニエギン」に劣らぬ力作もあるが）に就ては只通讀的の暗示を述べてプーシュキンの話の結末を告げたいのである。さて、プーシュキンの作品の大部分がバイロンの影響の痕跡をとゞめてゐることは何人も否定するわけに行かない事實であるが、この「エヴゲネ・オニエギン」もまたその

うちの一つに數へ擧ぐべきものであるまいか？「エヴゲネ・オニエギン」！　それは彼の作品の、ロシャの社會に歡迎せられた物の中で最も大部冊の物の一つであつた。彼は前後七年間でこれを書き終へたのである。それは作者の生活とは切り放して見ることの出來ない自傳的の告白錄として私は見てゐる。彼は自分の敎育や趣味や人生に對する批評を主人公エヴゲネ・オニエギンと云ふ人物の言動に體現させてゐる。かうした作物に於ける「意識の上の心理解剖」は從來のロシヤ文學には、見ることの出來ないものであつた。それは、ロシヤに於て詩と云ふものゝ小說の形體をかりたことが、これを以て最初とするのゝことゝ同じであらうと思はれる。物語の筋は斯樣に簡單である。出來ることならば、長詩「エヴゲネ・オニエギン」全部を反譯したかつたのであるが、しかし、私は、この一小冊に於て、プーシュキンの記述にばかり時間と紙とを費すことを恐れて、たゞ僅かにその一節を抄譯したが、この言葉の數とその內容に乏しい日本に住んでゐる私が、今持ち合せてゐるやうな極めて貧しい日本の文字で原作を正當に髣髴することの困難であることは勿論のことであるが、只そこで私は、或る原作に忠實に、出來得るならば、その輪廓だけでも、完成に寫したいと努めたのである。その筋、或は取り扱はれてゐる、題材の單純と云ふことは、これを彼の詩法の上にも用ゐて差し支へない言葉でなければならぬ。「單純」而して「眞實」！　この物語に於て見ても、その構想とか形式には、彼が崇拜してゐたバイロンの「チャイルド・ハルロド・ビルグリマヂユ」に極く極く似通つてゐる（これはロシャの批評家の誰もが、これまでも論じて來た點ではあるが）併しそれは單に「型」の上の問題に過ぎないのであつて、その「型」の中に盛られてある文字、血管を流るゝ一味のフモールや皮肉等は、その儘に「ロシヤ」が吐き出す呼吸に違ひない。この物語の中に彼は「ロシヤ」と云ふ一つの大きな實在と、その「ロシヤ」と云ふ實在が「眞實」及び、今云つたやうな「單純」とに對する無條件の子どもらしい愛好の心と、作者白身の藝術觀とを打ち込んだものではなかつたか？　私は私自身が藝術家としてのローマンチストではあるがローマンチストの靑年詩人レンスキーの生涯を觀ると、プーシュキンが「ローマン主義」に對する見解を聞く樣な心地がする。少なくとも、彼が、ローマン主義の弱點を握つて來て、そしてエヴゲネ・オニエギンの「理想主義的實現主義」の弱點と相鬪はせてゐる樣な氣がしてならないのである。これを二つの主義（それは、彼が死ぬまでそのために批評家達によつて惱されてゐた二つの主義であつた）の爭鬪を見ることが出來るならば、プーシュキンは、その爭鬪の中に、彼が持つてゐた最も優れた、最も同情ある思想と感情とを惜し氣もなく投げ込んでゐるのだと見ることが出來るであらうと思ふ。これほどまで、ロシヤの「現實」即ち「ロシヤ人」の現實を如實に描寫し盡した作者は、これまでに一人もなかつたのである。それは、一面の結果から云へば、當時この長篇の物語が、世表に公にされたときに、受けた人氣の裏書ともなる。當時の批評家、例へば、例の有名な文學上の功利主義の代表者とも云ふべきドブリユボフや、ビサリエーフのやうな

人達で、大體藝術と云ふものは、「藝術のための藝術」或は、「藝術至上主義」と云ふものは、そして
そう云ふ主義の下に製作された藝術品と云ふものは、藝術の目的とするところの「民主主義實現への
道程」とか「自由宣傳の目的」達する一つの、道程と考へて見ても至つてそれには遠いものだとして
排斥する（しかし、この二人とも、特にプーシュキンの作品を批評する場合に、そこに彼等が主張す
るところのプラグマチズム以外何等の新らしい美學的根據もなかつた）その彼等の間には、プーシュ
キンの作品は、特にこの「エヴゲネ・オニエギン」は、繪畫的の詩に過ぎないとして一氣にけなしつ
けたに拘はらず、私達が、ロシヤの文學上の作品に就て知る限りの範圍に於て最も一般讀書階級の歡
迎を受けて、殆んど、批評家等の說には誰も耳を傾くるものがなかつたと云つていゝ。私はこの一文
の終に、この批評家達が叫んだプーシュキンの非難に就て今少しく具體的に話をすることにして、そ
の前に、先刻の續きのプーシュキンの詩に就て、極く簡單に彼の詩型の話をしやうと思ふ。で、先刻
も一寸述べたやうに、プーシュキンの作品のいづれもが、その題材に於て極めて原始的の單純さを示
してるやうに、彼の詩に於ける形や言葉もやはり左樣であつた。ことに、從來のロシヤの文學者が守
つて來た詩形學或は韻律法から見れば、彼の作品に示されてゐる。暗比法（或は隱諭法とも云ふ）は
極めて少ないけれども、それはいづれも事實にぴたりと當て塡つてゐる。暗比法のみならず其他の作
詩法に就ても「ツイガン」（一八二四年作）に見るやうに、全體の韻律が、いかにも齒切れよく、氣
持ちよく、自然的に排列されてゐる、殊に私たちが、プーシュキンの詩を讀んで快感を覺ゆるのは、
その韻律が、（或は韻律とは云へないかも知れないが）何となくなだらかに無理がなく、即ちいさゝ
かの苦心をも經ないとしか思はれないほど自由で且つ正直——と云ふか素直と云ふか兎に角さうした
のびゝゝした氣分のすることを見る。私はそれをプーシュキンの詩に於てのみ發見することの出來る
感覺、云ひ替ふればそれが、プーシュキンの詩の特徵であると思ふ。彼は從來二つに區分されてゐた
「詩のための言葉」と「實生活のための言葉」との約束を無造作に破つて、この二つを氣儘に奔放に混
用してゐる。今、一例を擧ぐれば、例のローマン詩人レンスキーが、死の前夜の瞑想を叙する場合に
見る浪曼的の言葉とムードや、詩劇「ボリス・ゴドウノーフ」に現はるゝ人物の言葉の古風な錆びはこ
れまで墨守された詩風の型を破つたものと見なければなるまいと思ふ。この點を除いてもプーシュキ
ンの詩は、實にロシヤ詩の型としては申し分のない程典型的なとゝのひを設へたものであつた。それ
は今云つたやうに、從來の詩型學の立ち場から論ずることの出來ないやうなもの、例へば、すべての
實在的の物象が宛らに生き生きとして詩となつてゐる、そして詩の中にある會話なども皆當時の社會
に普ねく用ゐられてゐた一般人の會話語であつて、そのによれる自然描寫など特に優れてゐた、たと
へて云へば、それは、着色された立體的の寫眞に一つの生命を與へて働かせてゐるものゝやうに、躍
動してゐるのである。だが、その詩に於けるプーシュキンの技巧と云ふものは決して新らしい形式のも

のとは云ふことが出來ない。プーシュキンは詩の技巧、形式の技巧に就て格段の創意を持つて新らしい工夫を試みやうとは思はないのであつた。即ち彼は、ロシヤの心の奥底に潜める未知の世界を閉ざしてゐる扉を開かうとする考へは毛頭なかつたといふべきであらう。人と自然界に關する「自然性」の描寫、そこに彼は何の腐心をもしなかつたらしい。また人生即人間の運命に關する神秘な問題を封じてゐる王國に彼は入るほどの深刻な魂の持ち主でもなかつたのである。人間、自然、その中に彼は只彼自身の靈魂を和らげ、美の感覺を生み着けやうと努めたに過ぎないのであつた。だから彼は決して、新らしく珍らし作詩法の技巧によつて、彼の空想を展べるための苦心は試みなかつたと云ふことが出來る。彼のためには、一昔前に詩人にして科學者であつたロモノーソフが紹介し去つた例の長短格（抑揚格とも云ふ）が滿足を與へてゐた。彼はそれで澤山だと思つてゐた。たゞ、僅かに彼によつて工夫された新らしい形式と云へば云へないこともないのは、彼が、バイロンの次に崇拜して措かなかつたセイクスピア派の詩型で、その詩型を多少改良（？）したものを例の詩劇「ボリース・ゴドウノーフ」に應用した位のものであつた。「ボリース・ゴドウノーフ」は彼の藝術上の一つの才能が、從來彼が狙つてゐた當時の實社會にあるロシヤ人の生活と同樣に、引きつけられて作つたものであつた。この劇の藝術的の立ち場は、カラムジンのロシヤ歴史や「年代記」の上に築かれたもので、その劇の進行や科白や事件の變化と人物の種類の雜多なことや、同じ人間に善惡種々の性質のあることとは、作の巧拙の問題を論ぜずして、直ちに、シェクスピアの作物を思ひ起させずにゐないであらう。かう云ふ物にプーシュキンはその詩に於ける藝術の表現は一般に蔑まれてゐる「あり來りの形式」とか、一般に尊重され期待されてゐる「新技巧」とか云ふ形式上の問題には少しも拘泥してゐなかつた。彼が苦にしてゐたのは、さうした技葉の事柄ではなくて、彼の作物が「ロシヤの國民性に觸れてゐない」と云ふ批評のもとに彼れの作物をけなしつける批評家や、他の功利主義者の論難でなければならかつた。「國民性に觸れる」『國民性を表現する』それは一體どう云ふことなのか？　とその當時の人々は考へてさて理解することが出來なかつた。實にプーシュキンはこの問題のために少なからず惱まされたのである。と云のは、最初は、その國民性云々が、プーシュキン自身にすら、はつきり呑み込めなかつたらしい。先刻のドブロリユボフは「エヴゲネ・オニエギン」の中に、どれほどの國民性が盛られてゐるだらうか？　と云つた。（その時、ビサリエフは、もうそう云ふ眞面目な攻擊には飽き果てたやうに『プーシュキンは只の藝術家だ。只それだけのことだ。彼は藝術上の功果を彼が內部生活の空虛と智的缺陷の憂鬱の神秘の中へロシヤの全讀書階級を導く爲の中介物と心得てゐる』とさへ罵つた）尤も、彼の作物の中で、「カピタンスカヤ・ドーチカ」（大尉の娘）の中の「プガチョーフ」と云ふ人物に於てさうした恨みがまるきりないでもない、しかし、主人公或は女主人公の性格思想が、ロシヤの國民性に應つてゐるとか相反してゐるとかと云ふ樣な問題を放れて、さて、强いて彼の作物の弱所を

詮索するとなれば、プーシュキンの作品の殆んど全體が單純にして巧妙な詩の形を借りて表現された所の繪畫の連續に過ぎなくて、ドブロリユボフが云ふやうに、ロシヤ文學はプーシュキンを俟つて始めてロシヤの現實社會に食ひ込んでは行つたけれども、たゞそれは、社會生活の表面を掠めて過ぎただけのことで、「存在の現實性」より寧ろまだ〳〵文學に於ける傳統的な「魅了」とか「美化」と云ふことに重きを置いてゐるかも知れない、成る程、その劇的動作によつて働かさる性格の展開に何等內面的の表現がないかも知れない、ことに、主人公又は副主人公の性格の不分明な點――「コウカシアの囚人」に於けるが如く作者の感情ははつきり受取ることが出來るけれども主人公の性格が頗る朦朧としてゐる上に何となく。煮え切らないこともあるであらうしかし、それがために、プーシュキンを詩人として取り扱ふわけには行かないなどゝドブロリユボフの說く樣なわけには行くまいではないか？何故なればプーシエキンは彼が幼年から青年になるまでの生活と心の狀態が彼等とは大部かけ離れてゐた。從つてプーシュキンは多分に貴族的の趣味と性癖とがあつた。バンのみによつて生き得る人間を蔑んでゐた位の彼であつた。だから勢ひ、このドブロリウボフが云ふやうに「彼が描くところの社會の事實は、民衆とは餘ほどかけ離れてゐる。彼が取扱ふ作中の人物は、社會を組織する最も小さい範圍の人間に過ぎないのだ。我々はオニエギンのやうな貴族的な人間ではない。もし社會の大部分がかうした型の者ばかりだつたら、ロシヤと云ふ國は、まことに氣の毒な國だと云はねばならなくなる。」ほどプーシュキンはその事に就て無意識ではなかつた。（それは、彼が、ロシヤ國民性のシンボルとも云ふべき民謠や傳說を基礎として作つた幾多の詩――例へば、「ルーサルカ」（水の魔女）などに見ても解るやうに）、彼はかうした非難を甘んじて受けてゐた。それは藝術上に於ける兩者の立ち場や趣味や修養が全然異ふのだから、止むを得ないことだと云はねばなるまい。ことに、流刑後の彼の心の境遇を知るものは、彼に對して同情こそすれ、決して非難すべきものではなからうと見る。要するに、それは、批評家ベリンスキーもさう云つたやうに、プーシュキンの作品は、その時代の批評家が持ち合せてゐた美の範圍から一歩踏み出したもの、即ち當時の文壇意識から飛び出したものであつたから、彼の作品が正解されないのは當り前のことで、それには少なくとも百年の後に俟たなければならぬものであらう。ビサリエーフの評論がかくの如く峻烈を極めてゐたに拘はらず「エヴゲネ・オニエギン」その他の作品の大いなる努力はどうしても否定することが出來ない。そしてこの一篇の物語に現はれる四人の相異つた性格の人物はツルゲニエフの「無用な人間」やトルストイの小說等にも引き出されて來るほどの長い生命のある立派な國民性を持つてゐたことが解るやうになつた。

プーシュキン派の文學者として、プーシュキンの死後からゴーゴリに至るまでのロシヤ文壇を支配してゐた人々にカズローフ・デールヴイグ、バラチンスキー、ヤヅキコーフ、ヴエネヴイチノーフ、ポドリンスキー、ポレヂヤイエーフ、グリボエドフ、レルモントフやカルツオーフなどがある。だが

プーシュキンとよつて捲き起された文學上の革命後の文壇に於て、たとへプーシュキンほど偉大なる影を社會の表面に投じなかつたとしてもプーシュキンと並び稱するとの出來る巨人はゴーゴリ以外にレルモントフとカルツオフの二人であつたと云へるであらう。プーシュキンに關して一通りの記述を終へたと信ずる私は、次にレルモントフ及びカルツオフの評傳に移り、かくて最後のゴーゴリを以て此稿を一先づ完結する順序を立てゝゐるが、プーシュキンから年代の順を追ふて行くためにレルモントフへ到るまでの間に前揭の諸文學者に就ての大體を寫さなければならないのである。プーシュキンは死の前に當時の文壇を見廻した。そしてそこに幾人かの若い人達がプーシュキン自身の感化の下にそれ〳〵忠實な製作に從つてゐる事實を發見したものであつた。其時すでに文壇は、ローマン主義の潮流に浸されて了つてゐた。彼等の殆んど全部が浪曼主義的の詩人であつた。だが、露西亞の浪曼主義は。西歐のそれとは餘程內容の異なつたものであることを私は斷つて置きたい。「赤い月」とか「青色の花」とか「星の雨」とか、さうした言葉を持つて假令朧ろげ乍らも西歐の浪曼主義的作品の傾向を暗示することが出來ると假定するならば、「青色の花」や「赤い月」や、同種類の氣分の意味を含めた言葉で表現されたり、妖魔の王國へ彷徨つたり、幻想的の夢を見たり、宇宙即神論流の思想を追ふたりする文學上の傾向はロシヤ人の氣質に合はない。ことほど左程に又ロシヤ文學には至つて緣遠いものであつた。だから、西歐の浪曼主義文學をロシヤへ紹介した人々は、必ず失望したものであつた。ロシヤ人の性質としてはさう云ふ種類の作品に親しみを感ずる前に、彼等の頗る嚴肅な、現實の大地から一歩をも踏み出すことを敢てすることを欲しないところの突き詰めた心は先づそこに共鳴を見出すことが困難なのであつた。彼等はいつの世にもいかなる場合にも「星の世界へ」(ソーローグ―ブ)攀ぢらうなどゝは夢にも思はない人間ばかりである。露西亞人を慰むるものは、獨逸文學に現はれてゐる「大袈裝」ではない。「自然に親しむ謙遜な心」である。その意味からも道德學者はゐたが哲學者はゐなかつた。かう云う狀態だから西歐の浪曼主義的作品は、どうしても育つことが出來ないは當然のことだと云はねばなるまい。(それに就て、今思ひ出すのは、ずつと後年に來てからのことではあるが、一九八八年にアンドレーフが處女作とも云ふべき「沈默」其他をマキシム・ゴリキーの骨折りで發表した時の世間の惡評と故トルストイ夫人の罵倒的な非難である。トルストイ夫人は「ノヴキ・ウレミヤ」にかう云ふやうな意味の一文を寄せた。『可哀さうな作家、アンドレーフのやうな人は、人間性の退化と惡傾向の醜怪な事實を示すことだけに成功してゐる。彼は何の進步もなければいゝ加減の智識しか持ち合せない人々に對して人間性の退化腐敗した殘骸を露骨に投げ出して見せて喝采されやうとする位の人だ。それは人間の墮落性と弱點と不幸に關して書いてはゐるに相違ないが、同じ描くにしても、あのドストイエフスキーが描いたやうな、自然界の美とか藝術の力の偉大なことゝが人間の靈魂の高尙な憧憬とを持つてゐる驚異すべき廣大な神の世界については眼を蔽ふてこ

れを見せることを欲しない。しかし、眞實の藝術家は人間性の醜怪さへ罪惡の方面ばかりを明示するばかりでなく、善とか眞理とか、さう云ふものに對する高尙な理想を抱いてゐることによつて生ずる爭鬪とか人間の惡や弱點や罪惡に對する上の勝利であることを描き出さねばならない。不幸な民衆の精神の光明や美や善や愛や神を知るために高く翔け上るべき賜物の翼をこのアンドレーフのやうな人によつて切り取られるのだと云ふことを私は世界に向つて高言したい。』、このトルストイ夫人ばかりではない、浪曼主義の一派とも云はねばならぬ惡魔主義とか神秘主義を攻擊するアンドレーフの反對者は、ブレーニン・「ノヴオエ・ウレミヤ」新聞記者――のやうに、「この新進作家はマキシム・ゴーリキイの足跡を濁してゐる」とか「その作物は、ダヌンチオやローデンバッハやメーテルリンクなどの模倣であり、そこには何の希望もなく、不健全で贋造したものである」と云ふやうなことを云つた。アンドレーフの時代即ち現代に於てすらさうなのである）――で、この當時に於ては表象主義や廢頽主義や哲學的の詩の誕生は最も不利な立場にあつて、絕へず批評や反對の文學者の嘲笑の下に我慢せなければならない理であつた。で、私は今、西歐のロマン主義とロシヤ人との相對的反撥性を述べた。そしてそれはロシヤに於ては決して完全に育ち得ないものだと云ふことも附け加へた。では、ロシヤに起つた浪曼主義の運動とは一體どんな性質のものか？と云ふことになるが、その特徵は全くが頭腦の非浪曼的抑制に過ぎなかつた。頭腦の拘束、その矮小、何の深刻さもなければ奔放なところもない。作者の氣分によつて作らるゝと同時にニコライ第一世の時代に限られた範圍のものであつた。アルカチエーフの異端者の機械のやうなものである、即ち一面に於ては「將校用の浪曼主義」である。「書記官や番頭用に適する浪曼主義「であつた。碎けて云へば、そこに「絞殺官吏」がゐる。それは必要な役目だから存在してゐるのだが、その絞殺官吏を詩にして唄ふ必要もなければそんな詩歌は大體美しかるべきものではないと云ふやうな理屈から成り立つたものであつた。ただそこに異彩を放つてゐる云ふ傾向のものから飛び放れてゐたのは、レルモントフ一人であつた。當時のかやうな浪曼主義者は西歐のそれに眞似たものであることは言ふまでもないことだが、しかし、是等ロシヤ浪曼主義者はお手本の西歐の彼等に比べていかに悲慘なものであつたか！このロシヤ浪曼主義の「定則」と「形」はヴイヤゼムスキー公によつて作られたもので、決してプーシユキンのためにもポレジヤエフのためにも歎ばしいものではなかつたのである。私は先づ盲詩人イヴン・イワノウイツチ・カズロフ（一七九九――一八四〇）から始めやう。「キヱーフ物語」「僧」の作者カズローフもプーシユキンと同じやうにバイロンの模倣家であつた。私はジユコーフスキーを思ひ出すやうな苦惱の神聖化とか其他特殊な哲理が當時行はれてゐたことを知る。その哲學とは何であるか？世の中には幸福と云ふものは確かにある。しかしその幸福は恒なきもので、始終變つて行く。そして我々の心を慰めてくれるのはその過ぎ去つた幸福の記憶なのである。その幸福の記憶を呼び戻して我々を慰めてくれるものは即ち現在

の苦痛苦惱に外ならぬ。――つまりかかう云ふ意味の「苦惱の神聖化」を文藝上の一つの提案として現はれたのが彼であつた。さうした考へを起すほどの彼は非常に溫厚な人物であつたやうに云ひ傳へられてゐる。從つて彼が選んだ作中の主人公女主人公は皆彼のやうな受動的な思想の中にはぐくまれたものが多かつた。彼は盲目になつてから間もなく詩を作り始めたのであつた。不幸と災厄は彼を詩人にした。かくて、深い憂愁な空氣はいつも彼の詩の上を蔽ふてゐる。（ガヅローフ作「難破船」にもさう云ふところから來る一種の諷刺的な悲哀が漲つてゐる。次頁參照）哀鬱の氣分は彼のすべての詩に溢れてゐる、そして單調な、しかし、一讀して見遁すことの出まない淋しい一つの力がその文學の底を流れてゐる。「キエーフ物語」「僧」の外に、「ナタリヤ・ドルゴルカイア」なども當時廣く讀まれたものである。

カズローフ

難波船

1

紫に閃めく日は死にはてた
心傷める私は
潮の呟きに眠へ誘はれて
海邊を彼方へ彷ひ歩いた。

2

そこには帆や柱を失つて
破れた船が半ば砂に埋れてゐた
それはある過ぎ去つた日の嵐に煮立つ波に獨り寂しく打ちあげられたのだつた。

3

それから長い間濕露と夕立が
船板を苔で封じて了つたのだ。
その隙間にはいくつもの花が開いた
海藻の瘤をつけて青々と房々と。

4

岩にふちとられた海岸に打ち上げられたのだが彼女は何處から何處を指して行くのだつたらう？
彼女が亡はれた暴々しき時刻に
絶望的な彼女の運命を誰が共に分つだらう？

5

默せる海の底、默せる波浪

そこにこそ彼等が運命の秘密は封ぜられてゐる
夕陽の光はたゞ嘲笑つてゐる
黄金に閃めく廢船を。

6

漁夫の妻がその軸に腰かけてゐる
遙かの海を探し求むるやうな目つきして
彼女は待ち、見守つてゐる
微風に交る唄うたひながら

7

彼女の側には一人の男の兒が
麻のやうな髪の毛をくねらせて
高らかに笑ひ乍ら面白さうに波を蹴つてゐる
彼のちゞれ毛は風にひるがへる。

8

彼は優しい花を摘みとつたが
そこには疎らな海藻の總がなびいてゐる。
可愛いゝ幸福な男の兒、彼はどうして知つてゐるだらう?
彼の手にある花が、墓場から摘みとられたのだと云ふことを!

このカズローフより一年早く生れたアントン・アントノヴイッチ・デールウイグ（一七九八——一八三一）はプーシュキンと一緒に、ツアルスコエ・セロの學校へ通つたものであつた。だが、彼の詩的才能はプーシュキンほど早熟に現はれなかつた。彼はじり〳〵と進んで行つた。彼はまたプーシュキンほどの強い記憶力や智識の吸收能力を與へられてゐなかつた。彼は最初から詩人として出發したのではなかつたのだ。一八〇七年の戰役に加つてゐた時に、彼の作詩（それは物語であつた）が同僚に喝采された。それから彼の文學者として生活は始まると云つても差し支へはないのである。彼の詩は華々しき性質のものではなかつたが、彼の歡賞眼は當時の文學者及び批評家達の迚も及ばないほどに發達してゐた。他の批評家達の言葉にはまるで耳を傾けなかつたほどのプーシュキンすらも彼の云ふことは一々尊敬の心から注意してゐた。かうした正當な文學的作品の判斷者鑑賞者の手によつて發行されてゐた「文學雜誌」（一八三〇）の權威は動かすことの出來ない礎石上に立つてゐたのである。作詩に「友よ、我は今日汝と共に祝宴を開かむ」などが讀まれてゐた。デルヴイグが生れて翌々年にエヴゲネ・アブーラモヴイッチ・バラーチンスキー（一八〇〇——一八四四）がタムボフにあるヴイアジ

ユテの村の、バラチンスキー將軍の邸内で生れた。彼の母親はペテルスブルグのスモルニイの學校を卒業してマリア・フヱオドロヴナ皇后に仕えてゐた女であつた。プーシュキン時代の諸詩人の作品と同じやうに彼の作物、詩（特に抒情詩）は全體に愁哀な調子で蔽はれてゐた。だが、前者の企て及ばないやうな大きな起想を持つてゐた。それはプーシュキンの言葉によつて證明されるまでも彼の作品の全般に渉つて通讀して發見され得べき確かな事實でなければならない。彼はその詩と物語に見るやうな憂愁な靈魂の所有者であつた。彼は實生活から詩の世界へ遁れて來た人間界からの脱囚徒であつた。彼は現實と理想との不調合と矛盾に惱まされて絶へず現實に向つて愚痴を零してゐた詩人であつた。彼は現實の中に於て自分の心にある兒童性や單純の幸福を奪はれることを怖れた人であつた。だが、現實の中の眞現は葬式の炬火である。失望と厭世とは彼の一身をいつの間にか虜にして了つた。そしてお丁ひには「死」を希ふやうな心持にまで進んで行つた。その死と云ふのは、すべて謎のを解き鎖を斷ち切つてくれる者であると彼は考へた。彼の頭腦には、この地上に於ける凡ての人間が死滅してたゞそこに、淡白い朦朧とした霧が往徠する光景が絶へず散らついてゐたのであつた。それは彼の後に來るべき詩人やズキーコフのやうに彼の沈默を守つてゐる人であつた。そう云ふわけからであつたか、彼は容易に文壇へ打つて出やうとはしなかつたのである。而も一八四二年に、哲學的——と云ふか瞑想的と云ふか、その傾向を帶びた幾多の詩を發表し始めた時さへ、彼は「夕暗」と云ふ匿名に隱れてゐた。そして、影のやうな輪廓に包まれた蒼白い屍のやうな詩を次々に示してゐたのであつた。世を棄てた、憂鬱な厭世主義者としてのバラチンスキーの跡を追ふて行く後繼者とも見るべき人は殆んど一人もゐないのである。彼は當時の文壇にそうした後繼者を作るほど熱烈な力强い印象は與へなかつた。世の中と云ふものは詩の國を破壞するものだ、詩人の心を頑固にするものだ、そしてそんな處へ住んでゐる人間は皆功利主義者だと云ふやうな意味を具體的に示したものに「最後の詩人」がある。彼は實際探求の精神とか研究の態度とか理性の發達を恐ろしいものゝ一つに數へてゐる、人生に對して深い理想のない人間であつた。それは皆、詩を亡ぼすものだと說く强い一定の人生觀を持たない人間であつた。この妙な考へは彼の美しい作品にいくらも散見する。彼の作には、「最後の死」や「エダ」や「舞踏」「ツイガン」などがある。いづれも彼の長所と弱點とを並び備へたものばかりだ。

（1）

喜び樂めよ、世の中に何にもないのだから
善も惡も、二つ乍ら短かいものだ
計略の多い運命は、さま〳〵に奔弄する
ある時は喜ばせて見たり、
ある時は悲しませて見たりするのだ。

（バラチンスキー）

そして常に變りなき友と云ふものもないのだ。
聽けよ、明るい生活を送る人々、
いつかは――君等に翼が出來て飛び去るよ。

（2）

怨むなよ、世の中には何にもないのだから、
もし悲みが遇然に、
我々の生活に落ちて來たところで
それが何になるのだ？
この移り變りの世の中で
神樣が苦痛の中から刺を半分拔き取つて下さる時、
一樣に皆へ
翼を下さるのだ。

ニコライ・ミハイロウイッチ・ヤズイコフ（一八〇三）の少年時代に關する記錄は私の研究した範圍ではまるで知ることが出來ない。ヤヅイコフに關するいろ〳〵の書籍を參考して見るが、判然したことは解らない。一本には、十一歳の時にペテルブルブの工業學校に入つたと云ふこともある。一本には、彼がまるきりの無教育者として記されてゐる。だから私は成るべく彼のさうした出生記に就ては後日の調べにゆづることにして此處には單に彼の作風について一言して置くことに止める。批評家ベリンスキーは云ふ「ヤズイーコフ、が有名になつたのは少かの月日であつた。彼の作品を讀む人の誰もが感ずるやうに、彼の詩は微頭徹尾獨特の個性による形式と內容とを持つてゐる。その音律は精好に、その型も力强く透明である。彼の名聲はロシヤ文學史から決して拭き去ることは出來ないであらう。たとへ民衆が詩を讀むことを休める時があつても――彼の名はロシヤ語とロシヤ文學を學ぶ者にいつまでも知られるであらう。その短日月の間の勞作はロシヤ文學に貢献したものは大きかつた。彼はあらゆる意味に於て大膽と云ふことが取りも直さずロシヤ文學に於ける彼の功績でなければならぬ。それまで、ロシヤの文人は著しく臆病であつた。そして、小說であらうがその他の表現によるものであらうが、一度現はれると、それは必ず彼等を驚かせ脅かしたものである。しかし、ヤズイコーフの個性を帶びた放膽な詩句が民衆の意向に投じた結果は、メルリンの出現と同じものがあつた。彼の作品は文人をして大膽ならしめた。それは誰でも構はないがたゞ大膽でさへあればいゝと云ふのとは違つて、彼自身の獨特な態度に順應してであつた。だから彼は何人にもその人の作る詩の中に於て自分と云ふものを見出すべき動機を與へたのである。ロシヤ文學に於ける浪曼主義の全時代を通じての仕事と云ふのはこれであつた。その事業は今見事に解決されたのである」云々。前にも一寸述べ

て置いたロシヤ浪曼主義を所謂擬浪曼主義的傾向から純然たる浪曼主義へ導いたのは彼であつた。長い間、目立つやうな浪曼主義的の作品の出なかつた時期であつた當時に、プーシユキンによつて勵まされたヤズイコーフの活動は勿論目醒ましいものであつたに違ひない。（プーシユキンは一八二六年に彼が流刑地のミハイロウスコエにヤズイコーフと逢つたのである）、彼は要するに大膽な苦學者であつた。その苦學時代には、「ジユコーフスキーの焔」の妹であると云はれたウオイエコフ教授の妻に從つて沈默を守つてゐた。彼は女性の美を描いた詩人としては當時のロシヤ文壇に於ける第一人者であつた。また彼が初期の作品に舊約全書を模倣をしたことは、後期の作品にはことに抒情詩には、純な宗教的の傾向となつて現はれて來た。一八四四年には「地震」が發表された。所謂ロシヤ愛國者としても愛國心の鼓吹者としても有名な詩人アクサーコフはその時につゞいて發表された詩「我々のものではない」を見て「ヤズイコーフはキリストの名に隱れたスラヴ流の巡査だ」と評したほどに、信仰的な內容に走つて行つた。その他にも、「燈臺」や「ガスツノ」や「海水浴をする人」や「船」や「海」などがある。それ等は長い異國での彷徨時代の記錄を繪のやうに美しく生々した自然描寫で試みたものである。以上の人々がプーシユキンの感化を多分に享けて成長した中に、プーシユキンとは殆んど沒交渉で而も當時の浪曼主義よりも寧ろ古代文學に近寄らうとする優佳な純潔な作風を示した人にドミトリ・ウラヂミル・ウヱネウイチノフ（一八〇五――一八二七）があつた。どちらかと云へば彼は詩人と云ふよりも哲學者肌の批評家であつた。そして彼がもつと長く生存してゐたならば屹度詩人として後世の人々に取扱はれずに濟んだかも知れないのである。彼は二十二歳で夭折して了つた。この人とは正反對な立ち場にあつたバイロン崇拜者でプーシユキンには教子に當る「金持ち」「貧乏者」等の作者ポドリンスキーがあることを私は忘れることが出來ない。同時にモスクワに學生生活を送つてゐる時分から誇躍的な詩文を以て知られてゐたフモールな物語「サーシユカ」の作者である酩酊詩人のポレジヤーエフを忘れることが出來ない。彼は天性フモールな性質の男であつた。十二月黨員の嫌疑を受けてニコライ第二世と大臣の前に呼び出されて、彼が自作の「カーシユカ」を朗讀したことによつて皇帝の接吻を受けた男としていつまで私達の記憶にある。彼は後に兵士となつて、抒情詩傳說俗謠などを豐富な詩才と潤澤な材料とをもつて作つたが、不幸にして、皇帝の命によつて其後モスクワに遣られた彼は、肺の疾患に惱まされ、酒精の中毒にかゝつて中途で斃れて了つた。それは一八三三年としてある。ポレジヤーエフの次にグリボエドフがゐる。讀者は、暫くこの新詩人の前に止まるべきであらう。喜劇、諷刺、抒情詩、浪曼主義的のオペラ、舞踊などの供給者であつたシヤクノヴスキイ太公や、歷史小說家のザゴーシユキンや飜譯家のクメルニツキーやコルネイユ、ラシンの飜案家カテーニンなどの友人であつたこのグリボエドフ（アレキサンドル・セルギエウイツチ）が活動してゐた時代はロシヤに於ける演劇の旺盛な時代であつた。それは前に私が演劇の全盛に就て一寸述べ置

いた通りの狀態にあつた。十二月黨と可なり密接な關係のあつたらしいこのグリボイエドフは當時、モスクワの最高社交界に屬する階級の人であつた。彼は十七歳でモスクワの大學を出てサルツイコフの驃騎兵隊に入つたが一八一六年には既に退營して外務省に勤めてゐた。その官吏であつた彼が文學的の生活に入つたのは、「ヨーロッパ新報」に軍隊祭典に關する一文を寄せてからであつたか、間もなく、ある機會を得て、モスクワの俳優達と近づきになつたことが、やがて彼に今日まで有名な喜劇を作らせた第一の動機となつたのであつた。その喜劇の製作には或時は當時（一七八九年から一八七三年まで）の海軍本部に主事を勤めてゐたア、ア、ザンドルと共力してやつたこともある。かくて一八一六年にはペテルスブルグの一劇場にはじめて彼の作、喜劇「若夫婦」とその翌年に「佯りの不信心」などが上場された。元來彼は、リリエーフやバッーシュコフよりも以上に擬古文學――傳統的趣味の支配に育てられたのであつたから、彼の初期に於ける喜劇の制作に於て、彼がそうした傳統的趣味の支配を受けたと云ふことは寧ろ當然のことであらうと思ふ。彼は一八一八年にペルシャの大使となつた。そして暫くモスクワに滯在することになつた。モスクワに滯在中極めて巨細に渉つて觀察する機會に打つつかつたこのモスクワ社交界の最高階級を題材とする有名な喜劇「ゴーレ・アト・ウマア」（智慧の災）を作ることが出來た。（この一本の喜劇は、クルイロフの寓話に示されたやうな抑揚格の長短さまざまの擬古的詩句から成り立つてゐるところの一場、一事件、それを一日に一事件と云ふ形式で書いたものであつて、今日までこの喜劇を舞臺の上から壓倒するほどのものは出來てゐないと云つても差し支へない）、それは、全くグリボイエーフの傑作であつた。取り扱はれてゐる事柄（プロット）は、非常に單純で、或點はプーシュキンの「エヴゲネ・オニエギン」に似通つたところがある。が、それとは他少異なる意味に於て――即ちこの作に於ける社會に對しての美學的趣味と歴史的意義とによつて社會に持て囃され今日まで幾分でも猶生命を存續してゐる點は、一つは、その題材を通貫する一つのグリボイエドフの思想に生命があるからであつた。それは大體を云ふと、「舊時代」と「新時代」との爭鬪なのである。この喜劇の人物の中には、その主要なる役を勤めてゐるファムソフ（それは彼の肉親の伯父をモデルとしたものであつた）と云ふフランス風の精神的教育を受けたモスクワの古い貴族が、（またその貴族と云ふのは自分達の結合をつけてこれまでの貴族に附隨する名聲を保たせようとする外に何の野心もない人物である）その他にもその當時の交際社會の實際的人物を悉くモデルとして、癈頽せんとしつゝある舊時代を表象したものである。私は、今、この喜劇の梗概を少しく記さうと思ふ。

「ゴーレ・アト・ウマア」

〔人物〕　ファームソフ

勤勉な老高等官吏――ソフィアの父――彼はいかにして娘のソフィアに善良なる教育を與へるこ

とが出來るか、又、いかにして富める且つ家柄の婿を得やうか、そして家名を擧げやうか？とさう云ふ風なことを年中考へてゐる男

〔人物〕　チャツキー

新時代の空氣を呼吸し新思想を抱いた青年であつて、その把持するところの主義主張は勿論老人ファームソーフに危險がられ嫌はれてゐる。彼はソフィアの戀人であつた。彼の主張すると云ふよりも要求するところの新時代の青年と云ふものは須らく、淺薄なる百科辭典的教育以上のものを持たなければならない。官吏と云ふものは、規則を嚴守して禮式を墨守し且つそれに拘泥する以上のことをなすべからざるものであつて、法律は親族關係其他友誼的交渉以上のものでなければならぬこと。（當時の法律は往々それを缺いてゐた）、社會の興味と云ふのは、カルタを弄び、夜會飲酒舞踏雜談に耽る以上のものを持たなければならぬこと（これも當時の貴族社會頂門を衝いてゐる）、かくて、彼の右のやうな確信は非常に嚴肅であり從つて彼の主張する說は直ちに社會の人々によつて實行されなければ駄目だと考へてゐる青年なのである。ところで、以上述べたこの青年の思想は即ち作者グリボイエドフの思想であつた。

〔人物〕　モルチャリン

老官吏ファムソーフの性質をより以上に備へてゐる男、

〔人物〕　スカロズーブ

大佐――有利な立ち場にある婿金――無學者――しかし仕事には忠實な男、

〔人物〕　ミハイロウイッチ

馬鹿の評議にたやすく興味を感ずる男――氣骨のない御亭主――妻の尻に敷かれ易い夫。

〔人物〕　ザゴレッキー

大嘘つき――手癖のよくない奴――巧言令色漢――新時代の青年チャツキーか妙な狂人じみた思想にとりつかれてゐると云ふことに面白味を感じて、町中にそれを吹聽して歩く男――あまり評判がよくない人物

〔人物〕　ナターリア

ミハイロヴイッチ（プラートン）の妻。ローマンチックな感情家で、頭の修養も何もない女――夫の氣骨のないミハイロウイッチを嘘と僞善で取り扱ふ女――夜會の舞踊の外に何の生在意義を見出し得ぬ女。

〔人物〕　フレストワ

ソフイアの老叔母――雜談家――愛犬家（一分間でもその犬と離れてゐることの出來ない性質の婆さん。）

〔人物〕レペーチロフの仲間

民衆の自由を防害するために民衆へ泥を投げつけてよろこぶ連中――英利西クラブの空氣を代表する人々――所謂貴旅的無能と貴族的放埒との表象とも云ふべき性質を倶體した人々――老官吏ファムソーフすら彼等を輕蔑してゐる。

〔筋〕三年間外國へ出掛けてゐた新時代の青年チアーツキーが故郷なつかしさにモスクワへ戻つて來るそしてソフイア・ファームソーフに逢ひに來る。だが、ソフイアの方では、夙くの昔、彼女にはあまり應はしくない、あまり人物に値打ちのない彼女の父の秘書を勤めてゐるモルチャリンに戀をしてゐる。ソフイアはこのモルチャリンが今に彼女の思ひを遂げさせてくれるだらうと思つてゐるのであるが、モルチャリンの方では、只自分の利益ばかり考へてファームソーフ家の門番の犬にばかり愛想よくする。チャツキーはモルチャリンと彼女との仲を見ぬいて嫉妬を起して彼女から秘密を破らする。チャツキーはかくて失戀の果に破れし心を抱き、そのファームーフワと云ふ伯父の家を立ち去る。ところが、ソフイヤも又やがて、モルチャリンに棄てられて悲嘆する。モルチャリンは、彼女に非常に冷淡で、今まで萬事、何に限らず打算的であつたと云ふことが、露見する、――たゞこれだけの單純な變化のない喜劇なので、從來ロシヤに演ぜられてゐたフラスン風の道化芝居と異なる點は、その大詰が、不幸に終つてそれきりだと云ふところにあるばかりである。しかし、この短かい事件の喜劇に於て、グリボエドフの社會思想は明確に會得することが出來ると思ふ。その喜劇の劇的或は文學的價値と意義とに就ては。革命黨員（即ち例の十二月黨員）の一人であつたベスツージエフが、かの「極星」の中にかうのべてゐる『――その大膽に且つ鋭く深く描かれたる人物の性格と、モスクワの風俗の生けるが如き描寫と、悲慘なる章、句に含まれたる感情と、そして會話の中に現はれてゐる作者の智的若しくは、頓才的技能と、この詩句の上に見ることの出來るこれまでに一向氣にとめられずにゐた我々が使用する言葉使ひの輕妙さ及び自然的なこと――それは我々を驅つて注意の封鎖の中に追ひ込むものである。感受性の强く鋭い人々はこの一篇を讀んで笑ひ出すと同時に又涙のにじみ出ることを禁じ得ないであらう。フランス風の事物に自己を樂しませる習慣に囚はれてる人々や、ありふれた型類的の組み立てによる物語の背景に不滿を抱く人々は、或はこの一喜劇は、作者が從來の一定の劇的約束に從つて作つてゐないといふことで、感心出來ないと云ふかも知れないが、しかし、そう云ふ批評を試みる人々には勝手に云はせて置くがいゝ。そう云ふ人達にはこの喜劇が將來のロシヤに於ける國民性にもとづく創作の第一位に置かれねばならないものであると云ふことなど更に解らないのだからである」と。

やがて作者グリボイエドフはエルモローフ將軍やバスキエウイッチなどの下にグルージヤ（ゲ

オルギ州)に一官吏として勤ねばならなくなつたが一八二七年にはトルコとの平和が復活して、彼は全權大使として、あまり行きたくなかつた任地へ赴ひたのであつた。そこに滯在中、彼はグルージヤやアルメニア諸國のロシヤ東方諸國の風物に精通した人々と交際を始めたが、それ等の半黄色半白色半黑色人種は彼に諂諛して、囚はれてゐた自分達の親族が解放されることゝか、その他自己本位の利益の獲得にばかり走つてゐたのであつたが間もなく彼等の間に小さい陰謀が巡らされた。その陰謀は露見した。結果はロシヤ大使と土着の人々との衝突となつて現はれた。事態は漸次嶮惡に傾いて行つた。そして終には全くグリボイエドフが豫期しない騷動となつて了つたのである。その時は既に一つの立派な謀叛の形を取つた彼等は到頭大使館を狙擊した。その數人の役員を殺害し、亂暴にも大使を刺し殺して了つたのである。(一八二九年一月三十日)。かくて、グリボイエドフの死體はチフリス河の西に當る聖ダウイド寺領へ運ばれた。彼はそこに自分の墓地を見出した。彼の妻は夫の墓へ、その後、一基の紀念碑を建てた。

プウシユキンが死ぬと間もなく社會的に詩人として有名になつたのはミハイル・ユリエウイツチ・レルモントフであつた。レルモントフが浪曼主義の文學運動を起したのもプウシユキンの死後のことであつた。プウシユキンも浪曼主義者としてそしてその文學運動を盛んに行つたのは、寧ろ後者の力だと云ふことが出來る。私はこれからこの詩人レルモントフと彼の事業に就いて知るだけの話をしようと思ふのである。彼の思想とか作風とか技巧などを述ぶる前に、私は彼が不幸な生ひ立ちに就いて、一言しなければ、プーシユキンほどこちらに廣く度々紹介されてゐない人のことであるから、讀んで行く上に興味が索然とする恐れがありはしないかと思ふ。そして最後に、私は彼の詩の若干を紹介しやうと考へてゐるのである。

● ミハイル・ユリエウイツチ・レルモントフ

レルモントフが少年時代の記錄とも云ふべきものは殆んど一つもないと云つていゝ位だつたから彼がその頃の生活は詳らかに知ることが出來ないけれども、私が今日までに漸く織ることの出來た彼に關するドキユメントによれば、レルモントフの最も近い祖先は露西亞人でなくて、純粹のスコツトランド人であつた。彼の父の代までもまだ露西亞人になれきれない半スカチであつた。その半スカチであつた父の名はレルモントと云ふイギリス姓の露西亞化したもの即ちレルモントフと云ふだけで、他に何も知られてゐないのである。一六一三年頃露西亞兵の侵略を受けたポーランドの或る少さい町にジョージ・レルモントの名でその町の兵營に入つたスコツト人が此のレルモントフの祖先であつた。それが詩人レルモントフから幾代前の祖先であつたか知らないが、兎に角ポオランド人になろうとした彼の先祖が如何に貧しかつたかと云ふことは、この詩人の代になつてから窺ふことが出來るのである。それは、詩人を生んだ母が自分の夫を棄てゝ逃げたことを見ても解る——と云ふのは元來この母

親が此小さい町の中でも裕福な貴族の大地主（と云ふよりも寧ろ領主であつた）の娘であり乍ら甚だみすぼらしいレルモントフと云ふ士官と結婚した譯が、一文なしの男と戀に落ちたからで、ただそれだけの簡單な動機であつたから、この戀の成就が世間に知れて〻領民の輕蔑と反感とをかつた結果、どうでも他所へ駈け落ちしなければやり切れなくなり、出世の見込みのない士官と十四になる少女とが、この町を逃げた後に至つて、漸く生活の道に窮して來たことを發見した時には彼女はこゝに改めて眞面目に痛切に後悔を始めたのである。後悔は到頭二人を別れ別れにして了つたのであつたが、彼女の方は流石に家へ戻ることも出來ず、その頃モスクワにゐた彼女の母親のアルセニエワの許へ行つた。然し士官は其後幸にして他に十四才の少女を深したか？私は知らないけれども、彼が後年詩人である我子と密會してゐたことから考へて、恐らく彼は死ぬまで獨身であつたことだと思ふ。モスクワへ出て來た少女は間もなく子を生んだ。それが詩人レルモントフであつた。赤ん坊が三つの時少女は子どもをのこして病沒した。詩人が生れたのは一八一四年の十月三日で、母親の享年は十七だとあるから、つまり一八一七年にあたるが、何月だか解らない、今云つたやうに、詩人レルモントフはこんな不幸な月日の下に生れて、生れ立ちから體がひどく弱かつたので、最初子どものために誕生に不賛成であつたアルセニエフ老女の心持が變つて、何となく病弱者の運命を憐むやうになつた。從つて、母親の死後、詩人にとつては、これが却つて彼のために幸福であつたかも知れないほどの愛護と養育とを享けて育つて行つたのである。

老女アルセニエフは自分の生活のすべてのものを犧牲にして、レルモントフ少年を教養しやうと企てた。彼女（詩人の母親）の生存中にも死後も、時々この詩人の家を訪れてその度毎に口論をしたり、喧嘩をしたり、追はれるやうにしてまたすぐ〳〵何處かへ立ち去つて行く貧乏士官（その時分には既に退職を命ぜられて、何をして生活を立てゝゐたか知ることが出來ない）が、小兒を引き取るとか、自分の男手で教育するとか云つたやうな相談などにも老母アルセニエフは一切耳を貸すことをしないばかりか、教育の上の責任は悉く自分が引き受ける以上、成るべく小供の顏を見に來ないやうに、たとへ逢ひに來ることが差しつかへないにしても、さう度々では困ると云ふやうな制限までして、日頃から蔑んでゐた前士官を出來るだけ遠ざけた。實際老女の心の中へ立ち入つて見ると、親と子が愛情に惹かされて密會する度毎に百年たつても離れたくなささうに思はれる光景が傍觀にたへなかつたのであつた。老女は男親を、子でもに教育を與へる力のないものと頭から決め込んでゐた。それは子供が物心づく頃まで續いていたために、親が酷められたり凹まされたりする樣子が朧ろ氣にも子供心に惱ましく印されずにゐなかつた。そんなことからして、流石にあさましい惡口なども少年は養ひ親へ遠慮なく吐き散らしては、いつも爭ふてゐたと云ふことであるが、老女は一向平氣であつた。平氣であるばかりでなく、あべこべに益々少年を愛して行つた。その證據の一つとして、老女は少年の

保守的なそして油斷をすればいつも譯の解らぬ、とりとめもない物思ひに沈んでゐる少年の、陰欝な癖と病的な體を矯める目的で、間もなく自分の家屋敷が立ち腐れにならうとしてゐたペンザ政廳の田園生活へ移つたのである。その證據の二つとして、少年がやつと十才に達したとき、同じやうな目的で、老女は彼を景色の優れたコウカシャ地方へ連れて行つたりなどしたのである。

また一方では、これまで面白くもない家庭で起つたごた〳〵が少年の生々しい性格を破壞したり低めたりするやうなことがあつては困ると思つて、少年に頻りに讀書をすゝめたりなどしたが、書籍に對して異狀の好奇心と執着とを覺えた少年は、自ら進んで、毎日本ばかり貪り讀んでゐた。その本と云ふのは、大低民謠とか詩などに限られてゐたかのやうに思れる。老女アルセニエフは一方では、少年が近所の小供達と遊んで碌でもない知慧をつけられたり、宗教的に賤しい事柄を覺え込んだりすることを恐れて成るべく家の外へ一人で出さなかつた。この孤獨の習慣は彼が學校生活を送るためにモスクワへ出る時からモスクワを去る時まで續いて、彼は中年一人ぼつちであつた。モスクワの學校でレルモントフと云へば、彼の周圍の人達に、直ぐこの一人ぼつちの青年の姿を連想させるほど彼の無口と孤獨は有名であつたと云ふ話である。

少年がモスクワへ修業に上つたのは十三の時で、學校と云ふのも老女が選んで呉れた或る寄宿制度の學校で、それは主として大學へ入るべき豫備門であつたが、卒業前にふとした意地の惡い教師の排斥

Лермонтовъ, М. Ю. (1814-1841)〔レルモントフ〕

運動が學生間に起つて、その學生の中に彼も加つてゐた科で、退學を命ぜられたのである。詩ばかり作つて他の學問は一切之を擲つてゐたモスクワに於ける學生生活は、こうした遇然の出來事から尻切りになつて了つたわけであつた。かくてデリケートな心の、神經質な青年はペテルスブルグの大學に入れて貰ふためにモスクワを退いたが、退學事件について彼の品行が可なり曲解されたまゝペテルスブルグの大學へ報ぜられてゐたために、モスクワに於ける過去二年間の修業は全然認められなくなつた結果、レルモストフは一人で馬鹿に自棄的になり、運命論者的になり、その反動として、恐ろしく皮肉になつて、お了ひには學問に愛憎をつかした。此處まで來ると、彼が選ぶべき學校と云ふのは陸軍士官學校より外にはなかつたのである。其後彼が籍を置いた護衛兵學校は、話によると、近衛兵を養成する目的であつたために、主として學生を貴族社會や富豪階級から募つてゐたと云ふことであつた。レルモントフの傳記を著す人は必ず彼が此等にある友人に宛てた短い手紙の一節を抄つて、詩人の意志のある處を示すであらう。その手紙の内容と云ふのは、要するに、軍人生活が彼の最初の志でも目的でもなく、止むを得ない結果でさうはなつたが、併しもと〳〵軍人が嫌だと云ふわけではない。無駄の生涯をます〳〵無駄に三十年も五十年もだら〳〵と生き長らへて費すよりは、かうした軍人にもなつて戰爭か何かの際に一發の銃丸であつさりと消滅して了つた方が、どれほど氣樂だか知れないと云ふ意味のことである。その手紙は多分一八三二年に書かれたやうに記憶する。陸軍の學生になつ

た彼は、殺人と侵略と鬪爭の稽古も勿論大いにやらせられたことゝ信ずるが、どうかすると、また朝から夜の曉まで、こつそり姿を隱して、空虛な教室へ閉ぢ籠つたまゝ詩を作ることが稀でなかつた。例へば、彼が初期の作「天使」や、彼が一代の傑作「惡魔」などは、かうした軍人生活の或る夜ひそかに作つたものであつた。そればかりでなく半軍人半學生の彼等の仲間に多かつた酒色や惡戯に溺るるのを無上の光榮と歡樂に心桿てゐた人々の間に立ち混つて、後年彼が淫佚的な惡魔的な、また頽頽的な詩を生むための、彼には智育的に何の貢献をもしなかつた。華奢な修業を無意識に積んでゐたわけである。レルモントフの道德ある生活は軍徒生活の數年で苦もなく破れさうに見えた。彼が年少から抱いてゐた文壇的（又は文學的）野心は脆くも潰えやうとしたのであつた。それほど危險な時代であつたのである。一時彼の偉大なるべき趣味は墮落した。彼はアルセニエフ夫人の家が豐かであつたから、彼に秘密の奢侈費を惜氣もなく貢いで更に苦痛を感じないことを知つてゐたので、其日の流行を追ふて廻る花々しく馬鹿〳〵しい貴族的な社交界へまで足を踏み入れるやうになつたのである。だが、藝術の女神はこんな時にも決して彼を見すてやうとしなかつた。彼は詩作を怠らなかつたのである。そのうちに彼は十九才となつて學校の課程をどうやら了へることが出來た。そして、直ちに驃騎兵隊の士官に任ぜられた。彼が社會的に詩人として認められるやうになつたのは、つまりこの年からである。私はこゝまで述べて來たレルモントフの極めて大ざつぱな傳記の中で、彼がどうして一時に詩人として名をなしたかと云ふことを出來得るだけ詳細に述べなければならないと思ふ。

軍人生活と云ふものが、少くとも彼に取つて眞個の軍人生活でなくて、秘密の詩作生活であり、消極的の藝術家的時間であつたと云ふことは前にも一寸書いたが、實際彼の短い生涯を通じて考へて見ると、油がのりかけて來たのは正にこの一八二八年頃から一八三二年頃であつて、例の傑作「惡魔」や「イズマイル・ベイ」以外に露西亞傳說とか物語とか脚本なども多く作るし、その外に、彼が日頃から崇拜措かなかつたバイロンやハイネやゲーテの詩なども手當り次第に飜譯したものであつた。こんな事實はあまり廣く知られてゐないけれども、彼が詩人として有名であると云ふことを知ると同時に、語學の天才であつたことも記憶して居りたいものであると思ふ。レルモントフはかうした生活の中での創作に對して可なり嚴酷な批評家でもあつた。かうしてゐるうちに、幾つかの詩を發表はして居つたが、際だつて人の心を惹くやうなことはなかつた。勿論名聲などには恐ろしく無頓着であつたから、一向焦る樣子もなかつたが、彼をして社會的に大きな影を投げ出させる機會は突然やつて來た。それは彼に取つて少なからぬ恐慌を齎らさずに置かなかつた詩聖プウシュキンの死であつた。

一八三七年の冬、プウシュキンが死んだと云ふ報知を受けたときレルモントフは殆んど夢心地になつて了つた。そしてその時まで持ち合せてゐないやうに思はれた鋭い深い悲嘆を感じたのであつた。

一時はプウシユキンの盛名を嫉んで、私かにプウシユキンの敵を以つて自ら任じてゐた彼は、その時の心持ちを一時に失つて了つて、この偉大なる詩聖の突然の死を悼む情は恐ろしきまで深かつたのであるが、その一方ではプウシユキンに對する同情が、詩聖の生存中彼を絶へず侮辱してゐた輕薄なインテリゲンチヤに向つて燃ゆるやうな烈しい憤怒と化して了つたのである。

憤怒はレルモントフを驅つて「プウシユキンの死に就て」と云ふ感情そのもののやうな極端なプウシユキンの哀悼の詩を作らせた。

それまで、發表してゐた作物は容易に檢閲官の目を通つて頗る無事なものばかりであつた。が、今度はさう行かないで彼に或る結果を與へたのである。

其哀悼詩の末尾に、當時プウシキンを殺した人々のうちに或る一人の男と會話した文句をつけ加へて、そこへ持つて來て、プウシキンの誹謗者達を自由と天才と眞理の虐殺者だと罵つたので、而もその調子があまりに烈しかつたゝめに、檢閲官の目にとまり、事實はやがて常々プウシキンを排斥してゐた或る二人の宮中の官吏の耳に入つたと云ふのである。その官吏は有名階級に屬する人々であつたゝめに、有名と云ふことが、横暴とか手前勝手と云ひ替へられる露西亞なのだから、その有名な二人の官吏は、レルモントフの熱罵を、てつきり自分達に對するものだと取つて了て、皇帝へ詩人の行動を惡しざまに誇張して奏上した上に、是非彼を處刑するやうにと願ひ出たわけであつた。その結果として、官吏の憤慨は到頭レルモントフをコウカシヤへ流刑にさせて了つた。

プウシキンの哀悼詩がまだ姦しく世間の人々の口喧傳されてゐる間に、作者は、彼に取つて懷かしいコウカシヤへ追はれて了つた。一口に云へば、レルモントフの名はかうしたきつかけから急に世間へ知れ渡るやうになつたのであるが、それはレルモントフ自身すら全く夢にも豫期しないことであつた。レルモントフには祖母に當るアルセニエフ夫人は金と力を盡して孫の刑期を一年に縮めたが、レルモトフになつて見ると、どちらかと云へば、不便な淋しいコウカシヤにいつまでも留まつてゐたかつたのであつた。

21事實に於てもレルモントフの詩想はこの壯嚴と醇美と華麗の流謫地であるコウカシヤの風物に刺戟されずにゐなかつた。今日彼の詩を露西亞古典文學の中に見ることの出來るのは全く、この時の流竄の賜だと云ふことが出來るだらうと思ふ。コウカシヤに於ける作詩の一つである 皇帝イヴン・ワシリヽエウイッチと勇ましき商人カラシニコフ」は遂に彼をしてレルモントフの名を永遠に露西亞文學史の上に植えつけた。その後嘗つて護衛兵の學生時代に試みた「惡魔」を漸く完成して公表した。やがて一年は過ぎ、嘗つて彼を迫害した人々の住むペテルスブルグの軍隊へ戻つた時分には、露西亞が他國に向つて大いに誇り得るだけの詩人を迎へに出集した社交界の貴族達や貴婦人達や叔女たちに華々しく日夜絶へ間なく圍繞されたと云ふことを、彼自身が例の皮肉な調子で嘲笑するやうに手紙に認めて